

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (62)

国家公務員宿舎指宿宿舎建設に
伴う発掘調査報告書

しんばんしょうしろ
新番所後Ⅱ遺跡

1992年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、国家公務員合同宿舎指宿宿舎建設に先だって、平成3年度に鹿児島県教育委員会が実施した新番所後Ⅱ遺跡の発掘調査の記録です。

新番所後Ⅱ遺跡からは、縄文時代晩期、弥生時代中期及び古墳時代の遺物が数多く発見されました。

なかでも、開聞岳の噴出物である火山灰でパックされた植物の化石などは、平安時代の指宿地方の自然環境などを明らかにする資料として注目されています。

南薩地域の先史時代や歴史時代の解明に貴重な手掛りとなるこの報告書を、地域の歴史研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった大蔵省九州財務局鹿児島財務事務所、国立指宿病院、指宿市教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

平成4年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 大 田 務

例 言

1. 本報告書は、平成3年度に実施した国家公務員宿舍指宿宿舎建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名の「新番所後Ⅱ遺跡」は、昭和49年に発掘調査が行われた「新番所後遺跡」と同じ国立病院敷地内にあるので、混同を避けるために「Ⅱ」という名称を付した。新番所後遺跡とは直線距離にして約500m離れている。
3. 調査の組織は経過のなかで記した。
4. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章の第1・2節、第Ⅳ章の第1節、	
第Ⅴ章、第Ⅵ章、第Ⅶ章	繁昌正幸
第Ⅷ章の第2・3節、まとめ	長野真一
5. 発掘調査については、鹿児島市立玉龍高校教諭 成尾英仁氏に土層について指導を受けた。また、指宿市教育委員会社会教育課主事下山覚氏には、多くの教示を受けた。
6. 本報告書作成にあたり、県文化財保護審議会委員河口貞徳氏の指導・助言を受けた。また、玉龍高校教諭成尾英仁氏には原稿を戴いた。(第Ⅲ章の第3節に掲載)
7. 実測・図面等の作成・写真撮影は執筆者が分担して行った。
8. 本書で用いた遺物番号は、挿図・図版の番号と一致する。
9. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
10. 本報告書作成にあたり、指宿市教育委員会に資料をいただくと共に、以下の報告書を参考にさせていただいた。

1990年3月月刊『中島ノ下遺跡』(第Ⅱ章で参考にした)	
1991年3月月刊『橋牟礼川遺跡』(第Ⅲ章で参考にした)	
11. 出土遺物の管理・保管は、(仮称)県立埋蔵文化財センターで一括して行っている。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	3
第 I 章 調査の経過	5
第 1 節 調査に至るまでの経過	5
第 2 節 調査の組織	5
第 3 節 調査の概要	6
第 4 節 調査の経過（日誌抄）	6
第 II 章 遺跡の位置及び環境	10
第 1 節 遺跡の環境	10
第 2 節 周辺遺跡	10
第 III 章 遺跡の地形及び土層	13
第 1 節 遺跡の地形	13
第 2 節 遺跡の土層	13
第 3 節 新番所後Ⅱ遺跡の開聞岳火山噴出物	17
第 IV 章 縄文時代	23
第 1 節 概 要	23
第 2 節 土 器	25
第 3 節 石 器	34
第 V 章 弥生時代	38
第 1 節 概 要	38
第 2 節 土 器	39
第 VI 章 古墳時代	43
第 1 章 概 要	43
第 2 章 土 器	44
第 VII 章 古墳時代以降	51
第 1 節 概 要	51
第 2 節 樹 痕	51
まとめ	53
図 版	55
あとがき	

挿 図 目 次

第1図 周辺の地形 ……………	7	第18図 石器（1） ……………	35
第2図 周辺遺跡 ……………	11	第19図 石器（2） ……………	36
第3図 標準土層 ……………	14	第20図 石器（3） ……………	37
第4図 土 層 ……………	15~16	第21図 弥生時代中期主要遺物出土状況	38
第5図 遺跡周辺の地形 ……………	17	第22図 甕形土器（1） ……………	40
第6図 新番所後Ⅱ遺跡地質柱状図 …	18	第23図 甕形土器（2） ……………	41
第7図 ルーズ火山礫（LL）の粒度分析	19	第24図 壺形土器 ……………	42
第8図 ルーズ火山礫（LL）の対比 …	21	第25図 古墳時代主要遺物出土状況 ……	43
第9図 調査地点 ……………	23	第26図 甕形土器（1） ……………	45
第10図 縄文時代晩期主要遺物出土状況	24	第27図 甕形土器（2） ……………	46
第11図 土器（1） ……………	27	第28図 甕形土器（3） ……………	47
第12図 土器（2） ……………	28	第29図 壺形土器 ……………	48
第13図 土器（3） ……………	29	第30図 埴 ……………	49
第14図 土器（4） ……………	30	第31図 高坏 ……………	50
第15図 土器（5） ……………	31	第32図 古墳時代以降樹痕検出状況 ……	51
第16図 土器（6） ……………	32	第33図 参考 樹痕検出状況 ……………	52
第17図 土器（7） ……………	33		

表 目 次

第1表 周辺遺跡 ……………	12
----------------	----

図 版 目 次

図版1 上 遺跡遠景（魚見岳より）		・下 遺跡近景（国立指宿病院より） ……	55
図版2 上 遺跡近景（遺跡東側より）		・下 遺跡近景（西側より） ……………	56
図版3 上 調査風景（東側より）		・下 調査風景（東側より） ……………	57
図版4 上 土 層（全体）		・下 土層（中央部） ……………	58
図版5 縄文時代晩期遺物出土状況（1）	……………		
図版6 縄文時代晩期遺物出土状況（2）	……………		
図版7 古墳時代以降樹痕検出状況	上（北側より）	・下（東側より）	……
図版8 縄文時代晩期土器（1）	……………		
図版9 縄文時代晩期土器（2）	……………		
図版10 縄文時代晩期石器	上 打製石斧	・下 磨製石斧ほか	…
図版11 弥生時代中期土器	上 甕形土器	・下 壺形土器	……
図版12 古墳時代土器（1）	甕形土器 ……………		
図版13 古墳時代土器（2）	上 甕形土器, 埴	・下 高坏	……
図版14 植物遺体	上 木の葉	・下 シダ類	……

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

大蔵省九州財務局は、国立指宿病院敷地内にある老朽化した同病院職員宿舎の一画を厚生省から払い下げを受け、ここに新たに鉄筋コンクリート造りの国家公務員宿舎（指宿宿舎）3棟を建てることを計画した。

ところが、この地域は昭和49年に発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡である新番所後遺跡と同じ敷地内にあることから、遺跡のあることが予想されることを県文化課から指摘された。これを受けて九州財務局（鹿児島財務事務所）は県文化課と協議を行った。その結果、当該地域の分布調査を行うと共に、指宿地方に堆積している開聞岳噴出物のコラ層が厚いことが考えられたため、パワーショベルにより一部ボーリング調査を実施して、遺跡の存在や範囲について確認することになった。平成2年10月に行われた調査により、宿舎建設予定地のおよそ西側半分には池田湖火山噴出物の一つである池田湖火山灰（通称池田シラス）がすぐに検出され、遺物包含層は完全に破壊されていることが判明した。しかし、東側半分からは土器片が出土し、包含層が残っていることがわかった。

この結論を受けて、鹿児島財務事務所は埋蔵文化財の保護を図りながら宿舎建設を進めるために設計の検討に入った。しかし、遺物包含地を完全に避けて宿舎を建設することは不可能であることがわかり、県文化課と協議を重ねた。その結果、宿舎建設予定地のうち遺物包含層が残っていることが確実な箇所について発掘調査を実施することになった。調査主体は鹿児島県教育委員会（文化課）とし、調査の経費については九州財務局が負担することになった。

発掘調査は、当初1か月間で行う予定で平成3年10月21日から入ったが、次のような要因により、1か月間延長して12月13日まで実施する結果となった。

- ① 遺物包含層が平安時代・古墳時代・弥生時代中期及び縄文時代晩期の4層にもわたること
 - ② 東側にかけて急傾斜で下るために深さが最深部で5 m以上に及ぶこと
 - ③ そのための排土量が当初の予想を大きく上回って大量になったこと
 - ④ また、発掘作業員の安全を確保するため、深さ2 m以上に及ぶ場合は段掘りを行う必要があることから、宿舎予定地の中央から東側にかけて広域にわたって段掘りを行い、受水槽部分については一部2段の段掘りを行った結果、調査面積及び土量が大幅に増加したことなど
- 発掘調査の結果、4つの文化層の遺物はパンケース23箱にも及んだ。その後、（仮称）鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて、整理及び報告書作成作業を行った。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	大田 務
調査主体者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	向山勝貞
	”	課 長 補 佐	濱松 巖

調査企画	鹿児島県教育庁文化課	主体文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	吉元正幸
調査担当者	〃	主 査	長野真一
	〃	文化財研究員	繁昌正幸
事務担当者	〃	主 幹 兼企画助成係長	濱崎琢也
	〃	主 幹	枇杷雄二
	〃	主 事	新屋敷由美子

第3節 調査の概要

調査は、宿舎部分及び南東に離れた位置の受水槽について行った。鹿児島財務事務所職員が建物部分の杭打ちを行い、その範囲を順次掘り下げることにした。老朽化した病院宿舎の跡地であるため、その残骸の除去も含めて表土をパワーショベルにより取り除くことから始めた。

途中、水道管の破損や鉄・スレート製のパイプが多数埋まっていたため、作業に支障をきたした。表土除去後は、橋牟礼川遺跡の土層図を参考にしながら層位に従って掘り下げていった。2層～4層は既に失われており、5層の紫ゴラを完全に除去して6層面を検出することを最初の目標としたが、6層中に遺物が無かったため7層（青ゴラ）の上面を出すことにした。これは、青ゴラ降下時の樹木痕を検出するためであったが、調査区域全体にわたって樹木の痕跡を見出した意義は当時の環境解明の上で極めて大きいといえる。

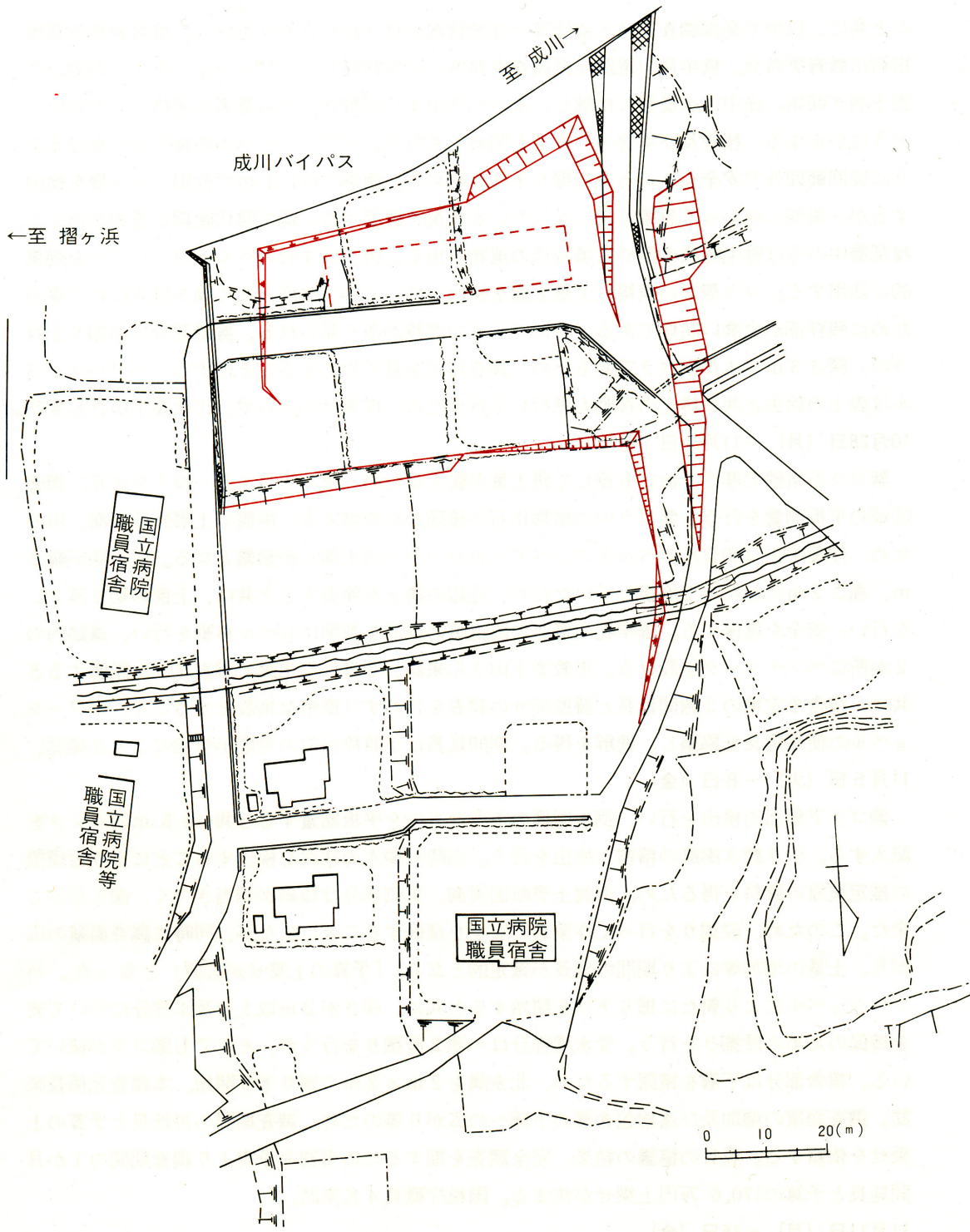
次の段階で、作業員の安全を確保するための段掘りの部分と、受水槽の部分についてパワーショベルで掘り下げた。5C層の紫ゴラ1次堆積の上面を検出し、当時の樹木痕の検出を行った。その後、7層上面の検出を目標に行い、既掘部分に揃え、これ以降を全面的に掘り下げることにした。8層及び9層は遺物包含層であるため、綿密に調査を行った。ただ、地形の傾斜から遺物は上の丘陵からの流れ込みと結論づけたため、主要遺物のみ平板測量を行った。10層は欠失していた。11層の暗紫ゴラは東側にかけて残っていたが、ほとんどは流失していたため樹痕は確認できなかった。12層は遺物包含層であり、綿密な調査を行った。13b層の火山灰は、今回噴出時期を確定できたことで貴重な発見であった。14層も遺物包含層である。綿密な調査に加えて主要遺物の写真撮影などを行った。15・16層は欠落している。17層の黄ゴラはブロックで入っている。18層に遺物は発見されなかった。19層は一部の地点で確認した。なお、8層面に焼土及び炉址状のものが検出されたが、各々粘土塊の流れ込み及び樹木の痕と判明した。

受水槽部分は相当に深く、極めて危険であったため、土層を写真撮影して記録するに留めた。

第4節 調査の経過（日誌抄）

平成3年10月21日（月）～24日（木）

プレハブ設置、発掘機材及び諸用具搬入。九州財務局佐藤さん、国立指宿病院海野・松本さ



第1図 周辺の地形

んと共に、現地で発掘調査及び水道管等の埋設状況に付き打ち合わせを行う。揖宿教育事務所、指宿市教育委員会、橋牟礼川遺跡発掘調査事務所への挨拶回り。パワーショベルにて西側より表土剥ぎ開始。途中、水道管に接触し、水が吹き出す。海野さんから業者に連絡してもらい、どうにか止まる。枝管及び本管のバルブも閉めてもらう。パワーショベルの後を追いかけるように旋回範囲外で安全なところから掘り下げを始める。西端では1.3 mで池田シラス層を検出するが、東側に向かって急激に深くなっている状況を確認する。縄文時代晩期の遺物が出土し、攪乱層中からは弥生時代中期や古墳時代の遺物が出る。排土は4台のベルトコンベアーを効果的に活用する。コラ層下の黄褐色土層上面を検出していくが、幾度となく繰り返された工事のために残存部が虫喰い状態である。特にパイプの埋設が多く見られる。擁壁部分の深掘りを行うが、深さ3 mでまだ紫ゴラであるため、調査状況を見て対応することにする。パワーショベルは表土の除去と共に排土の移動も併行して行うため、作業はかどらず。市教委下山さん来訪。

10月28日(月)～11月1日(金)

紫ゴラが東壁で厚さ1 mにも達して排土量が膨大なため、マルチローダー投入を決定。調査区域の平板測量を行う。紫ゴラ中の植物化石の種類がやや増える。南側の土層断面実測。雨のため、作業中止(30日)やベルトコンベアーのローラーの土落しが頻繁となる。南東隅が幅2 m、高さ2 mにわたって崩壊していたため、近辺の排土を除去すると共に、上部の切り落としを行い、安全を確保する。橋牟礼川遺跡の国道脇の標高を基準にレベル移動を行い、遺跡内の2か所にベンチマークを設ける。市教委下山さん来訪。2日、文化課で調査状況を説明すると共に、宿舍予定地の2週間延長と擁壁部分の調査を行わずに簡略な施設とすること、パワーショベルの使用延長を協議し、理解を得る。期間延長は予算枠内での対応が可能であることを確認。

11月5日(火)～8日(金)

紫ゴラ下層面の検出を行い、倒木樹痕の主要なものを平板測量すると共に0.5 mのコンタを記入する。引き続き樹痕の精密な検出を行う。当時の樹木の状況を検出することにより古環境の推定復原の資料を得るため。南側土層断面実測。東側部分は傾斜が相当きつく、深くなって来た。このため、段掘りを行って作業員の安全を確保することにしたが、同時に調査面積の広がり、土量の増加等により期間の延長が確定的となり、「予算の上乗せが必要」となった。パワーショベルにより新たに掘り下げを開始すると共に、深さが2 m以上に及ぶ部分について安全確保のための段掘りを行う。受水槽部分は一部2段掘りを行うが、それでも紫ゴラが続いている。宿舍部分は下層を確認するため、北東隅を2 m×2 mで掘り下げ開始。本課吉元係長来訪。調査面積の増加及び遺物包含層の下部への広がり等のため、調査期間の再延長と予算の上乗せを依頼する。翌日の協議の結果、完全調査を期するため当初の予定より調査期間の1か月間延長と予算の170,6万円上乗せが決まる。国税庁職員4名来訪。

11月11日(月)～15日(金)

拡幅2.5 m部分掘り下げ。紫ゴラ上面の検出後青ゴラ上面まで下げる。旧地形は調査区域のほぼ中央を分水嶺として、北・南両側に下っている。青ゴラ上面で清掃し、写真撮影。樹痕が

著しく、樹木が相当に広がっていたことが窺える。北東隅の深掘り、14層より縄文式土器出土。

11月19日（火）～22日（金）

9層掘り下げ。成川式土器の小片が多い。11層の暗紫ゴラは南東側で顕著になるが、北側では明瞭でない。南側中央部に、3か所の焼土と1か所の炉址状の遺構（？）検出。出土遺物・焼土などの平板測量及び0.5 m毎のコンタ記入。北及び南側の壁面に添って幅50cmのミニトレンチを設置し、掘り下げ開始。市教委下山さん、国立病院職員3名来訪。文化課濱崎係長、枇杷主査視察。植物化石同定の件で県立博物館に依頼に行くが、「諸般の事情から不可能。」との結論。鹿児島財務原口さんら4名来訪、調査期日の最終確認。市教委知花さん、加世田市教委上東さんと共に来訪。

11月25日（月）～29日（金）

13層掘り下げ。東側から西側に向かう。東隅にピット4基検出するが、判然としない。遺物の出土は疎となる。南側から北側にかけて急激に下がっている。西端との比高差が4.5 mにも及ぶ。先週確認した炉址状のものは自然木の炭化したものと結論づけられ、焼土と思われたものも火熱を受けておらず、指宿地方特有の赤紫色の粘土が転がって来たもので、近辺に層があることを市教委下山さんから教示を受ける。週半ば、2日間に亘って豪雨・雷雨のため作業中止。北東隅は水没。14層掘り下げ開始。北側を幅1 mで掘り下げ、遺物包含層の深さ及び厚さの確認を行う。九州財務局管理部井本さんら3名、原口さんと共に来訪。

12月2日（月）～6日（金）

13層出土遺物の平板測量。弥生時代中期の遺物が中心で、軽石も割合に多い。深掘り箇所から縄文時代晩期の遺物出土。14層下部に多い。北側の西端でようやく池田シラス層を検出し、そのやや上位に17層の黄ゴラがあり、相当堅固である。縄文晩期の遺物は黒川式と思われ、粗製の深鉢、黒色研磨の浅鉢共に出土する。石器も磨製石斧・剥片石器などが出土する。黄ゴラの下は後期相当であるが、ライン不明瞭で遺物も出土しない。黒色研磨の浅鉢の凹線部分に赤色塗彩のものが見られる。6日、雷鳴轟き、午前中で作業中止。市教委下山・渡部両氏来訪。5日、成尾先生現地指導。13層と14層の間の開聞岳起源の火山灰を確認。対岸の大隅半島の大根占町では、これより上に弥生式土器が出土しているとの教示を受ける。

12月9日（月）～13日（金）

14層を東から西に向けて掘り下げる。遺物少量。清掃後、出土状況写真撮影。石器が相当数見られる。遺物の出土状況を平板測量する。深掘りは、西端では池田シラス層までを早く検出できたが、中央から東端にかけてはなかなか辿り着かない。土層の断面実測。受水槽部分、壁面清掃後写真撮影。ベルトコンベア等を調査地から引き上げる。作業用具等の土落とし、水洗い。諸用具搬出準備、搬出。市保健衛生課尾辻さん来訪。12日、本課職員倉元・堂込両文化財研究員、山川町調査の際に立ち寄る。13日、橋牟礼川遺跡発掘事務所・国立指宿病院（黒瀬事務長）に終了の挨拶。13日をもって現場での発掘調査の全てを終了する。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

第1節 遺跡の環境

指宿市は、薩摩半島の東南部に位置する。北は田貫川を境に喜入町と接し、西は指宿スカイラインの走る薩摩半島の背脊を境として穎娃町と接する。南は九州最大の広さを誇っている池田湖を境に開聞町、天然の良港山川港をもつ山川町と接している。東は錦江湾を隔てて大隅半島に対峙する。

霧島火山帯に含まれていることから、火山性の地形が多い。錦江湾は阿多カルデラに起因するものであるし、池田湖はカルデラ湖として著名で、山川湾や成川盆地、鰻池などはマール（爆裂火口）である。薩摩富士と形容される開聞岳や鬼門平の断崖など枚挙にいとまがない。

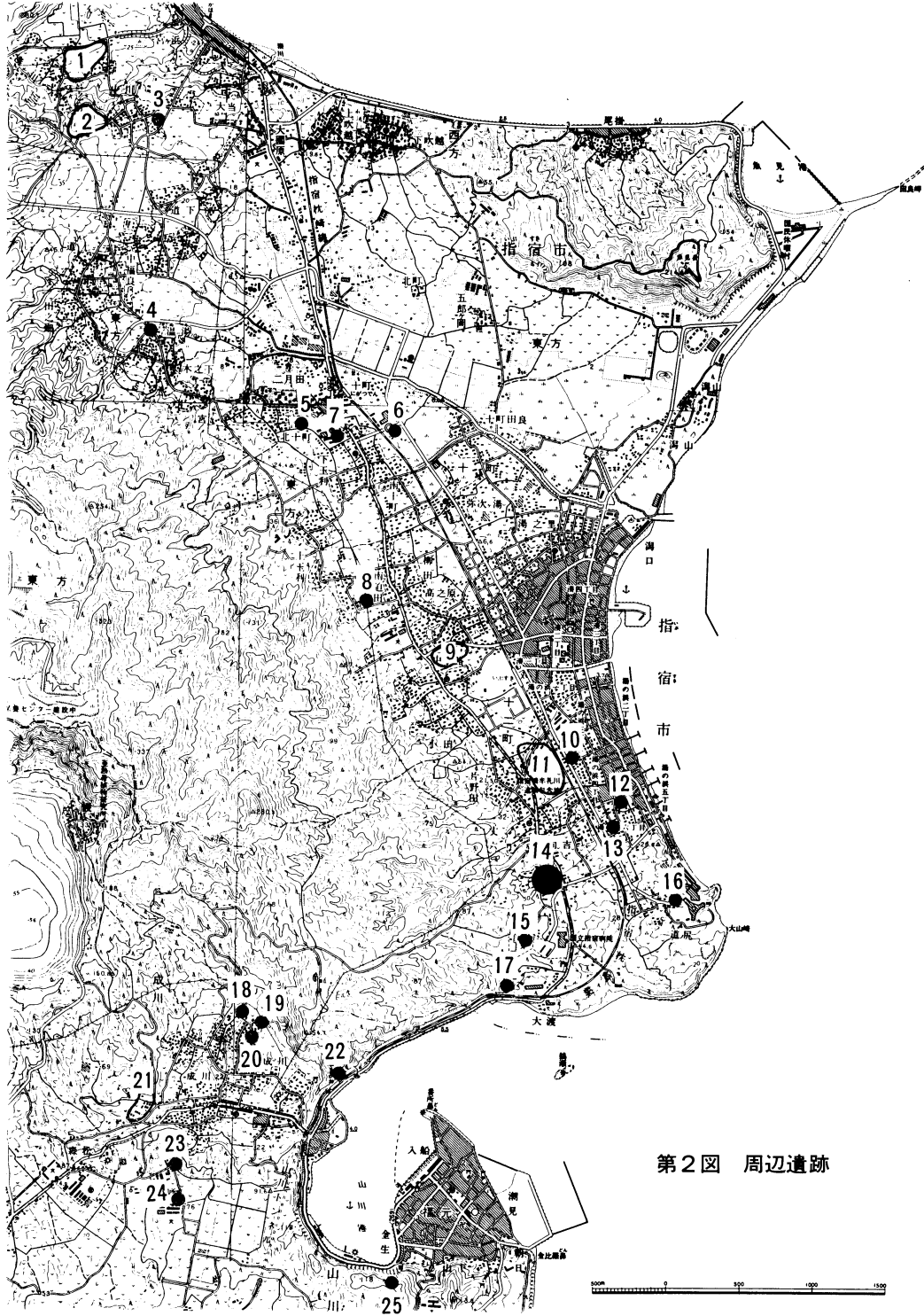
今回調査した新番所後Ⅱ遺跡は、指宿市十二町字尻垂ノ上に所在する。西方約4kmのところ、鰻池マールの外壁をなす標高280mの山があり、そこから割合に緩やかに下りた山裾にあたる。遺跡付近には、橋牟礼川・山王川などの小河川が流れており、調査地点の近隣にも小さな流れが見られる。遺跡からなだらかな台地を800mほど下ると錦江湾に至る。

周辺は、木造平屋の国立病院宿舎が点在していたところであり、国道220号線と近年開通した成川バイパスの交通量は多いものの、国立病院の近辺は木々も多く、割合に閑静なところである。西方には小さな丘があり、病院にかけては熱帯植物も多く見られる。夜間は、鳥や小型の獣たちの鳴き声が聞かれたり、姿が見られたりするところでもある。東側にかけての台地は畑と化しているが、遺跡の周りはまだ自然が概ね残っていることを如実に示している。

第2節 周辺遺跡

本遺跡の周辺、というよりも、指宿市は全体的に遺跡数が多い。これは、指宿高校に籍を置いた先学達の功績を筆頭に、農政に伴う分布調査や確認調査の多さ、それに加えて、現在市に3名いる文化財専門職員の精力的な活動も見のがせない。1990年3月に刊行された『中島ノ下遺跡』報告書によると、99にも上る遺跡が記載されている。

国立病院敷地内の指宿養護学校は1974年に発掘調査が行われた新番所後遺跡であり、弥生式土器や土師器・須恵器など古墳時代の遺物を出土した。北約0.5kmには橋牟礼川遺跡がある。火山灰層を挟み弥生式土器と縄文式土器とが明確に分かれたことから学史上貴重と認められ、国指定史跡となっている。また、西南約1kmの火口壁の懸崖の地には、上層に弥生式土器、下層に指宿式土器と呼ばれる縄文時代後期の土器が出土する大渡遺跡、立石土壙墓や土壙墓に夥しい人骨が埋葬され、古墳時代の在地の土器で標準形式となっている成川式土器を出土した成川遺跡がある。本遺跡から西の方、海岸近くには小高い砂丘となっている大山崎遺跡があり、縄文時代後期市来式と指宿式土器が確認されており、道路を隔てた摺ヶ浜遺跡からは、古墳時代成川式の壺や高坏が出土している。このように、本遺跡周辺には数多くの遺跡が群在し、指宿の地が古くから住みやすい土地として知られ、集落が形成されていたことがわかるのである。



番号	遺跡名	所在地	地形	時代	出土遺物	備考
1	宮之前	指宿市西方宮之前	台地	古墳・奈良	成川式・須恵器・住居跡	昭和55年発掘
2	横瀬	〃 〃 横瀬	台地	縄文・弥生・古墳・歴史	縄文土器・弥生土器	昭和56年発掘
3	中川	〃 〃 中川前平	台地	縄文・弥(後)	指宿式・市来式・草野式・石器・住居跡	
4	道上	〃 〃 道上	台地	弥生(後)	壺形土器・甕形土器	
5	奥玉神社境内	〃 十町九玉	台地	弥生(後)・古墳	弥生土器・土師器	
6	矢石	〃 〃 二月田矢石	扇状地	弥生(後)	甕形土器	
7	指宿高校校庭	〃 〃 馬場上・九玉上	台地	弥生(後)・古墳	弥生土器・土師器・須恵器・住居跡	指宿市誌
8	南迫田	〃 〃 南迫田	台地	弥生(後)	弥生土器・石器	
9	高田原	〃 十二町高田原	台地	弥生・古墳	弥生土器	昭和54年発掘
10	南丹波	〃 〃 迫北南丹波	台地	弥生(後)	壺形土器・甕形土器・手手づくね・埴・坏	指宿市誌
11	橋牟礼川	〃 〃 下里丈六	台地	縄文(中～晩) 弥生(中～後)	黒川式・夜臼式・市来式・指宿式・阿高式・刀子・鉄鏃・石皿・磨製石器・打製石器・人骨・住居跡・壺形土器・甕形土器・高坏・埴	大正13年国指定史跡 指宿市誌ほか
12	摺ヶ浜	〃 〃 摺ヶ浜	台地	弥生(後)	壺形土器・高坏	
13	朝鮮ヶ丘	〃 〃 朝鮮ヶ丘	台地	弥生(後)	壺形土器	
14	新番所後Ⅱ	〃 〃 尻垂ノ上	丘陵	縄文(晩)・弥生(中)・古墳	黒川式・打製石斧・甕形土器・壺形土器	本報告書
15	新番所後	〃 〃 新番所後	丘陵	弥生(後)・古墳	壺形土器・甕形土器・高坏・須恵器・土師器	昭和49年発掘
16	大山崎	〃 〃 大山崎	台地	縄文(後)	指宿式・市来式	揖宿史談創刊号
17	大渡	〃 〃 大渡	台地	縄文(後)・弥生(後)	市来式・指宿式・石皿・軽石加工品・人骨	指宿市誌ほか
18	下原	山川町成川下原	沖積地	弥生	弥生式土器	
19	神方	〃 〃 神方	火山性盆地	古墳?歴史?	蓋付壺形土器(須恵器)	
20	神方	〃 〃 神方今村	旧火口沖積地	弥生(後)	壺形土器・鉢形土器・甕形土器・高坏	
21	成川	〃 〃 曲道	台地	縄文(前～後)・弥生・古墳	集石・須玖式・甕棺・形土器・高坏・鉄剣・人骨・住居跡	昭和33年発掘 昭和55・56年発掘
22	内山	〃 〃 内山	旧火口壁台地	縄文(中・後)	指宿式	
23	川口坂	〃 〃 川口坂	台地	弥生(後)	弥生式土器	
24	山根貝塚	〃 〃 山根	台地	弥生(後)	壺形土器・甕形土器・高坏・鉢形土器・獣骨・貝殻	昭和37年6月出土
25	福元洞窟	〃 福元	洞窟崖下	弥生(後)	石器・銅鏡・骨角器・須恵器・人骨・骨製品	山川町史ほか

第1表 周辺遺跡一覧表

第Ⅲ章 遺跡の地形及び土層

第1節 遺跡の地形

遺跡は、鰻池マールの火口壁をなす標高280mの山から緩やかに下りた山裾にあり、これから東側、海岸へ向かっては極めて緩やかな傾斜をもつ台地が広がっている。遺跡付近の標高は約32mである。国立指宿病院の敷地内にある新番所後遺跡の標高が約60mであり、本遺跡との比高差は30m近くとなり、距離が500m程度にすぎないことからすると、2つの遺跡間は相当な段差をもって所在することになる。これは、本遺跡との距離がほぼ同じく500m程度の橋牟礼川遺跡の西側に当る国道の標高が19.4mであることから、本遺跡との比高差は12m程度と小さいことと対照的である。また、本遺跡から海岸にかけて広がる台地には数多くの小河川があり、今回の調査地点のすぐ脇にも、2m程の幅をもつ小川が少ない流量ながら流れている。

遺跡の西側約300mには小さい丘があるが、本遺跡にかけては割合に急な傾斜で下って来ている。発掘調査の結果からも土層の急傾斜が確認されたことから、旧地形も現在とほぼ同様な傾斜のきつい地形だったことが窺える。国立病院の職員宿舎は、この急傾斜の丘陵を段状に切って作られたと思われる、調査地点の西約50m以西は本来の地形が残っていると推定される。土層図によると、10mについて約2.2mも下がっている（約22%の勾配）ことから、流水作用等による遺物の転落が予想されていた。

ただ、この急傾斜がそのまま海岸まで続くかというところではないようである。橋牟礼川遺跡付近の地層は、1980年刊行の報告書を見ると割合に平坦であり、現在の地形もそうであることから、本遺跡から東にかけて急傾斜で下っていた地形も、しばらく行くと緩やかな傾斜に向かい、やがて平坦になると考えられる。本遺構の東端（受水槽部分）で深さ4m以上に及ぶ紫ゴラも、橋牟礼川遺跡では地表下約1m内外のところに検出され、層厚50cm程度となることからそれは理解されると思われる。

第2節 遺跡の土層

本遺跡の発掘調査に際しては、指宿市教育委員会が計画的に発掘調査を行っている指宿駅西側の都市計画に伴う橋牟礼川遺跡が標準としている土層図を利用した。これは、指宿市南部における橋牟礼川遺跡周辺の土層の同定を行うことにより、時代・時期の比定を可能にし、各遺跡の時代・時期的なあり方を追求していく資料とするためである。今後、この地域の調査に際しては、統一的な基準としてこれを用い、土層を比定させる必要があると考える。

橋牟礼川遺跡の標準土層及び本遺跡の土層を次に掲げる。

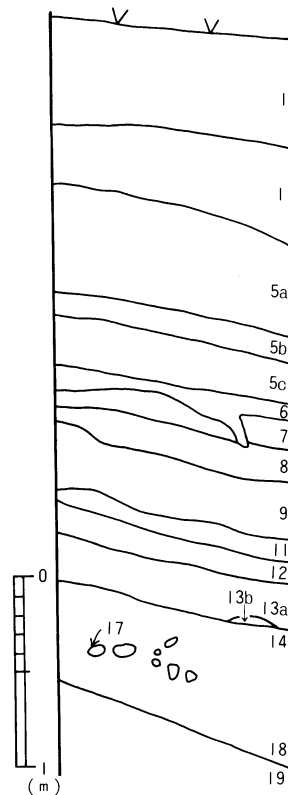
図からわかるように、本遺跡では、表土の違いを別にしても、2～4層及び10層、15～16層が欠失するという違いがわかる。これは、旧地形の違いに加えて、土層の堆積以降の流失や耕作等による喪失、それに地域差により当該土層の堆積が見られなかったことなどに起因するものであろう。

橋牟礼川遺跡の標準土層を基本とした本遺跡の土層は次のとおりである。

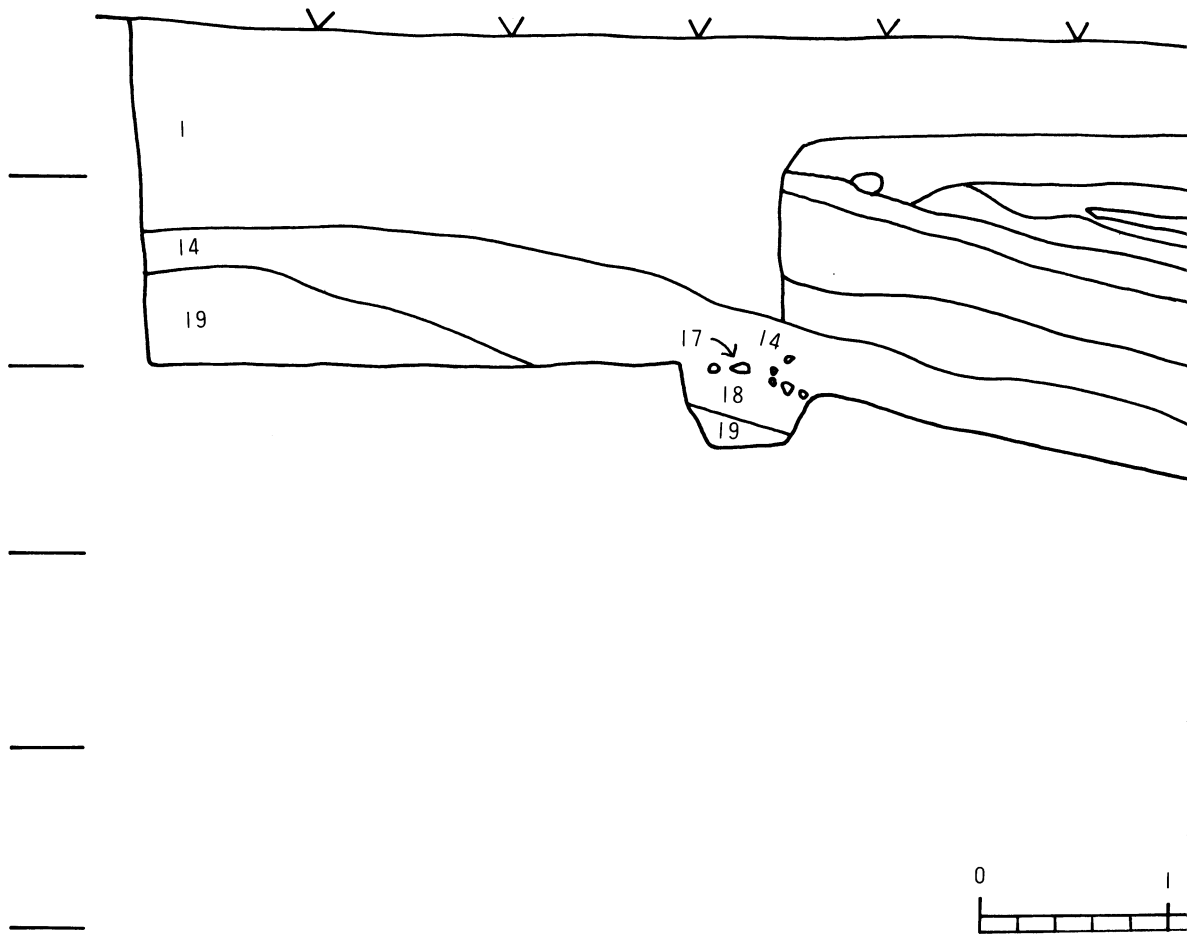
- 1 層 表土 (現耕作土)
- 2 層 暗灰色土層 [近世~現代] ……………欠失
- 3 層 黒灰色土層 [近世~現代] ……………欠失
- 4 層 黒色土層 ……………欠失
- 5 層 紫色固結火山灰層 (紫ゴラ)
 - 5 a 層 仁和年間の噴出物の一次堆積 (二次堆積は大部分流出)
 - 5 b 層 貞観年間の噴出物の二次堆積
 - 5 c 層 貞観年間の噴出物の一時堆積
- 6 層 明黄褐色土層 [平安]
- 7 層 青色固結火山灰層 (青ゴラ)
- 8 層 橙色土層 [古墳] ……………欠失
- 9 層 褐色土層 [古墳] ※
- 10 層 赤橙色粘質土層 [弥生中~後]
- 11 層 暗紫色固結火山灰層 (暗紫ゴラ)
- 12 層 明褐色土層 [弥生中以前] ……………欠失
- 13 層 暗褐色小石混層 [弥生中以前]
 - 13 a 層 暗褐色小石混層 ※
 - 13 b 層 灰色火山砂礫層 (開聞岳起源・今回時期確定)
- 14 層 赤褐色小石混シルト質土層 [縄文後~晩] ※
- 15 層 赤褐色砂粒混シルト質土層 [縄文後~晩] ……………欠失
- 16 層 黒褐色~黒色パミス混シルト質土層 [縄文後~晩] ……………欠失
- 17 層 暗青灰色固結火山灰層 (黄ゴラ)
- 18 層 灰褐色砂質土層 [縄文後]
- 19 層 池田湖火山灰層 (池田シラス)

() 書きは、1層の現耕作土以外は、火山噴出物の呼称である。5・7・11・13b・17層は、すべて開聞岳を噴出源とし、19層は池田湖を噴出源とする。

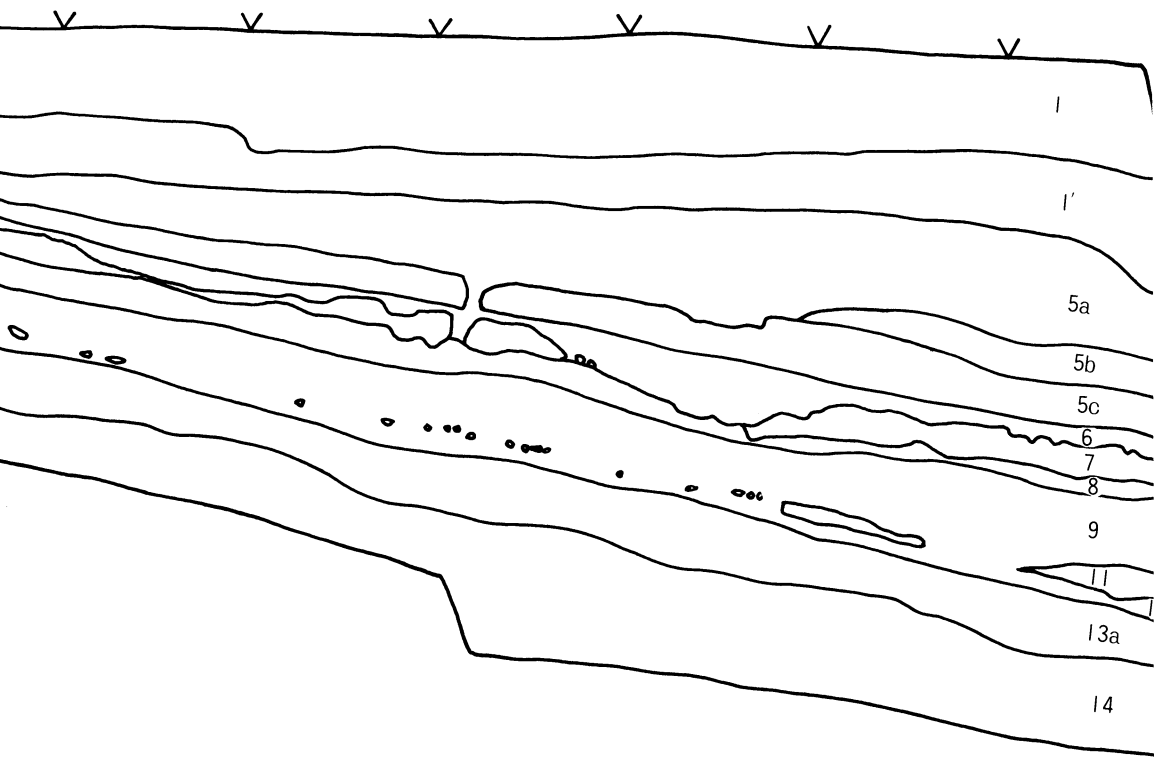
[] 書きは、橋牟礼川遺跡で確認している遺物包含層の時代・時期を表わす。[] の後部に付してある※印は、本遺跡の遺物包含層である。



第3図 標準土層

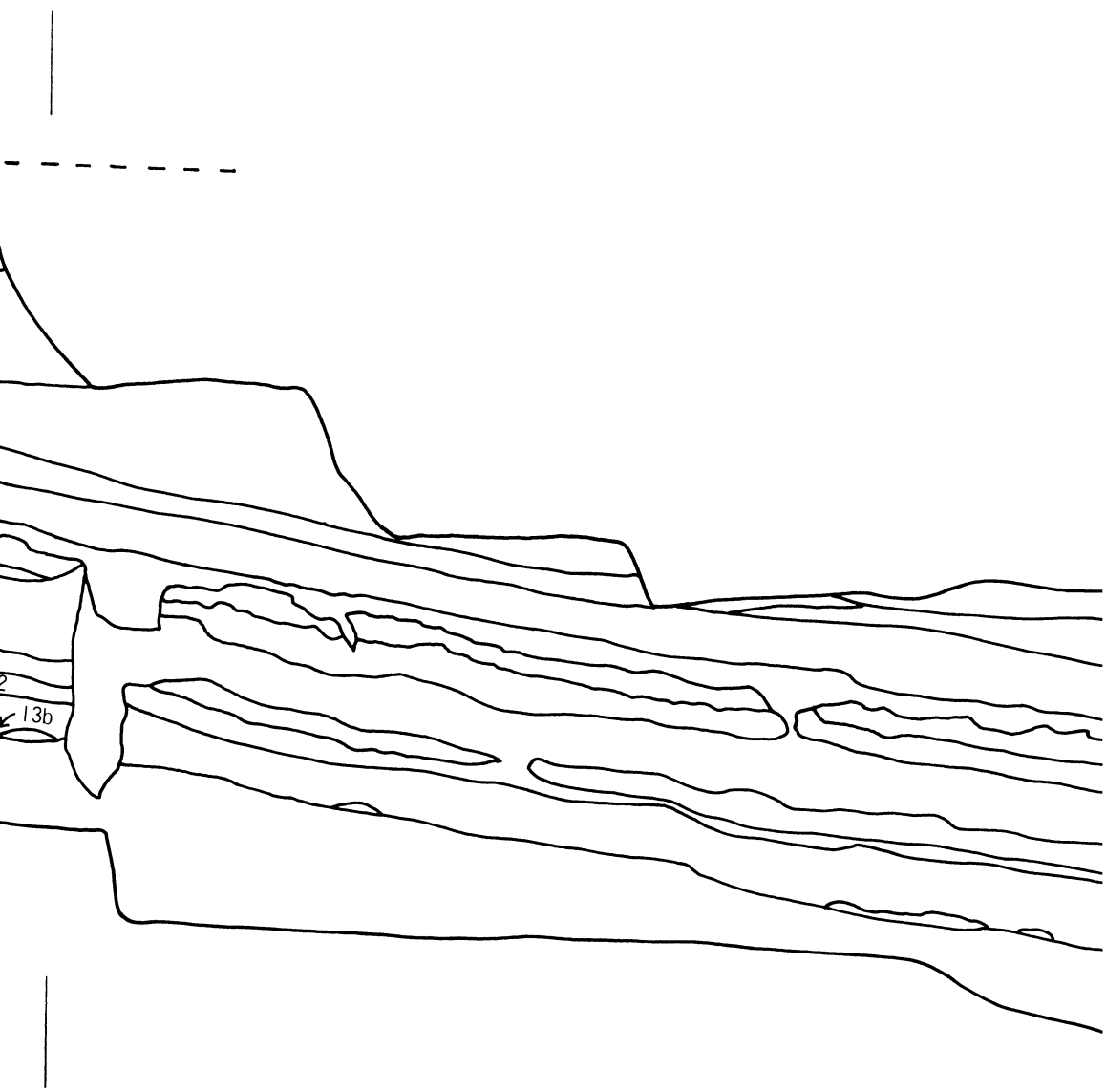


第4図 土層



2 m

(北側断面)

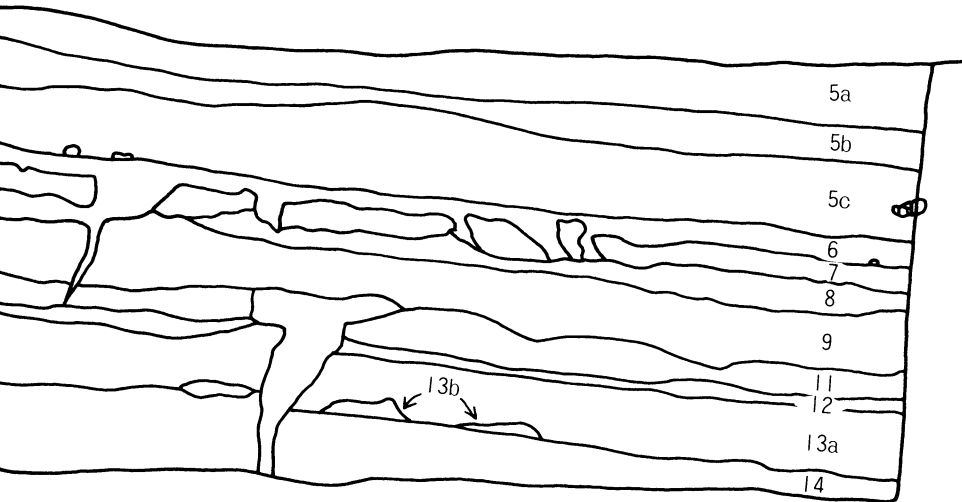


東

—— 33 m

—— 32 m

—— 31 m



—— 30 m

—— 29 m

第3節 新番所後Ⅱ遺跡の開聞岳火山噴出物

1. 地形と地質の概略

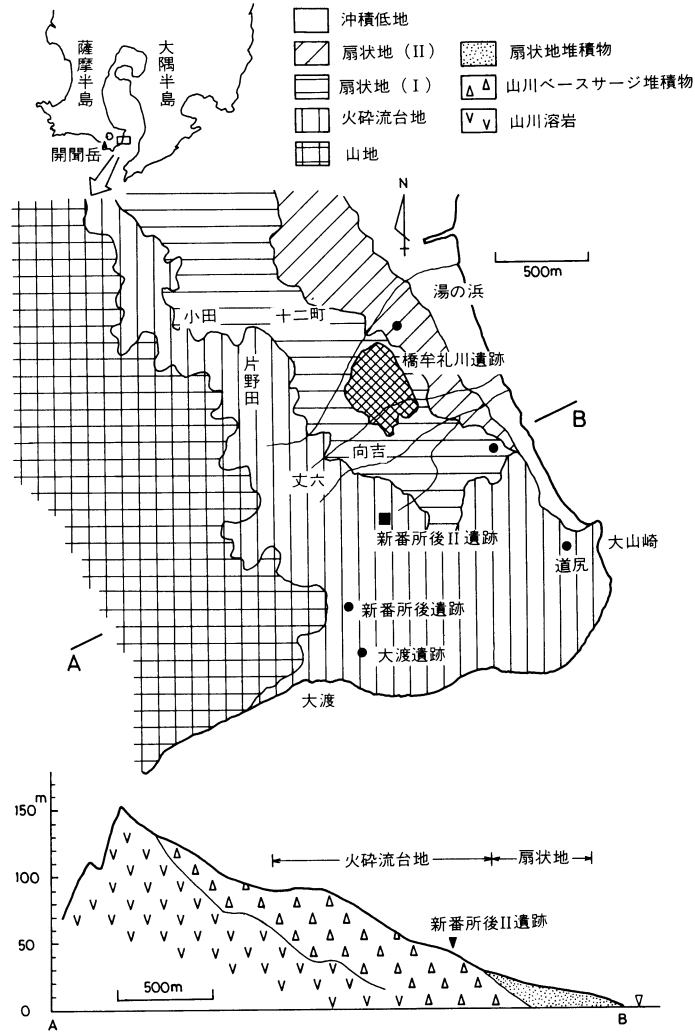
新番所後Ⅱ遺跡はゆるやかな山容を持つ指宿火山群の裾野に位置し、付近一帯は山川ベースサージ堆積物のつくる幅の狭い火砕流台地が取り巻いている。遺跡の旧地形は東側へやや大きく傾斜しており、基盤の火砕流台地の浸食地形を反映していると考えられる。

遺跡周辺の基盤をつくる岩石は温泉変質を受け粘土化した安山岩であるが、直接の基盤となっている堆積物は約5500年前に池田カルデラ内から噴出した池田湖火山灰(成尾・小林, 1980, 1984)である。この火山灰はややピンク色を帯びた白色の細粒～中粒火山灰で、火山豆石を含み細かい成層構造を持つ特徴があり、遺跡内では旧地形に平行に堆積している。

池田湖火山灰の上には、開聞岳起源の5枚の火山噴出物およびその二次堆積物や腐植土が2～3mの厚さで堆積しているが、上位に堆積する2枚の噴出物は30cm～50

cmの厚さで堆積し、さらにそれぞれ数層に区分される。これに対し下位の3枚の噴出物は薄く、ブロック状に断続しながら堆積している。

開聞岳起源の5枚の噴出物は、下位から ①黄色硬質火山灰・黒色粗粒火山灰 ②ルーズな軽石質火山礫・細粒火山礫 ③暗紫色火山灰・火山礫 ④黒灰色スコリア・青色火山灰 ⑤紫色火山礫・火山灰互層の順に堆積している。



第5図 遺跡周辺の地形

2. 開聞岳噴出物の特徴と対比

1. 黄色硬質火山灰・黒色

粗粒火山灰層

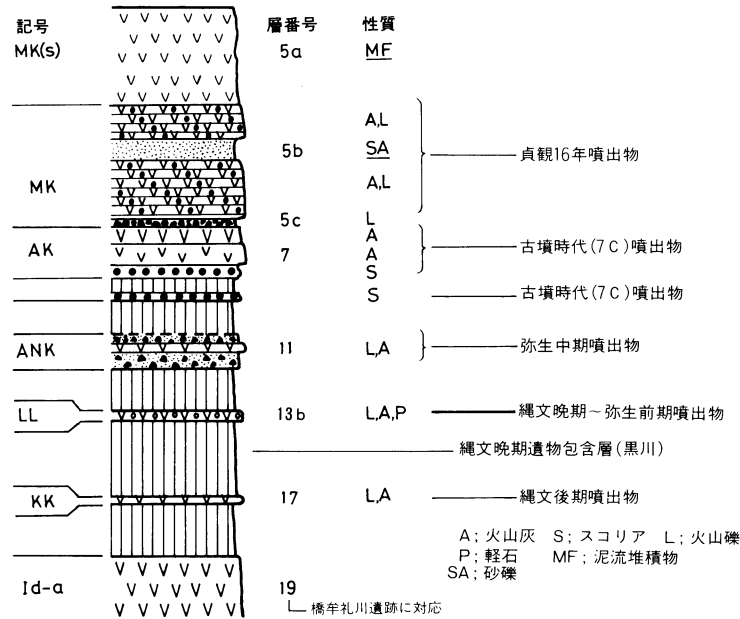
下層は薄い黄色を帯びた細粒の硬質火山灰で、十数cmの大きさの板状に割れている。径2～3mm大の円形の火山豆石を多量に含み、さらに径1mm程度で長さ4～5mmの空気の抜けた痕が認められる。その上部には真黒色をした、粗粒～中粒のガラザラした火山灰が堆積している。

この二枚の噴出物は連続しており、やや赤味を帯びた黄褐色を呈する火山灰質土壌中に、旧地形をほぼ平行に覆ってブロック状に断続しながら堆積している。厚さは5～6cm程度とほぼ一定であり、上位にある他の開聞岳噴出物にくらべ薄い。

以上のような特徴と、後述のように縄文時代晩期包含層の下位の層準であることから、この二枚の噴出物は開聞岳最初期噴出物の黄コラ（成尾，1984）に対比することができる。本遺跡から西側へ数km離れて位置する山川町成川遺跡では、この噴出物は厚さと噴出物が増し、硬質の黄白色火山灰・黒色の粗粒火山灰・硬質の黄白色火山灰の三層が確認される。東側へ数百m離れて位置する指宿市橋牟礼川遺跡では、本遺跡同様に硬質の黄色火山灰と黒色の粗粒火山灰の薄層がブロック状に断続しながら堆積している。

成川遺跡ではこの噴出物直下から指宿式土器が出土しており、その中には黄色火山灰が付着したものもある（成川遺跡，1983）。また、対岸の大隅半島田代町の立神遺跡でも指宿式土器に黄色火山灰が付着しており（立神遺跡，1990）、これらのことから噴火時期は縄文時代後期と推定される。

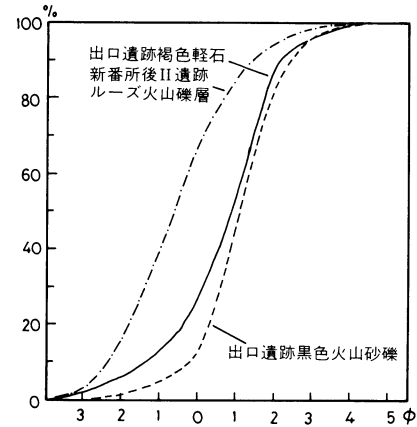
黄色火山灰は火山豆石を多く含んだ細粒の硬質火山灰であることから、噴火の際に水の関与があったと考えられ、マグマ水蒸気爆発の産物である。ただ、間に黒色のスコリア質の本質物質があることから、一時期は水の関与が全く無くなったか、ほとんど無かった状態があったと考えられる。



第6図 新番所後II遺跡地質柱状図

2. 軽石質火山礫および細粒火山礫層

下部はややオレンジ色を帯び角張った火山礫で、発泡の良くない軽石状を呈している。最大粒径1.2 cm程度で下位の茶褐色火山灰質土中にめり込んでいるものもある。厚さは2～3 cm程度でそれほど厚くない。上部はきわめてルーズな黒灰色の火山礫層で、まれに発泡の良くない1 cm大の石質スコリアが点在している。乾くと灰白色となり遠方から良く目立つようになる。この二枚の噴出物は連続しており、茶褐色火山灰質土中にブロック状に断続しながら堆積している。層の残りは比較的良好で、遠方からは一つの層として識別できる。



第7図 ルーズ火山礫(LL)の粒度分布

この層はルーズで乾くと白っぽくなり、最下部にややオレンジ色をした軽石質火山礫を伴っている。山川町成川遺跡では第10層が同様な特徴を持っており、その上位の第9層に弥生時代前期の遺物が包含されていることから、両者は同一のものと考えられる。

本層の上位には約20cmの厚さでやや黒味を帯びた茶褐色火山灰質土が堆積しており、下位にはやや赤味を帯びた黄褐色火山灰質土が堆積しているが、下位層は縄文時代晩期の黒川式土器包含層となっている。

3. 暗紫色火山灰・火山礫層

下部は灰色を呈するルーズな火山礫で、5 mm以下の大きさの安山岩質のスコリア質火山礫であり、垂円～垂角状のものが多く、まれに1 cm程度の角張ったスコリア質火山礫も点在する。マトリックスは風化した茶褐色火山灰が埋めているが、火山灰の量はそれほど多くなくザラザラしている。

中部は暗紫色を呈する粗粒～中粒の火山灰で、粒径の違いにより弱い成層構造をつくっている。火山灰は互いにゆるく固結し板状になっている。層の残りは良好であるが、場所によってはブロック状に断続しながら堆積している。厚さは5 cm程度で薄い。

上部は下部層とほぼ同じような性質を持つルーズなスコリア質の火山礫で、赤色を帯びた径2～3 mm大の変質岩片が下部にくらべやや多く点在している。中部の暗紫色火山灰が欠けている所では、下部の噴出物と連続している。

この層は上下にスコリア質火山礫があり、間に弱成層した粗粒の火山灰が挟まっていること、特徴的な暗紫色を呈することなどから、暗紫コラ（成尾，1984）と称される噴出物に対比できる。成川遺跡ではこの層の上下から山ノ口式土器が出土しており、弥生時代中期の噴出物と考えられる（成尾，1983）。

成川遺跡付近ではそれほど厚くないが、開聞岳近辺では噴出物の数と厚さが急激に増え開聞岳噴出物中最大となることから、開聞岳噴火史上最大規模の噴火の産物と考えられる。

4. 黒灰色スコリア・青色火山灰層

噴出物の違いにより4層に区分することができるが、最下部の堆積物とその上にある3枚の堆積物との間には薄い風化土壌が挟まれ、両者の間には若干の時間間隙があると考えられる。

最下部は良く発泡した黒灰色のスコリアで、下位の淡黄橙色を帯びた茶灰色火山灰質土壌との境界は明瞭となっている。スコリアは最大1.5cm平均3～4mm程度であり、レンズ状に堆積しルーズでくずれ易い。層の残りはあまり良くないが、遠方からは一つの層として識別することができる。

薄い風化土壌帯を挟んでその上に堆積する噴出物は、一連の噴火によるもので連続しており、下部から順に次のような特徴を持っている。

下部には良く発泡したコークス状の黒灰色スコリアが、約5cmの厚さで明瞭に堆積している。スコリアは最大2.5cm平均1cm程度であり、下位にあるスコリア層に較べ粗粒である。スコリアの上端付近には若干の火山灰が混じっており、全体に湿っぽくなり黒味が増している。スコリアの上部には青色を呈する硬質の細粒火山灰が堆積している。厚さは10cm程度であるが、間に粗い火山灰～細粒火山礫の薄層が挟まり三層に区分される。火山灰中には空気の抜けた痕が多数の小穴となっており、また径5mm以下の円形の火山豆石が多数含まれている。青色火山灰の上部には粘質がなくサラサラした黄褐色の火山灰が堆積し、その中には径2～3mm大の火山礫が点在している。

この層は成川遺跡や橋牟礼川遺跡でも明瞭に堆積しており、その特徴的な色調から青コラと称されている(成尾, 1984)。成川遺跡や橋牟礼川遺跡において上下に成川式土器の笹貫タイプが出土することから、古墳時代(七世紀頃)の噴出物と推定される(成尾, 1986)。

多量の火山豆石を含む硬質の火山灰であることや、空気の抜けた痕が多数存在することなどから、噴火に際し水の関与があったと推定され、黄コラ同様マグマ水蒸気爆発の産物と考えられる。

5. 黄褐色火山礫・紫色火山礫火山灰互層

最下部は黄褐色の角張った火山礫であり、下位の火山灰層にめり込んで堆積している。ほとんどが弱く発泡した安山岩質のスコリア状岩片であるが、変質した安山岩片および新鮮な安山岩片もかなり含まれている。岩片の大きさは最大2.5cm程度であり、岩片のまわりには肌色を呈するきわめて細粒の火山灰が付着しており、その火山灰には黄白色を帯びた植物葉片の痕が残されている。

その上には細かく成層した火山礫・火山灰層が堆積しているが、全体に紫色を呈し硬く固結している。火山礫は最大1.5cm程度で角張っており、灰黒色の新鮮な安山岩および赤色を呈する変質安山岩であり、まれに火山礫質で発泡不良のスコリアが点在している。下部には植物葉片の痕が残されている。間に挟まる火山灰はきわめて細粒で、火山礫のまわりに付着するように堆積している。

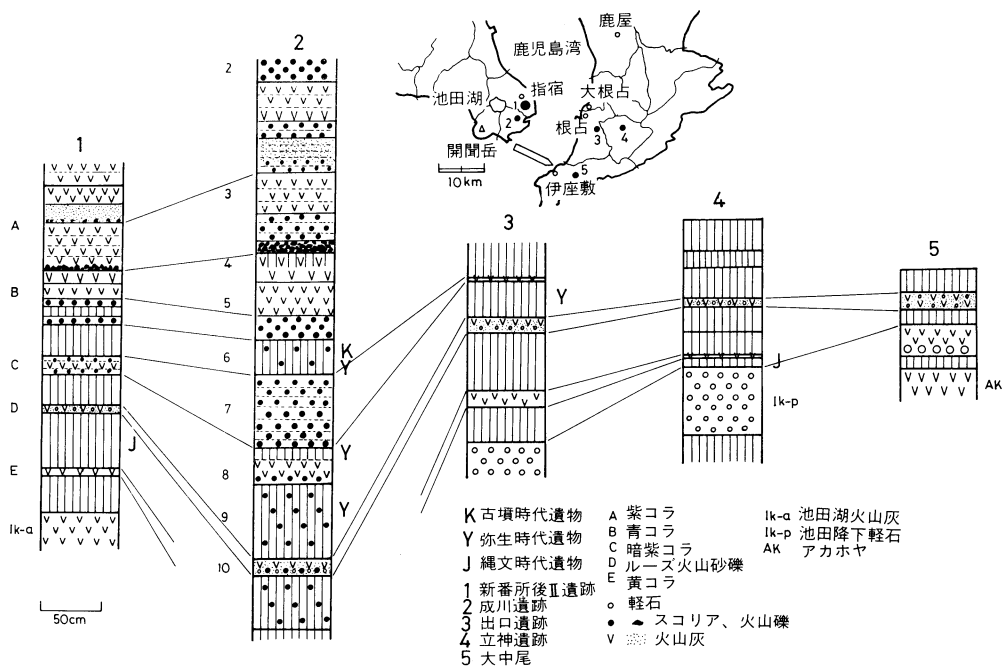
この火山礫・火山灰互層の上には、灰黒色をしたルーズな火山礫・火山砂層が堆積しているが、下位の層との境界は直線状で、乾くと灰白色を帯びるきわめて明瞭な層である。下部には径1cmの火山礫が堆積し、上方になるに従い粒度が小さくなり、全体に弱い成層構造が見られる。下部に薄く堆積する火山礫中には、径2cm程度の発泡の良くない石質のスコリアが点在している。この層の最上部には細粒の黒色火山礫が薄く堆積しているが、比較的やわらかで淘汰が良い。

黒色火山灰の上には紫色を呈する火山灰混じり火山礫があり、連続して同色の細粒火山灰が堆積している。火山礫層には成層構造が認められず、火山灰と火山礫が混在した塊状の堆積物となっている。

最上部は紫色を呈する細粒の火山灰層で、紫色火山灰と黒色火山灰の互層となっており、下位の火山礫層をえぐるように堆積している。

これら紫色をした一連の火山噴出物は青コラ同様付近一帯に厚く堆積しており、その特徴的な色調から紫コラと称されている（成尾，1984）。指宿地方で最上部の火山噴出物であることから、三代実録に残されている平安時代の貞観年間噴出物に比定されている（成尾，1984）。

紫コラの中にあるルーズな砂礫様堆積物は流水の作用を受けた堆積物と思われる（成尾，1991）が、細粒物質がかなりの量含まれており一次の火山噴出物の可能性もある。最上部に堆積するきわめて細粒な火山灰層は細粒物質が多く、噴火の際の洪水により洗い流された二次堆積物の細粒相と考えられ、三代実録中の洪水の記録に対応すると考えられている（成尾，1991）。



第8図 ルーズ火山礫（LL）の対比

3. 軽石質火山礫・細粒火山礫の噴出年代と考古学上の意義

前述のように本遺跡の第13b層は、発泡不良で灰色をおびた軽石質のオレンジ色火山礫と、その上に堆積するルーズな灰黒色細粒火山灰・火山礫からなるが、この層の約30cm下位から縄文時代晩期の黒川式土器が出土した。また、前述のように本層はその特徴・年代から成川遺跡の第10層に対比されるが、そこでは上部から弥生時代中期の山ノ口土器が出土している（成川遺跡, 1983）。対岸の大隅半島根占町の出口遺跡でも、本層に対比される噴出物の上部から弥生時代前期の土器が出土している（出口遺跡, 1992）。このような出土状況から、噴火は縄文時代晩期～弥生時代前期のある時期に発生したと推定される。

従来、南九州ではこの時代の火山噴出物はあまり良く知られておらず、考古学の編年作業上空白であったが、南薩地方や南大隅地方の発掘が進むにつれてこの噴出物の存在が注目されるようになり、有効な鍵層となる可能性が出てきた。この噴出物の分布は、南薩地方から南大隅地方の広い範囲にまたがるのが明らかにされつつあり、この地域の縄文晩期～弥生前期の編年にはきわめて有効と思われる。開聞岳周辺ではこの層の下位および上位にも類似の噴出物があり、それらをうまく組み合わせることにより土器形式の細分化などの可能性が出てくると期待される。

今回の発掘により噴火時代のおおまかな推定ができたが、正確な分布範囲や噴火様式の把握など、今後検討すべき多くの課題も提起された。

文 献

藤野直樹・小林哲夫（1990）；開聞岳火山の地質 日本火山学会1990年秋期大会

講演要旨集 p. 16

中村真人（1967）；開聞岳の火山噴出物と火山活動史 火山 第2集 Vol.12 119-131

中村真人（1980）；開聞岳テフラからの推理 軽石学雑誌 No. 6 105-110

成尾英仁・小林哲夫（1980）；池田カルデラの火山活動史 火山 第2集 Vol.25 306

成尾英仁・小林哲夫（1984）；池田カルデラ形成時の降下堆積物 火山第2集 Vol.29 148

成尾英仁（1984）；開聞岳噴出物と遺物の関係 ー特に初期噴出物の関係についてー

鹿考古18号 193-217

成尾英仁（1986）；開聞岳と遺跡 隼人文化 18号 47-60

成尾英仁（1991）；開聞岳の噴火と橋牟礼川遺跡 鹿児島玉龍高校紀要 第9号 2-30

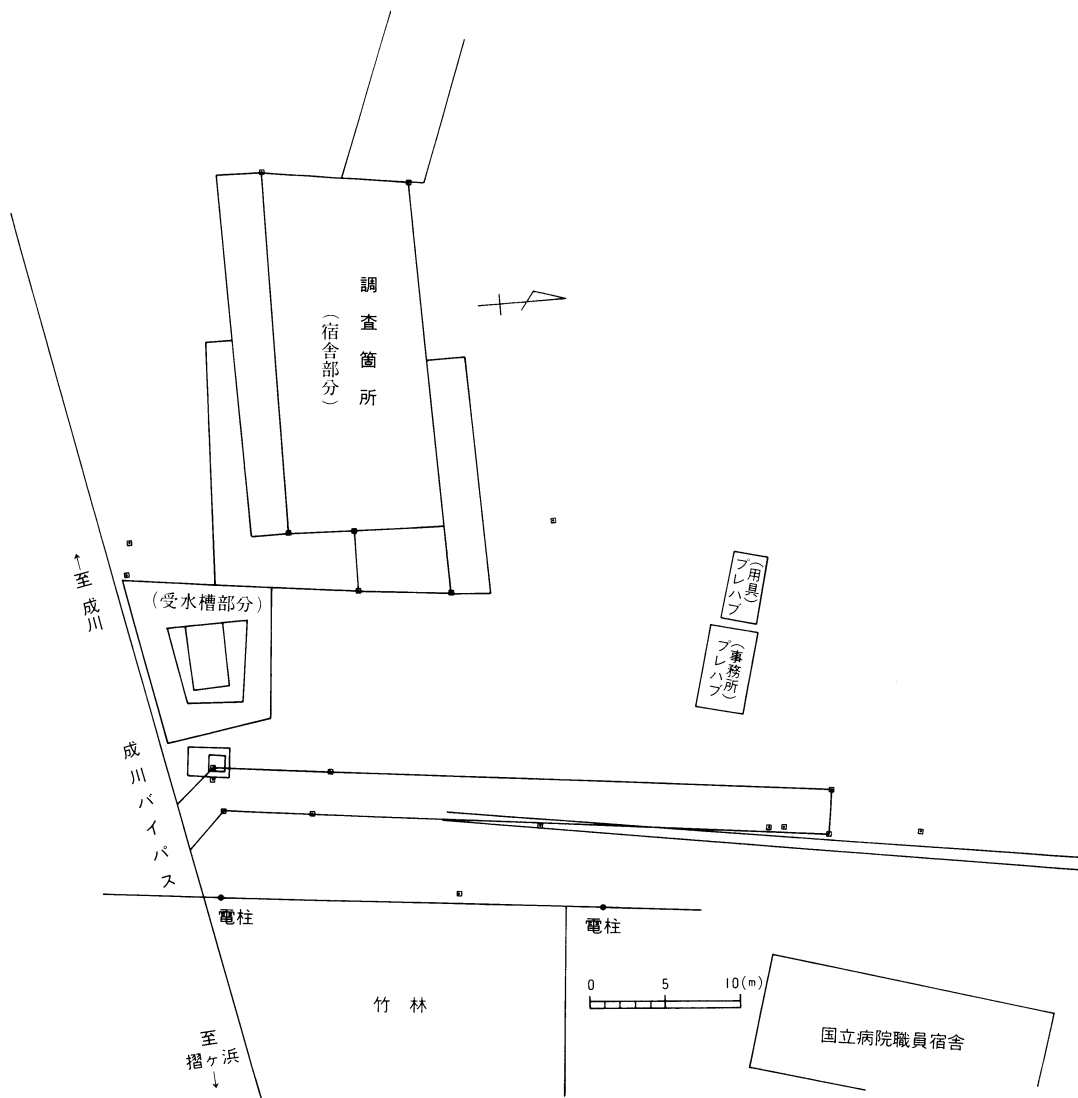
宇井忠英（1967）；鹿児島県指宿地方の地質 地質雑 Vol.73 477-490

埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島県教育委員会（1983）；成川遺跡

田代町教育委員会（1990）；立神遺跡

根占町教育委員会（1992）；出口遺跡

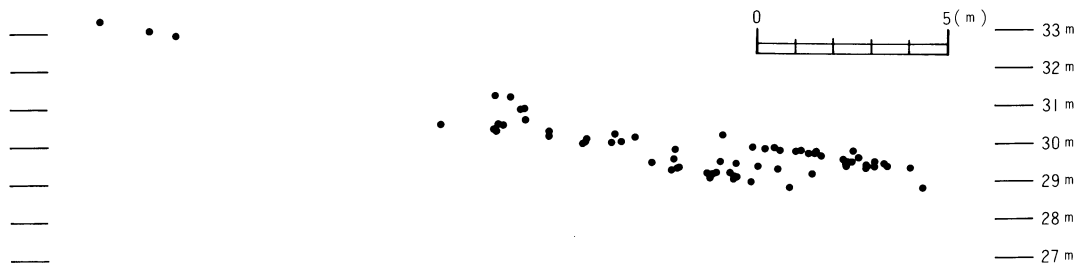
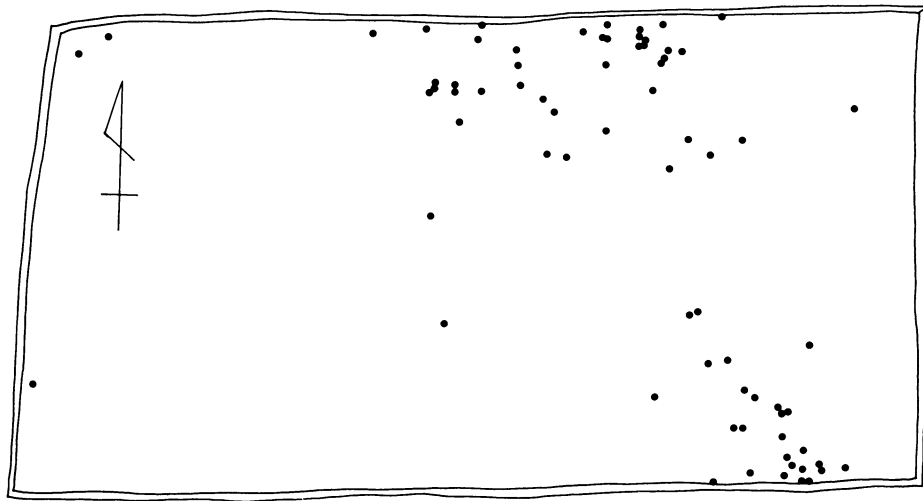


第9図 調査地点

第IV章 縄文時代

第1節 概要

縄文時代晩期の遺物は14層から出土した。西側からパワーショベルで表土を剥いだ段階で、地表下約1.3mに深鉢の粗製土器が数点出土し、本遺跡にこの時期の遺物のあることが判明した。その後、東側にかけて表土を除去して行った段階で、地形が大きく東側に下がるのがわかり、包含層の残存状態が極めて良好であると推定された。このことは、遺物量において本遺跡の中核をなすことで理解されよう。ただ、これら相当量の遺物が出土した状況は、次の図からもわかるように、相当な傾斜の地形に沿っているばかりでなく、層の厚さが30cm程度であるにもかかわらず遺物検出の上下幅が約1.3 mにも及ぶことから、調査地点のほぼ中央を分水嶺として南・北に傾斜している様子がわかるであろう。この状況は、当時、集落が形成される状



第10図 縄文時代晩期主要遺跡物出土状況

態ではなかったことを意味する。22%にも及ぶ急傾斜の地で住居を営むことはどうてい考えられない。もし住居を作るとすれば大がかりな造成が行われて然るべきであるが、その痕跡は全く見られない。そうすると出て来る結論は、東への急傾斜を考慮すれば、西側からの遺物の転落以外には考えられないことになる。それを証明するかのように、現地形で西側に比高差約20 mの丘があり、その近辺に集落を考えることは、それほど無理なことではないように思われる。

遺物は、粗製の深鉢及び精製された黒色研磨の浅鉢が主体をなし、石器の出土も多い。深鉢の中には研磨されたものもあるが、これは器形等から一形式古くなると思われる。深鉢は口唇部が若干肥厚し、ほぼ直立するか幾分内傾するもので、胴部にかけて緩やかなカーブをもって平底の底部に至る。胴部の中程に鋭い稜をもつものもある。底部は若干張り出すものも見られる。内外面共に条痕が顕著に見られる。内面は丁寧にナデて仕上げているものもあるが多くはない。底部に組織痕の残るものもいくつかある。浅鉢は玉縁状の口唇部から大きく内彎し、鋭い稜と明瞭な1条の沈線をもった胴部から膨らみ気味に底部に至る。底部は小さな平底である。口縁部に、リボンや鱗状の突起を有するものがある。胴部の沈線に赤色塗彩してもものも多い。内外面共に良く研磨され、黒色を呈するものがほとんどである。

石器は打製石斧が多いが、破損しているものが大部分である。土掘り具として用いられたものが多いと思われる。剥片石器や剥片が多い割に、磨石や叩き石、石皿が極めて少ないという特徴がある。また、軽石やその加工品も割合に多く見られた。

第2節 土器

浅鉢形土器（精製土器）

洗練された粘土を用い内面・外面ともに、入念な研磨が施され、薄手に仕上げているものである。

今回出土している浅鉢形土器には、口縁部の形状が緩やかな山形を成すものと平坦に仕上げたものが見られる。

1は緩やかな弧状を成す山形口縁部の頂部で、口縁部直下に浅い2条の沈線を巡らしている。2・3・4・15は同一固体の可能性が高い破片で、内外面ともに黒色に磨きあげている。特に外面の沈線部及び屈曲部には赤色の顔料が明瞭に残されている。このことより、器面全体に顔料が塗彩されたことが推定できる。尚、3・4は口唇部に鱗状突起を持つもので、また、胎土に多量の金雲母が含まれる。9は8よりより明瞭な山形の頂部をなし、8は黒色に、9は赤色に仕上げている。7と11は薄く、それぞれ黒色、赤色に仕上げている。8の復元口径は20cm程で、肩部で屈曲する可能性もある。

14は口唇部の4ヵ所が山形に突起し、頂部に貼り付け装飾を施すものと装飾しないものそれぞれ対を成すと思われる。頂部にはいわゆるリボン状・頂部と頂部の中央部には鱗状の装飾が施される。屈曲部は明瞭で、口縁部にかけてはやや内弯し、胴部は丸く、沈線を1条巡らす。胴部以下は若干外に広がる傾向にあり、胴部が長く接地面の小さい平底が推定される。復元口径は25cmで、この土器も赤色に塗彩されていた可能性が高い。

17は口縁部が短く外反し、内外面ともに明瞭な屈曲を残し、口縁部と胴部の口径が近似している。胎土に微細で多量の金雲母を含んでいる。尚、復元口径は25.5cm。20も17も類似した特徴を備え、屈曲部が明瞭で、口唇部は丸く仕上げられる。復元口径21.5cm。22の復元口径は23cm、口縁部は短く外反し、口縁部内面に沈線を1条巡らし、口縁径よりも胴部最大径の方が大きく、胴部が球形に大きく張り出す。

24の復元口径は18cm程で、底部からそのまま外反し口縁端部でやや立ち上がり、立ち上がり部に細い沈線を巡らす。底部の形状は極めて丸底に近いと思われる。27は口縁部部が大きくL字状に外反し、屈曲部に3条の沈線を巡らす。屈曲部以下の形状は22に極めて近いと考えられる。調整は横方向の研磨をかなり丁寧に行っている。

25は小型の精製鉢形土器で、特異な形状を成す特殊容器と思われる。最大で8cm程しかなく、胴部屈曲部に沈線を巡らし、丁寧な研磨仕上げで調整している。

26は上部が内傾し径が細くなるもので、壺形土器の可能性が極めて高い。調整は内外面ともに微細な研磨で、黒色に仕上げ、鋭く細い沈線を縦・横に施し更に、十字状に削り出し文様を施している。沈線間には、明瞭に赤色顔料が残り、本来全面に施されていた可能性が高い。28も頸部が締まる形状で、小型の壺形的形状を呈している。

円盤状加工品（30・31）

いわゆるメンコにあたり、同時期の土器片を再利用したものである。

深鉢形土器

通常浅鉢形土器とセットで用いられる土器で、器高が高く容量の大きいのが一般的である。本遺跡から出土している深鉢形土器は、数時期に区分されると考えられる。

上加世田式土器相当 38は内外面ともに入念な研磨調整を行ったもので、器壁は極めて薄くいわゆる精製深鉢形土器に相当する。口縁部等は欠落しているが、胴部屈曲部には沈線を巡らし、肩部の長い形状を成している。39・40は口縁部が肥厚し、直行に近い状態で立ち上がる特徴を成している。また、いずれも調整は丁寧に行い、40の頸部は器壁が薄くなる傾向が見られる。以上の3点に見られる共通点は、上加世田式土器に認められるもので、今回の出土土器の中では最も古い段階に位置づけられると考えられる。

入佐式土器相当 32～37もこれからの器種に含まれると思われるので、いずれも口縁部はストレートに外反し、口縁部の肥厚は認められない。また、内外面ともに、研磨ないしは丁寧なナデ調整で仕上げる共通性が認められる。このことより、上加世田式土器の後に位置づけられる入佐式土器に相当する土器群と判断される。

黒川式土器相当 61・63の口唇部は小破片のため極わずかであるが、突起することが認められる。また、62以下の口唇部からは平坦面が失われ、総じて傾斜を成すもの・肥厚気味に丸みを呈する傾向が認められる。また、口縁部の形状では、直線的に外反するもの(68・72)・口縁部がやや外に反るもの(64・74)・直行するもの(73・75)が見られ、74に見られるような内外面ともに工具による調整が一般的に行われている。72の復元口径は45cmを越し、75では40cm程度に復元できる。

刻目突帯文土器相当 78の1点だけである。屈曲する肩部に相当する資料で、棒状工具で縦方向に規則性をもって刻んでいる。

77の口縁部資料は明確な帰属はできていないが、突帯文土器に近い特徴が認められ、刻みを施さない突帯文土器の一つの判断したい。

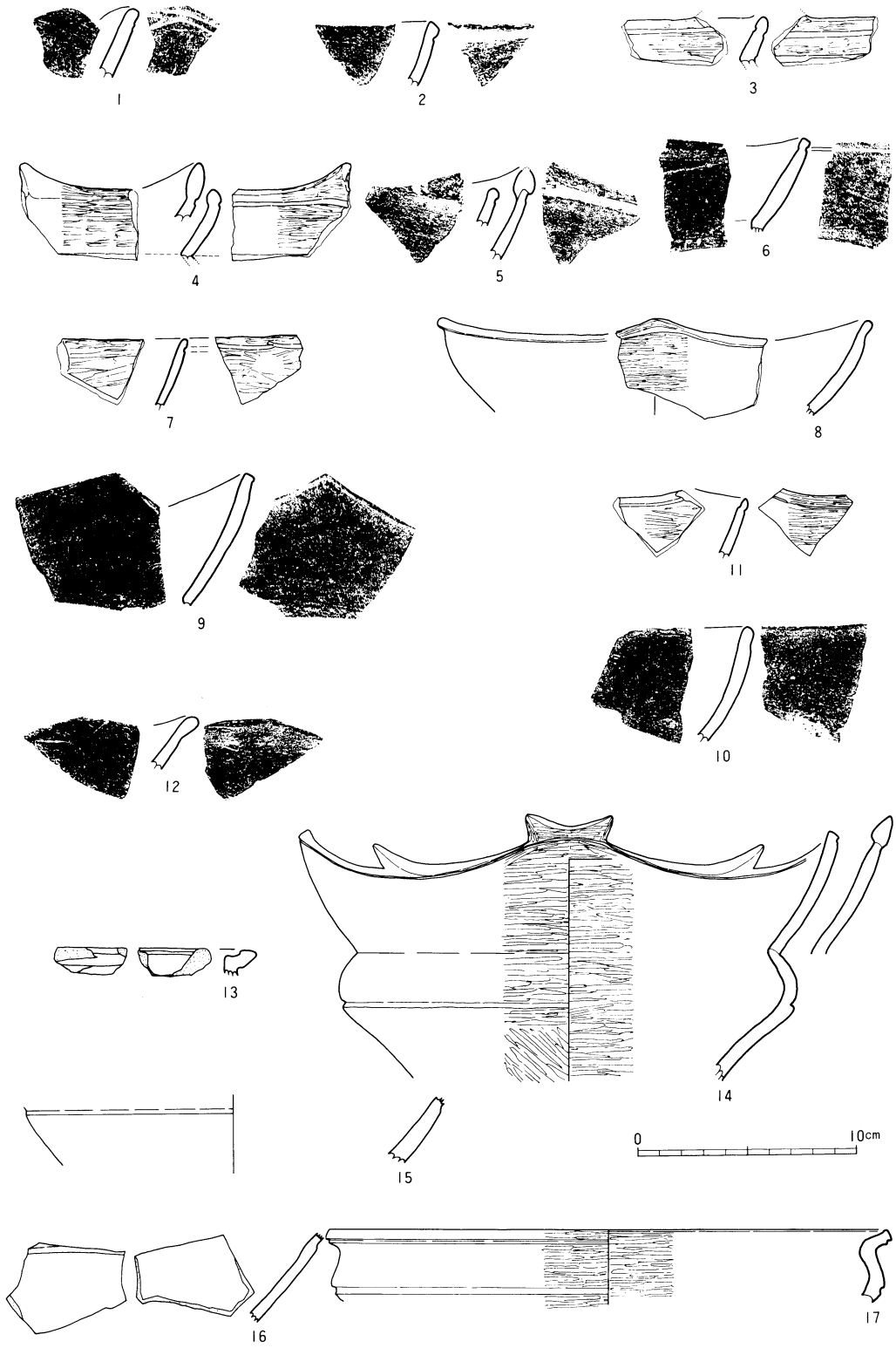
鉢形土器

基本的に最大径が口縁部にあり、小型の41を除き器高の低い土器で56がこれらの特徴的の形状を示している。全体的に、器面の調整方法の違いにより2種に区分が可能である。

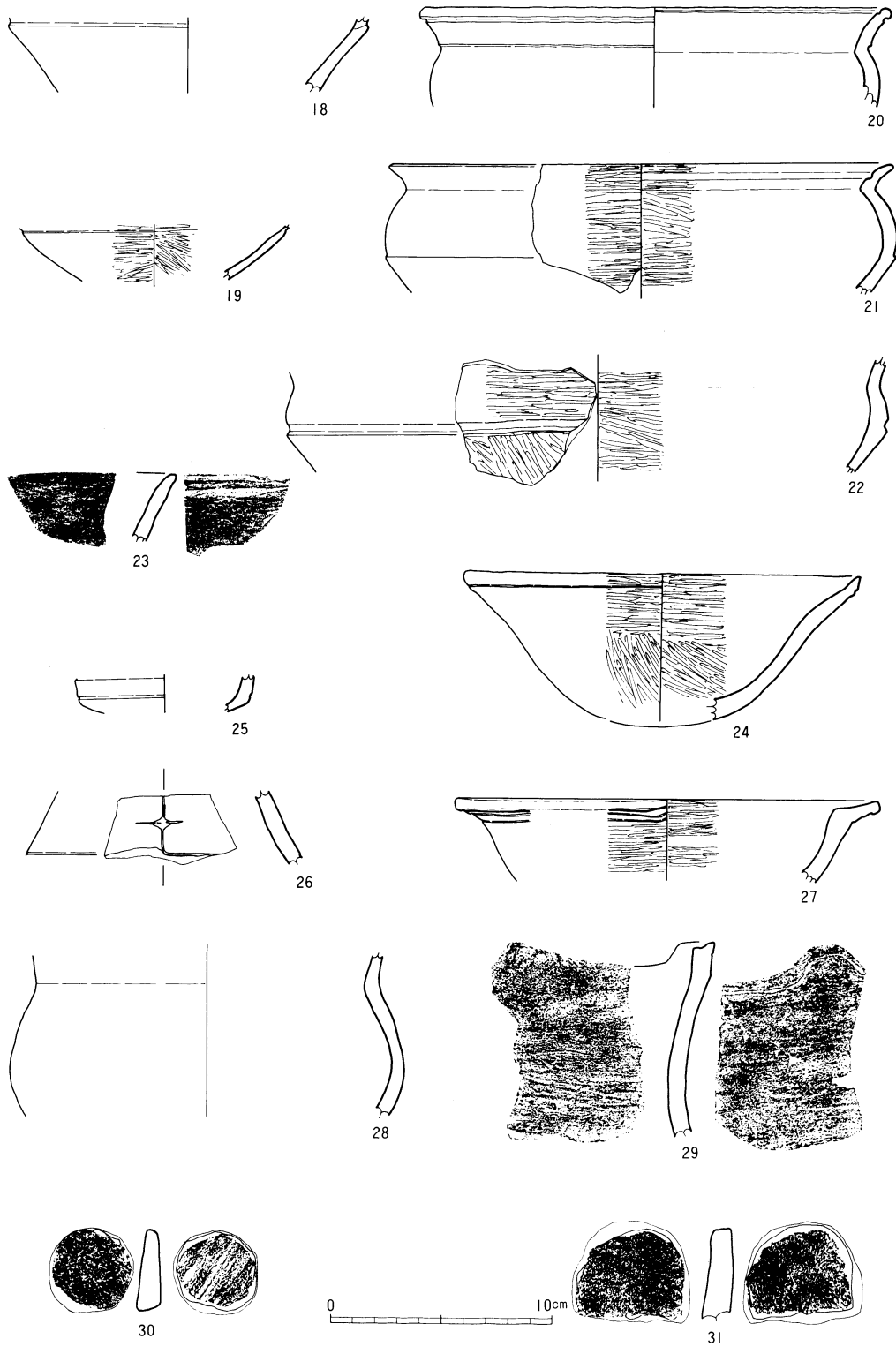
1類 外面は工具により粗雑(荒い)な調整を行い、一方内面は研磨に依りより入念に調整しているもので、黒色の光沢を残すものが多く認められる。42～49がこれらに相当し、半粗半精製土器と呼ばれるものである。また、46・55等のように研磨による内面調整は認められないが、丁寧なナデにより仕上げるものも存在する。

2類 内外面ともに工具により調整しているもので、一部にはナデを重ねたものもある。50・51・56はこれに属する。

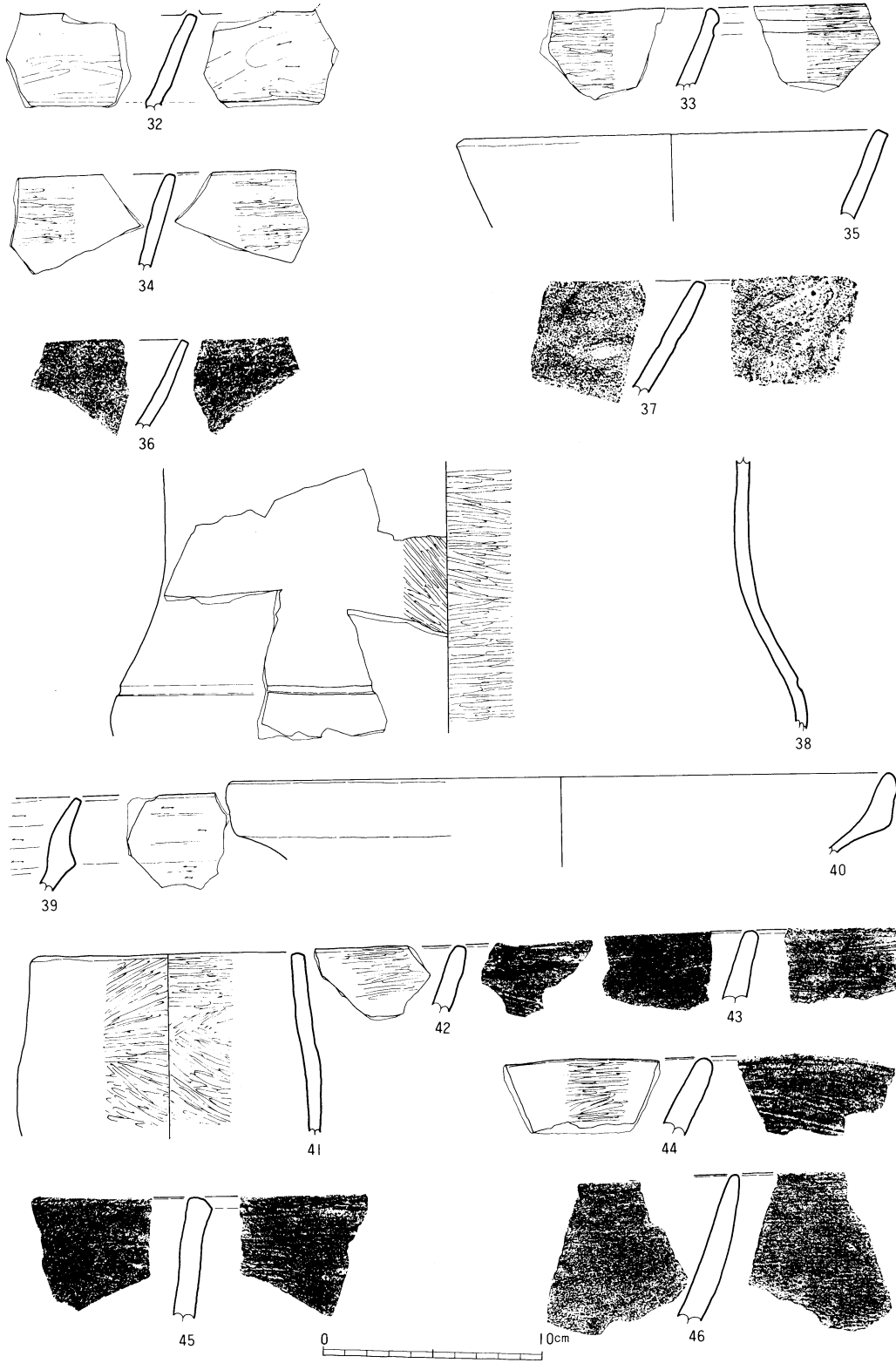
尚、この種の鉢形土器の底部には、93～107に示した組織痕が圧痕することが多くの資料で明らかにされてきている。帰属する時期については不明瞭な点も多いが、おおよそ黒川式土器が主体に出土する遺跡で、一般的に認められる傾向にある。59と60は同一固体の可能性が高い。



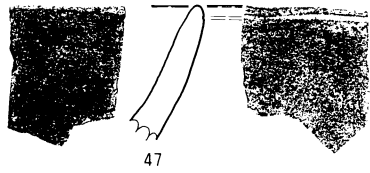
第11圖 土器(1)



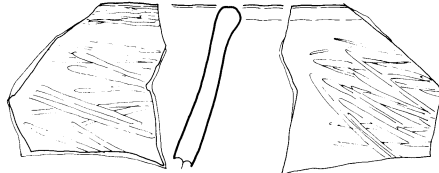
第12図 土器 (2)



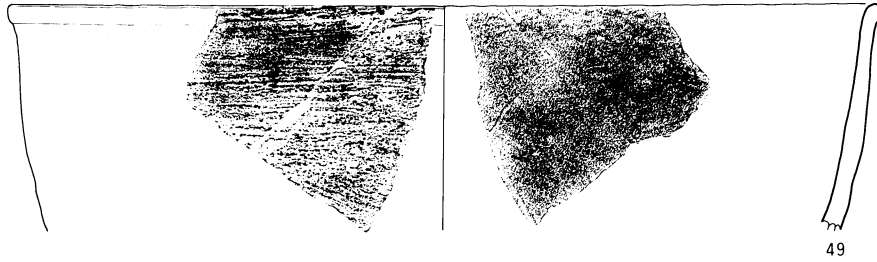
第13図 土器 (3)



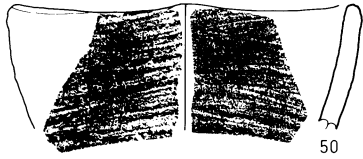
47



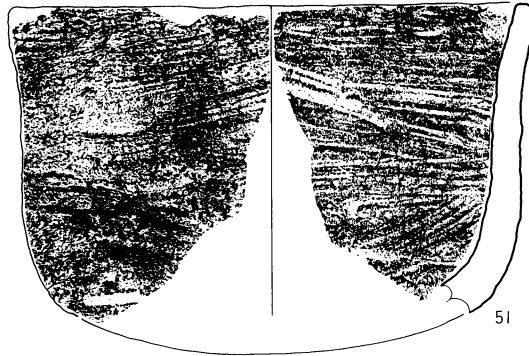
48



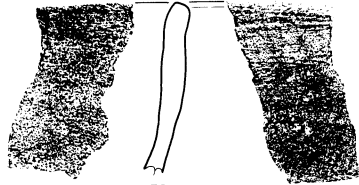
49



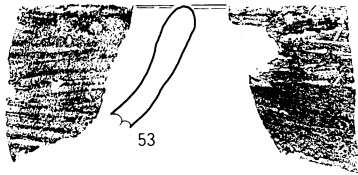
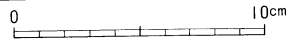
50



51



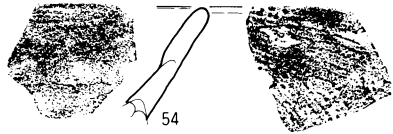
52



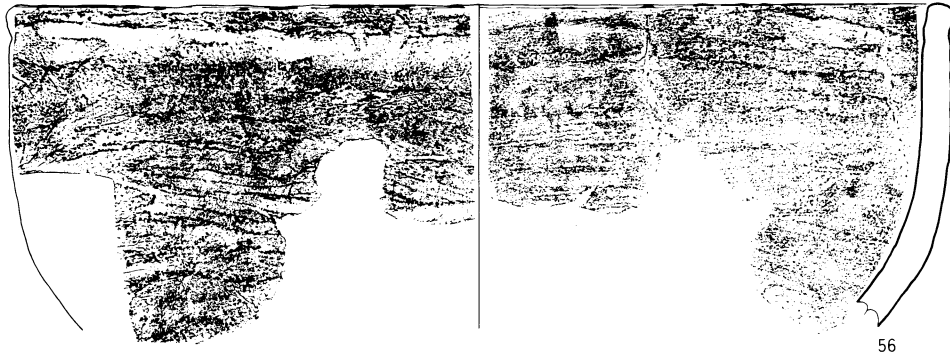
53



55

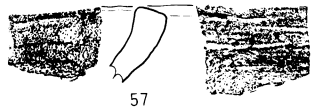


54

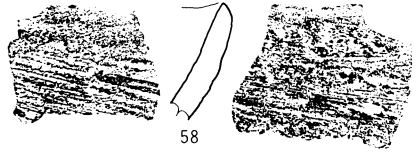


56

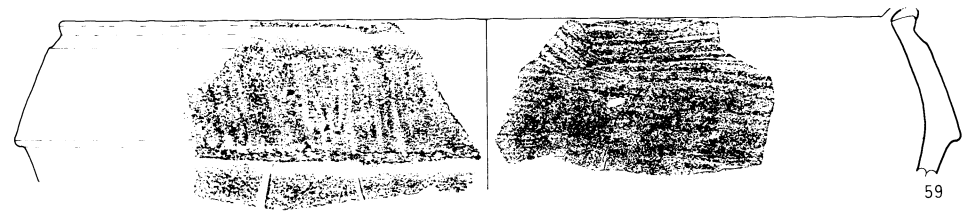
第14图 土器 (4)



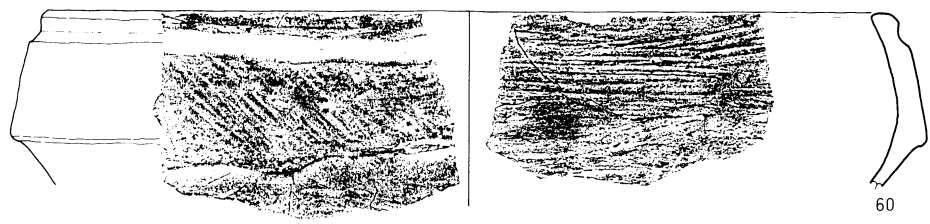
57



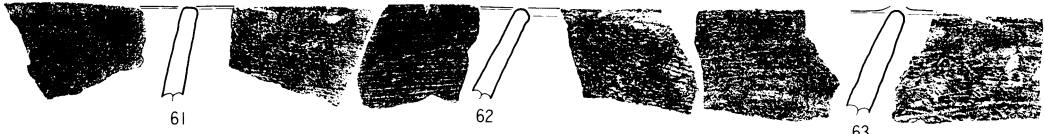
58



59



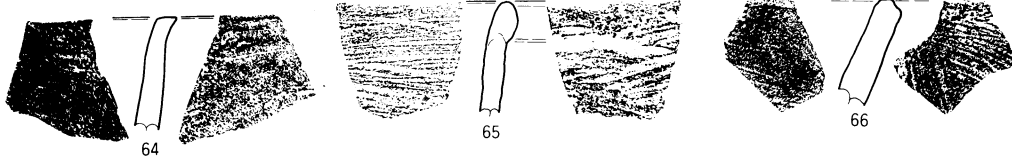
60



61

62

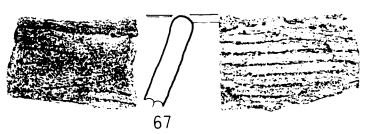
63



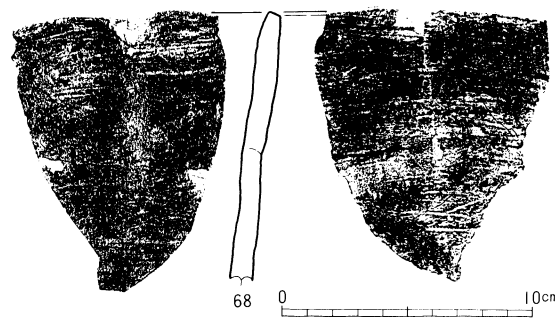
64

65

66

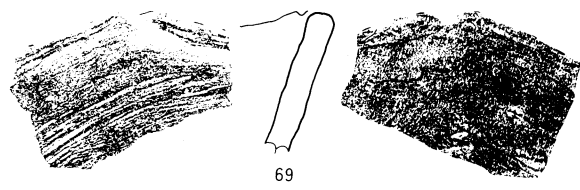


67



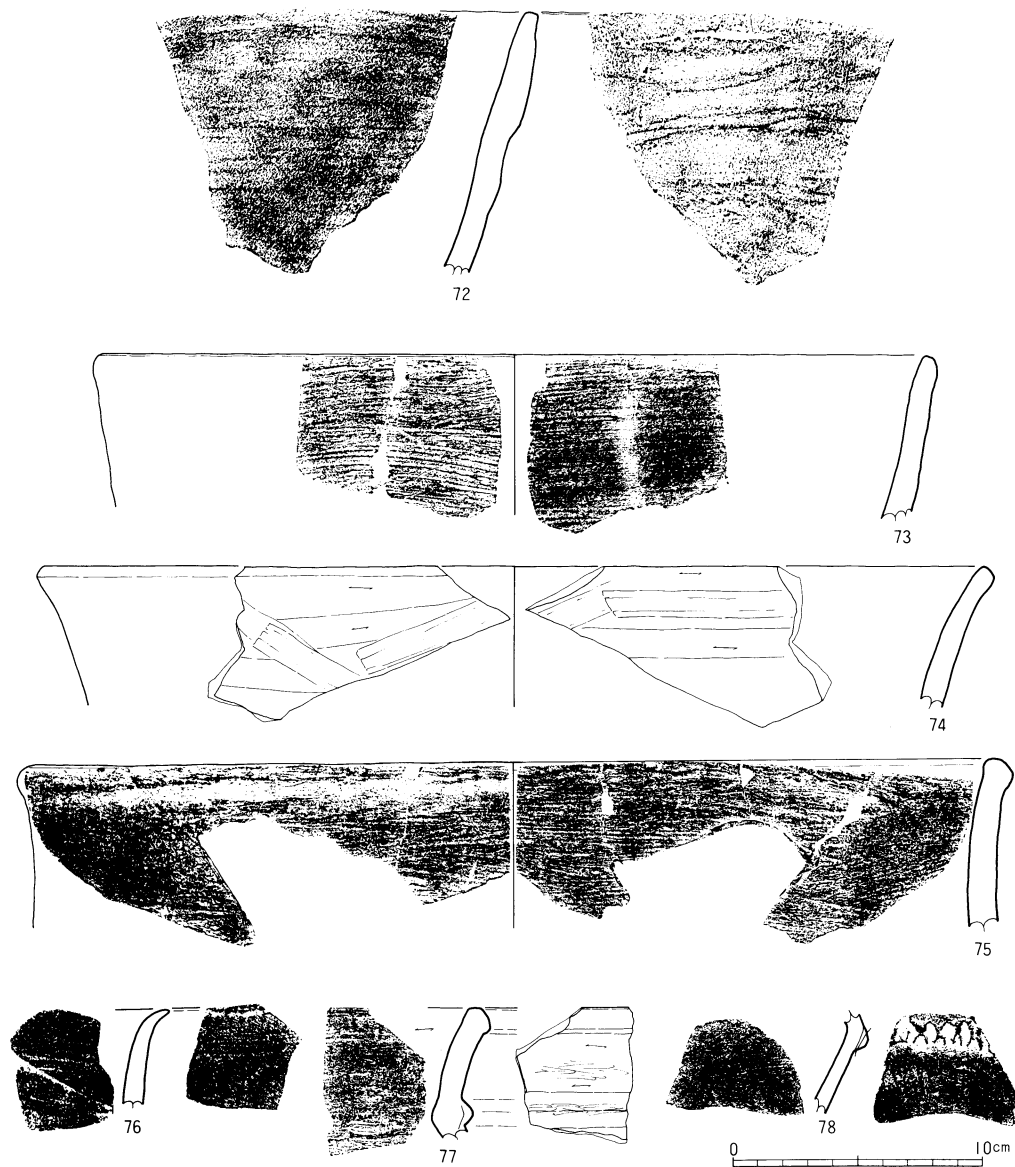
68

10cm



69

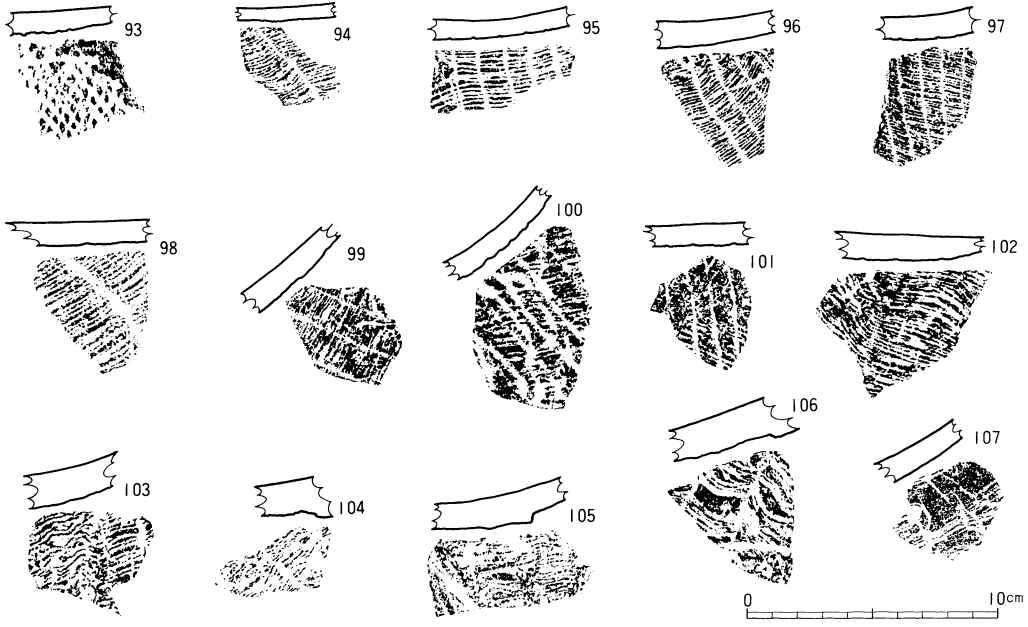
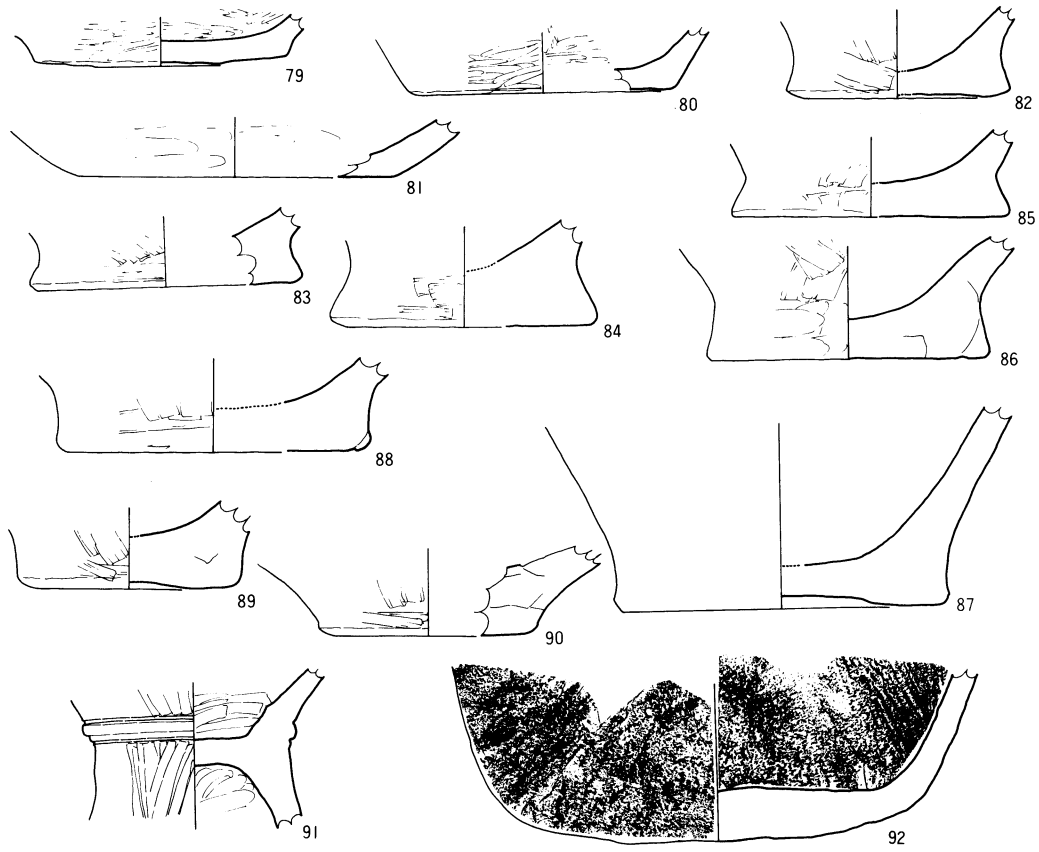
第15图 土器 (5)



第16図 土器(6)

底部

浅鉢形土器(79~81)・深鉢形土器(82~91)・鉢形土器(92~107)の各底部が見られる。91は高台を持つもので、粘土紐を1条貼り付けその上下に沈線を巡らしている。組織痕は、網目・蓆目文の2種が認められる。



第17图 土器 (7)

第3節 石器及び石製加工品

出土している石器に、扁平打製石斧・磨製石斧・石皿・叩石があり、更に、軽石を用いた加工品が1点ある。

打製石斧 (108~130)

本遺跡の主体を成す石斧は、肩部に抉りを入れるいわゆる“有肩石斧”で、その全てが意図的に取り出された剥片を素材としている。欠損した資料が多く、本来の姿を残しているものは4点だけである。使用した石材は粘板岩・頁岩のため、詳細な観察は困難であるが素材剥片は縦長・横長に取り出す傾向が見られる。118や122では、片面に礫皮面を残す剥片を素材としている。

欠損品が多いこと、また、主に刃部付近で長軸方向に残される磨耗痕（線條痕）は、その使用方法を推測する上で興味深い。なお、欠損した資料の多くが、抉りの部分に相当していることも注目される。

欠損していない4点の中で、最小の123が10.4cm・最大の124が15.1cmの長軸方向の長さを持つ。

126は破損した石斧の側縁部の可能性が高い。127・128の2点は、偏平な縦長剥片の側縁部に刃潰し加工を加えたもので、その大きさ及び形態等から石斧同様の機能を持つものと判断した。129の正面は激しくローリングを受けているが、摂理面をそのまま用い下縁部には縦方向の線條痕が残される。

130については機能等不明確な部分が多いが、アックス的用途が最も想定しやすい。

磨製石斧 (131・132)

131の石材は濃い緑色を成す緑泥片岩で、入念な研磨が行われシャープな刃部を残している。

132は火成岩を用いているが、詳細については明らかでない。棒状に近い形状を呈し敲打整形の後、ほぼ全体を研磨している。

石皿 (133)

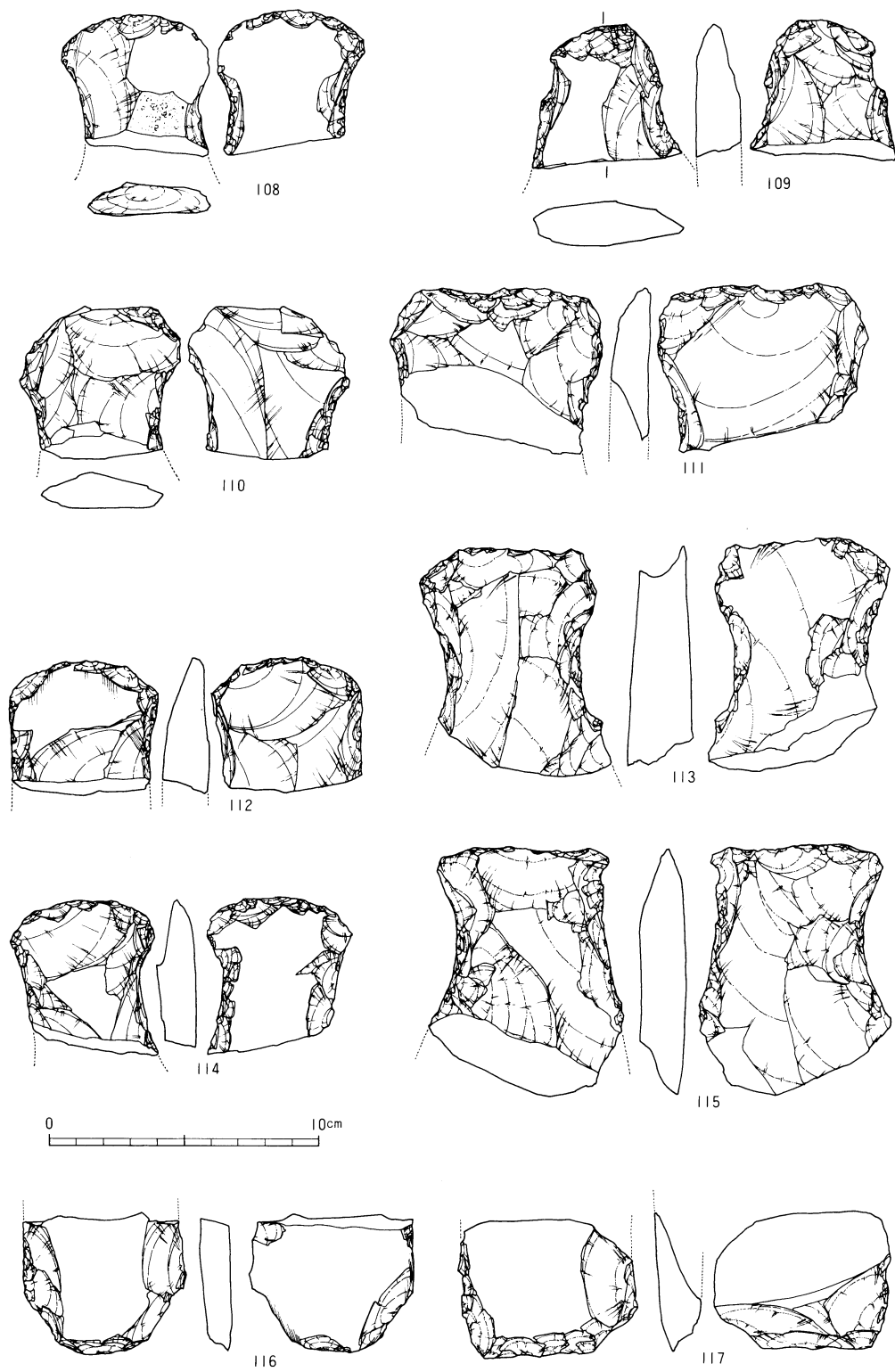
破損した小破片1点だけの出土で、花崗岩を用いている。使用頻度はかなり高かったと思われる、使用面は深く窪んでいる。

叩き石 (134・135)

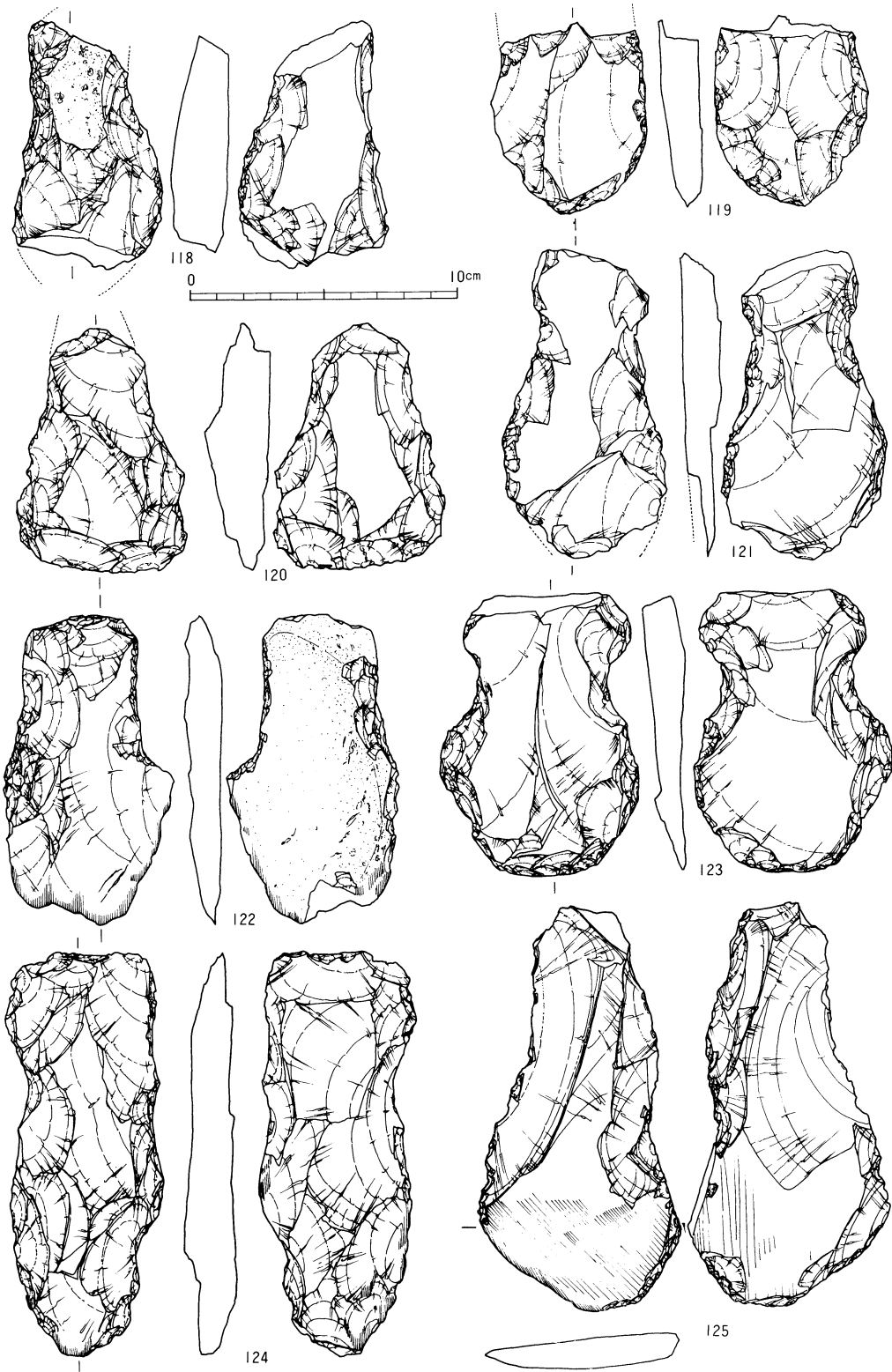
大小2点の出土で、花崗岩を用いている。2点ともほぼ全周に敲打痕が残され特に、135の平坦面は磨耗痕が見られ、磨石と兼用した可能性がある。

軽石加工品 (136)

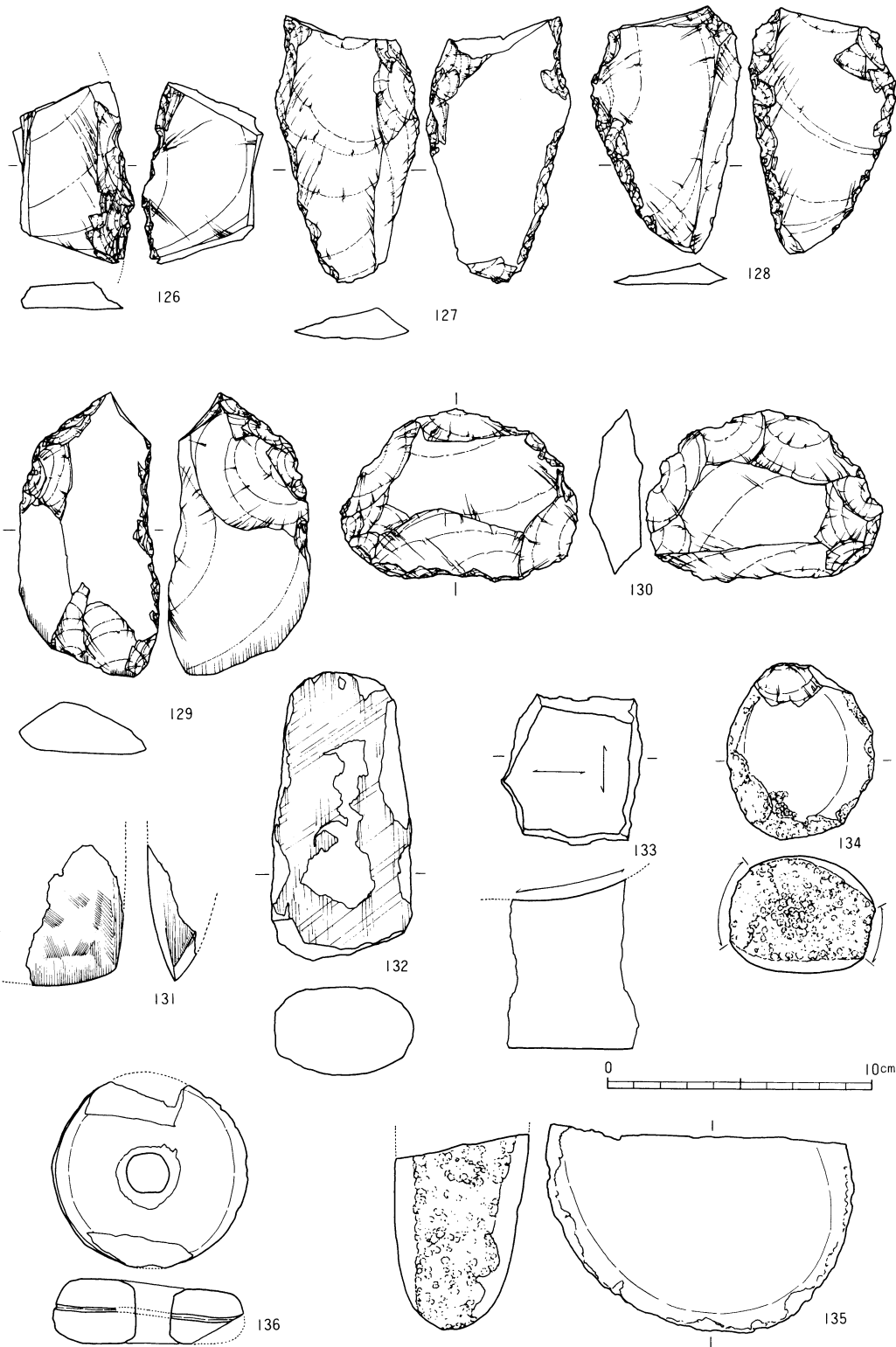
軽石を円盤状に加工したもので、厚さ2.5cm・直径7.5cm程に仕上げ中央部に円孔を穿ち、更に、側縁部に細い沈線を1条巡らしている。



第18图 石器 (1)

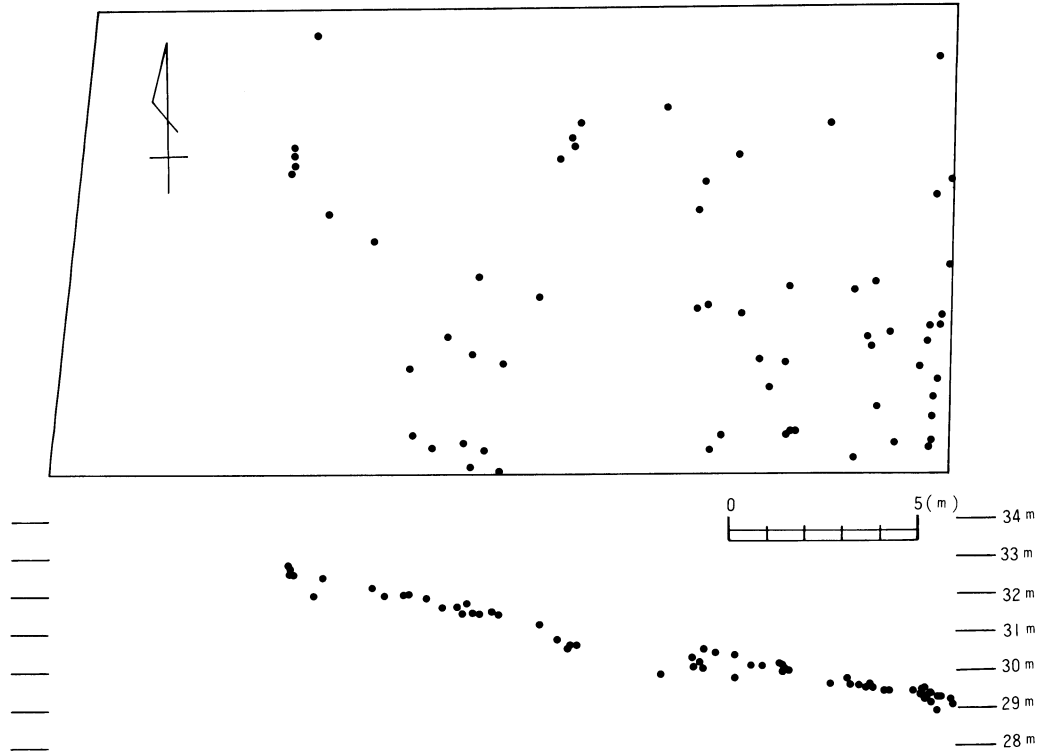


第19图 石器 (2)



第20图 石器(3)

第V章 弥生時代



第21図 弥生時代中期 主要遺物出土状況

第1節 概要

弥生時代中期の遺物は13層から出土した。層の厚さが20~30cmであるのに対して、遺物検出の上下幅は最大70cm程度と、ややばらつきが見られるものの、大方は30cm幅ほどに納まり、層が安定していることがわかる。地形は南西から北東方向に傾斜しており、途中の起伏は少ない。北側にかけてやや急激に深くなる傾向が見られ、中央部やや東寄りで遺物の検出面が深くなっている。また、南東隅に主要遺物が集中する傾向があるが、一般遺物も含めて西側にはほとんど出土しない。これは削平によるもので、13層の欠失を物語っている。

遺物は、甕形土器、壺形土器が出土した。甕形土器の口縁部は逆L字状に作り、端部に凹線の付くものが多いが、中には端部を丸めたものもある。口縁下部に3~4条の三角突帯を巡らす。絡縄突帯を付けるものもあることから、時期が下るものも混入していることが考えられる。胴部はやや膨らみ、底部にかけてはほぼ直線状にすぼまる。底部は充実した器台をもつ。壺形土器の口縁部も、甕形土器と類似しており、逆L字状の口唇部から急激にすぼまってすぐに外に開く。胴部やや上位に3条ほどの三角突帯を施す。底部にかけては膨らみ気味にすぼまり、安定した平底につながる。ただ、本遺跡からの底部の出土は極めて少ない。この時期には、石器も使用されているはずであるが、本遺跡からは出ていない。

第2節 土器

甕形土器 (137~162)

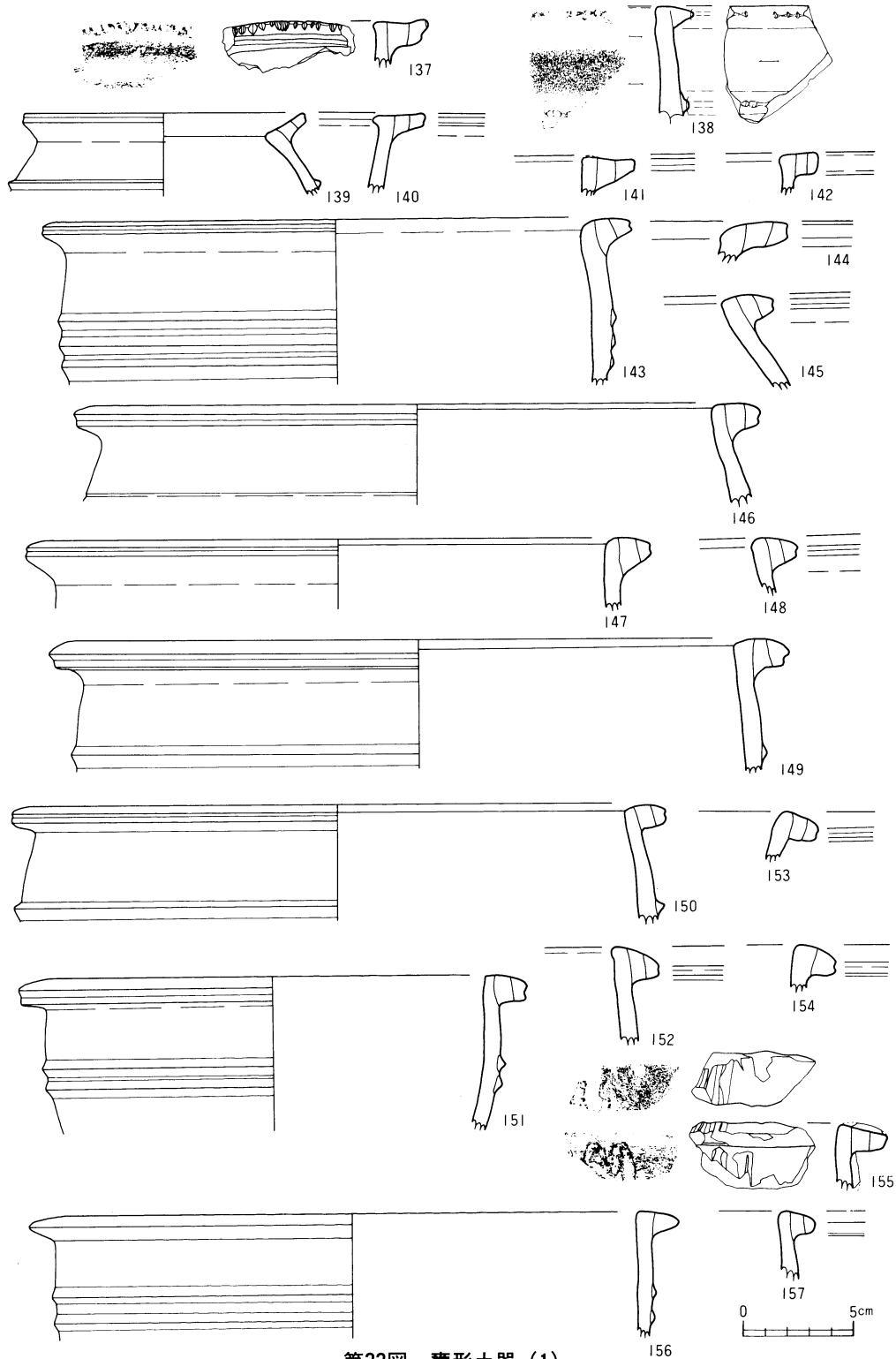
弥生時代中期の甕形土器は、1. 口縁部が逆L字状を呈する 2. 胴部に三角突帯が付く 3. 底部は充実した脚台をもつ という特徴が基本的にはあるが、1と2については、若干の変化（バリエーション）がある。

137と138は逆L字状の口縁部の口唇部分に刻み目を付すものである。137は口唇端部が鋭くはね上がり、刻みの間隔は均一ではない。138は鋭利な三角形の口唇端部と胴部上位に巡らした三角突帯に浅く刻み目を付す。139~158は逆L字状を呈する口縁部で、刻み目が付かないものである。139~145は口縁部が上がるもの、146・147はほぼ平ら、148~155は下がるもので、口唇端部外面に浅い沈線が巡り、断面形がM字状を呈するものである。142には沈線はないが、形態的には基本的に同様であると考えられる。139は口縁部が大きく内傾し、内面に明確な稜が巡る。小型の甕形土器であろう。口縁部が上がるタイプにも140~142のように一旦下がった後に上がるものと、143~145のようにすぐに緩やかに上がるものが見られる。また、内面に明確な稜をもつもの（140・142・144）とそうでないものがある。143は胴部上位に3条の三角突帯を巡らし、内面は緩やかなカーブでほぼ直に胴部に向かう。144は口縁部の幅が割合に広い。145は139同様大きく内傾する。143は復原口径26.6cmを測る。

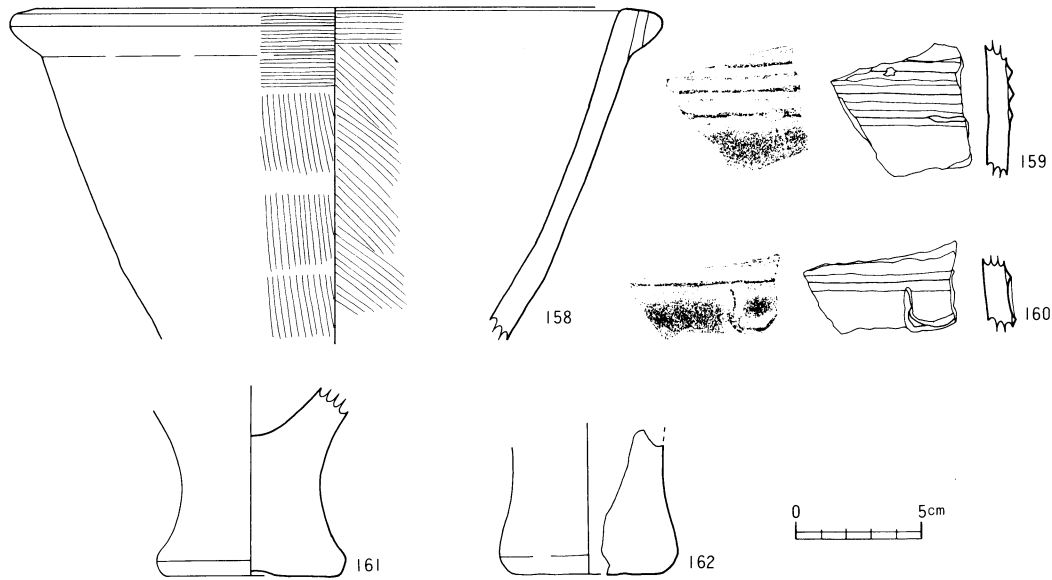
146は口縁部がほぼ均一に把厚するが、147は口唇端部にかけて薄くなる。146がやや内傾するのに対して147はほぼ直立する。前者は復原口径30.8cmで、胴部上位に浅いナデの痕跡が見られることから三角突帯が付されたものと思われる。後者は28.4cmに口径が復元される。

148~151は、口唇上面が弧を描きながら下がるが、特に顕著なのは149と150である。この2点は何れも胴部上位に1条（以上）の三角突帯を巡らす。前者は復元口径32.4cm、後者は29.6cmで、共に内面にやや鈍い稜をもつ。148も前二者と同様、やや内傾する器形と思われる。151は153と同様に、口縁部がほぼ均一に肥厚する。23.0cmに口径が復元され、胴部上位には2条の三角突帯が巡る。内面の明確な稜が口縁最上端に位置し、緩やかなカーブを描きながら胴部下位へと向かう。152はほぼ直立する器形で、口縁最上縁から口唇端部にかけて直線的に斜めに下がり、断面形は典型的な台形状を呈する。内面上縁は、小さく丸い瘤状に隆起している。154は口縁部がやや開いている。155は直立した器形に、ほぼ直線的に逆L字状に口縁部が下がる。口縁上面には、口唇端部に向かって2本の突帯を付し、口縁直下にも胴部にかけて2本の突帯を貼り付けている。耕作等によると思われるきずのために詳細はよくわからないが、他の一般的な甕形土器と異なった装飾的な要素の見られるものである。

156~158も逆L字状の口縁部を有するが、口唇端部が鈍い三角形状を呈するものである。156は復原口径29.4cmを測り、ほぼ直立する器形の胴部上位には2条の三角突帯が施されている。口唇端部はやや鋭く直線的に突き出す。157の口唇端部はやや下がりながら鈍く丸まり、器形は幾分内傾する。158は口唇端部が平たく突き出て短く丸まる。胴部から底部にかけては直線的にすぼまることから、鉢形土器と考えられる。胴部に三角突帯が付かないことから、時期的



第22図 甕形土器 (1)



第23図 甕形土器 (2)

にやや新しくなると思われる。外面上位の口縁部付近は横方向のナデ仕上げ、胴部は縦方向のナデにより仕上げる。また、内面は上位が横方向、下位が斜め方向のナデでそれぞれ仕上げてある。

159と160は何れも胴部の上位と思われ、三角突帯が付されている。159は鋭い3条の三角突帯である。160は横方向に付された1条の三角突帯の下位に、はね上がった鋭い三角突帯が貼り付けられている。

161と162は底部で、何れも充実した脚台である。161は外面下部の中央が浅く窪んでいる。体部内面は緩やかなカーブを描いている。162は破片であるが、外面下部が窪んでいるのか平らであるのかは不明である。また、161に比べて、外面の稜が不鮮明である。

甕形土器全般について言えることは、胎土には金雲母や石英などを含むものの極めて良く精選された粘土を使っており、焼成も非常に良好である。黄褐色・茶褐色などを呈するものがほとんどであり、割合に硬質である。また、粘土の貼り合わせも巧みである。口縁部について言えば、体部上端に体部と同程度の厚さの粘土紐を巡らして丁寧に貼り合わせた上に、粘土紐を重ねて巡らして貼り合わせ、草の茎などのような細い繊維状のもので口唇端部に極めて浅い窪みをつけながら仕上げていくようである。また、内外面の調整は横、縦、斜め方向に丁寧にナデで仕上げていく。内面が丁寧な仕上げであるのはもちろんであるが、外面も非常に丁寧である。それは底部の脚台にまで至り、実に細やかである。

壺形土器 (163~174)

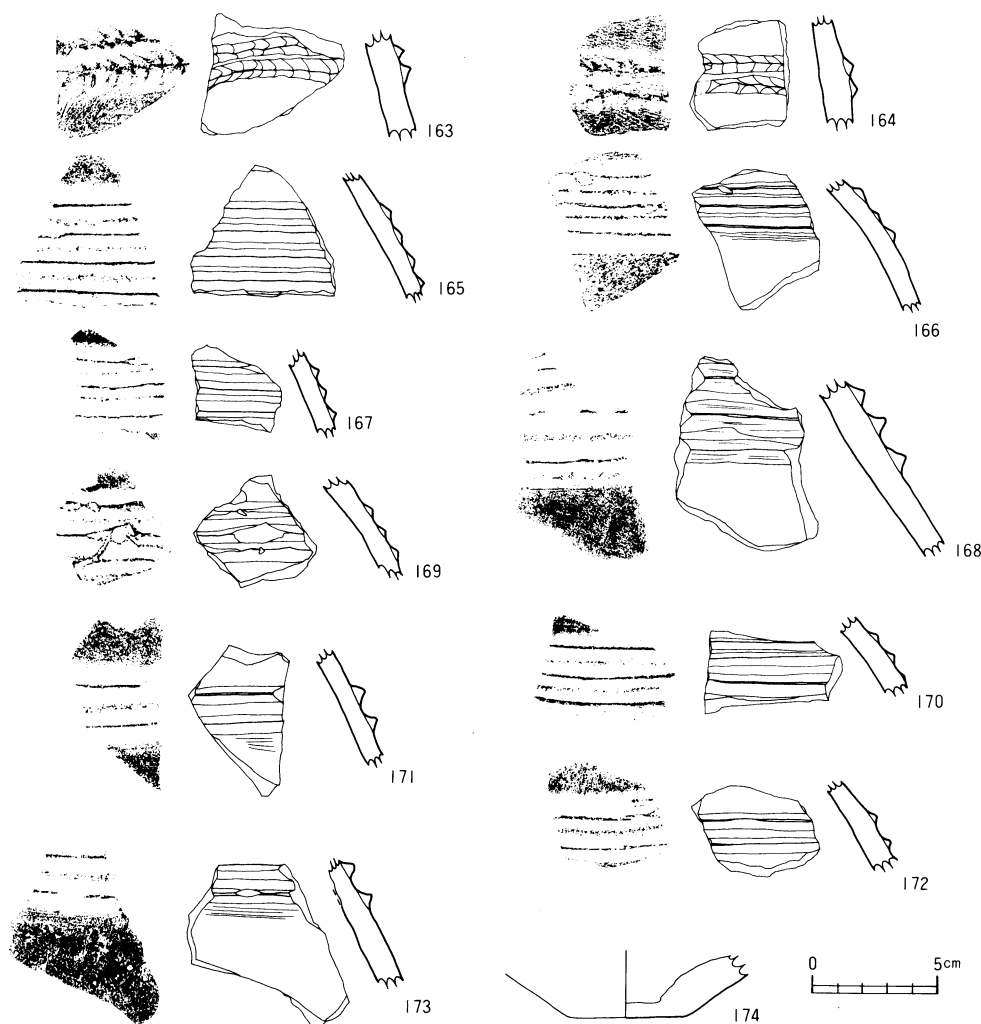
この時期の壺形土器は、甕形土器と同じように口縁部が逆L字状を呈するものと、口唇端部が胴部と同程度の厚さをもって断面四角形を呈するものとの両方の型があるが、何れも頸部か

らラップ状に開き、胴部にかけて大きく膨らみ、胴部上位及び下位に三角突帯を付すものと付さないものの両タイプがあり、底部は安定した平底となるものがほとんどであるといわれる。

出土遺物の中に口縁部と思われるものは見当らなかったが、胴部以下については出土している。163～173は胴部上位に付されたと思われる三角突帯である。163と164は絡縄突帯と呼ばれるもので、何れも2条貼り付けられている。164がほぼ平らに巡るのに対して、163はやや下がり気味である。165～173は一般的な三角突帯であるが、165が4条、166～169は3条、170～173は2条の突帯がそれぞれ残る。168と173は器壁が割合に厚いことから、大型の壺形土器と思われる。断面で見ると、何れの突帯も鋭い三角形を呈する。

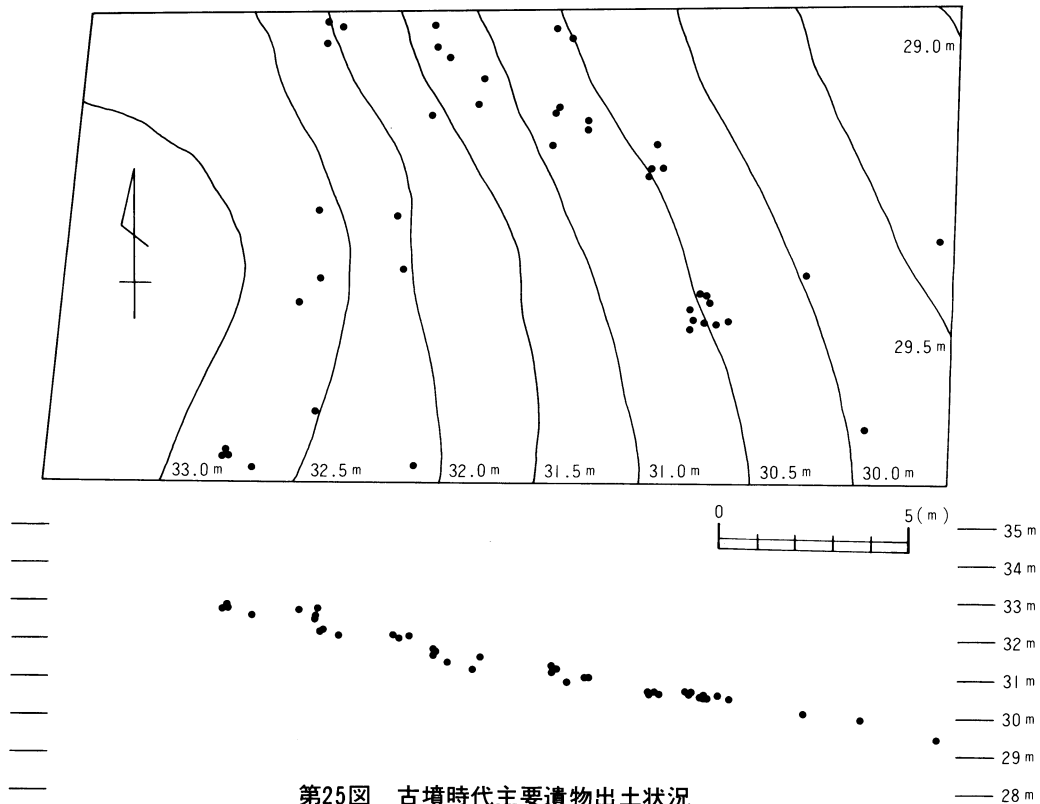
174は底部である。安定した平底であるが、剥離のため内面の様子を窺うことはできない。

壺形土器も甕形土器と同様に、胎土には金雲母や細かい砂粒を含むもののきめ細やかで、黄褐色～褐色を呈し、焼成は極めて良好である。調整も丁寧で、内外面共に極めて良好である。底部外面の仕上げも丁寧である。口縁部のないのが惜しい。



第24図 壺形土器

第Ⅵ章 古墳時代



第25図 古墳時代主要遺物出土状況

第1節 概要

古墳時代の遺物は9層から出土した。層厚約30cm、遺物検出の上下幅は20cm程度で、ばらつきは小さい。遺物が見られない箇所のうち、西側は削平によるが、北東部のそれは極めて小さい破片のみであったため平板実測なしで取り上げたことによる。地形は東北東方向に傾斜する。

遺物は、甕形土器、壺形土器、甗、高坏が出土した。甕形土器は口縁部が外側に開き、口唇端部は四角形、丸～三角形を呈するものが見られる。口縁から頸部までが長く、頸部には絡縄突帯を廻らすものと突帯を持たないものがある。これとは別に、外反する口縁部が短く、頸部に突帯のないものもあり、弥生後期に該当しそうであるが、層位的に明確には分かれず、ほぼ同じ時期に流れ込んだと判断せざるを得ない。頸部に突帯のあるものも、ヘラ状のもので刻み目を付したものや指頭押圧の見られるものもある。胴部から底部にかけてやや膨らむものと、平坦にすぼまるものがある。底部は中空となる高い脚台を有する。壺形土器は口縁部がラッパ状に開くもので、頸部から突帯を巡らした胴部にかけて大きく膨らみ、底部は丸底あるいは極めて小さい平底である。甗は口縁部が外反して長く立ち、胴部が大きく膨らみ丸底となるもの、すぼまり気味の口縁部の下に明確な稜を持ち、短く丸まるもの、底部が完全に平たくなるコップ状のものなどがある。高坏は高い口縁部の下に稜を持ち、割合に平たく直線的に脚部に向か

うもので、内面にも明確な稜を持つものが多い。脚部との接合は、坏部の下部に突起を設けて接合するものと、坏部の下部を丸く開け、脚部を突っ込んで接合するものの2種類が見られる。

なお、弥生後期かと疑われるものも本章で扱うが、これは層位的に9層として取り上げたことによる。つまり、弥生中期の鍵層となる11層の暗紫ゴラが中央から西側にかけて残りが悪く、それに加えて弥生中期～後期に比定される10層が本遺跡で全体的に欠失していたために明確に分層できず、結果的に9層の中にそれが含まれる形となったということである。

第2節 土器

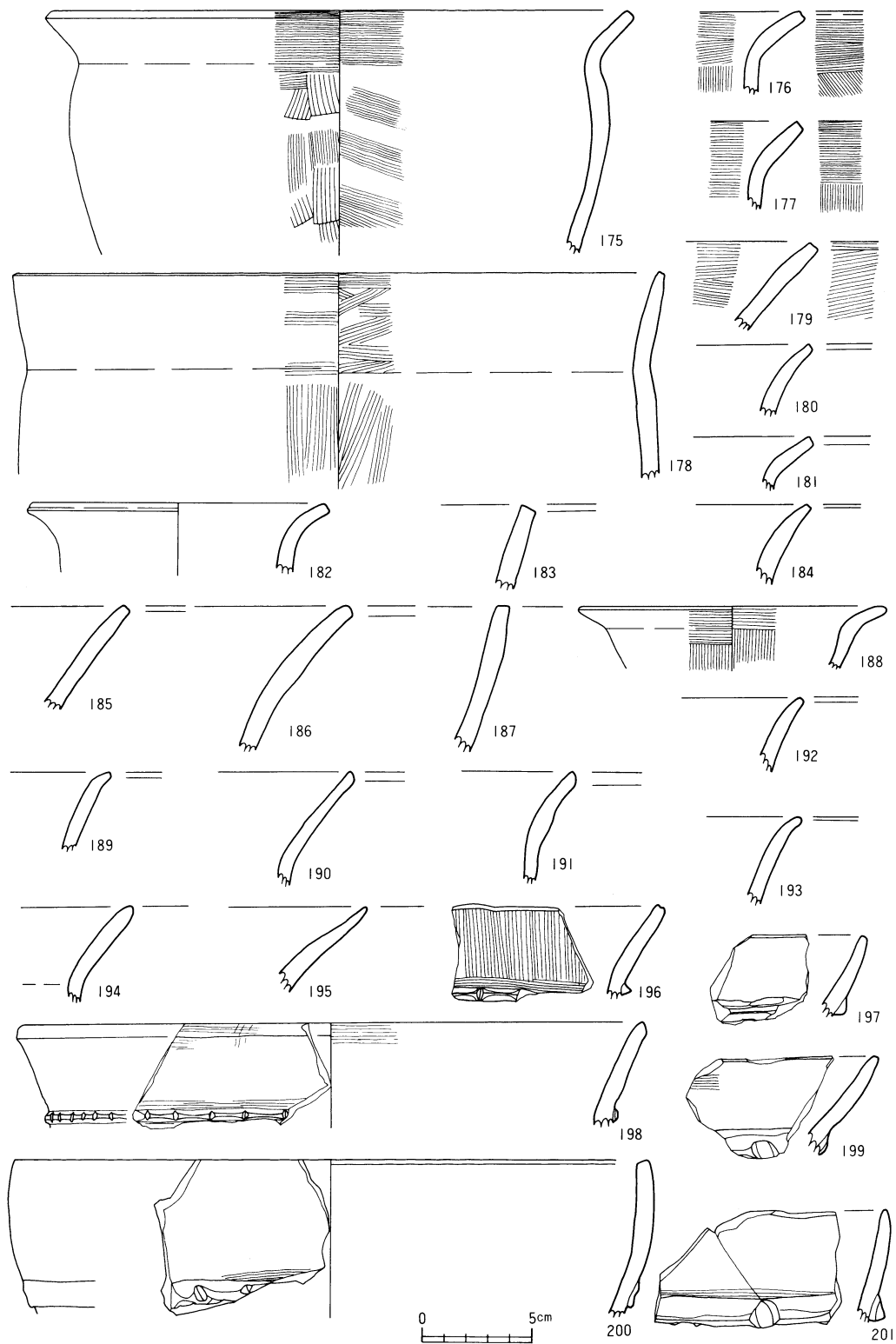
甕形土器 (175～233)

弥生時代後期から古墳時代前半の甕形土器は、口縁部が外反して頸部がやや締まり、胴部にかけて少々張りながら徐々にすぼまって底部に至る。底は上げ底の脚台が付くというのが一般的なタイプである。時期が新しくなるにつれて、口縁部が直立、または幾分内彎し、頸部は不明瞭となるものの、底部にかけては大きな差異はない。ただ、脚台の高さに差が見られる程度である。頸部に突帯を持つものとそうでないものとの二つのタイプが見られるが、新しくなるにつれて刻目などの突帯が増加する傾向があり、直口するタイプには刻目突帯が多く施されている。

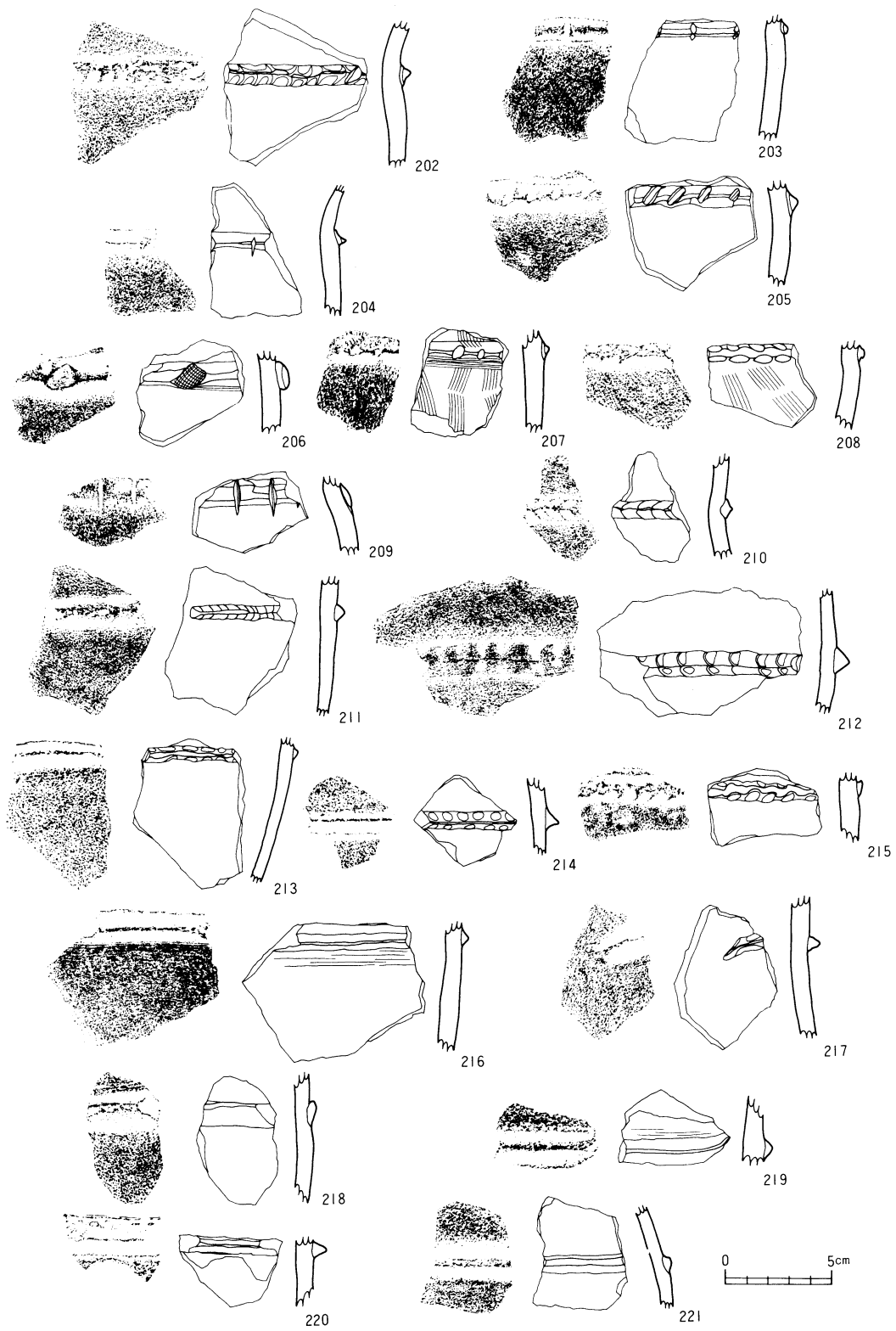
175～189は口縁部が外反するタイプ、200・201は内彎するタイプである。外反するものの中で、175～187は口唇端部が四角になるもの、188～195は三角形あるいは丸くなるもので何れも頸部に突帯を持たないもの、196～201は突帯を有するものである。

175は復原口径が27.0cmあり、頸部がしまり、胴部はそれほど張らず、緩やかなカーブで底部に至る。調整は、上部が内外面共に横方向のナデ、胴部は外面が縦方向のハケ及びナデ調整、内面は斜め方向のナデ調整である。178の口縁部は、やや直立気味に幾分外反する。29.8cmに口径が復元される。調整は、外面上部が横方向のナデ、胴部は縦方向、内面上部が横及び斜め方向、胴部はやや斜め方向の縦のナデ調整である。内外面共に頸部の稜は鈍い。176は大きく外反する口縁部の口唇端部に浅い沈線が入る。調整は、内外面共に口縁部が横方向、胴部が縦方向のナデ調整が施されている。177は頸部がゆるやかなカーブを持ち、明確な稜は見られない。179は直線的に外反するもので、口縁部の調整は横及び斜め方向のナデ調整である。180は口唇端部がやや薄くなる。181は177と同様で、頸部の稜は明らかでない。182は緩く大きなカーブを描きながら外反するもので、復元口径13.8cmを測る。184・185は何れも口唇端部にかけて薄くなる。183・187は口唇端部の形は類似するが、後者は上向きに平らになる点で前者の斜めになるものとは異なる。186はやや丸まり気味の四角い端部をもつ。

188は13.4cmに口径復元され、器形の傾きから鉢形になると思われる。調整は何れも上部が横方向、下部が縦方向のナデである。189は口唇端部から鋭く外反し、薄くなる。逆に190は端部がやや厚く上向きとなる。193は丸まり気味に小さく外反する端部をもち、194は肥厚しながら直線的に外反する。195は鋭い三角形状に、やや上向きに外反する。



第26图 菱形土器 (1)



第27图 甕形土器 (2)

196～190の頸部に突帯のつくもので口縁部が外反するもののうち、196の端部には浅い沈線が入り、縦方向のナデ調整で仕上げる。頸部の突帯は三角形の突帯に刻み目が付く。197と199はやや内彎気味に外反し、後者の厚い突帯には幅の広い圧痕が施される。198は29.0cmに口径復元され、台形状の突帯には刻みがほぼ均一の間隔で施されている。

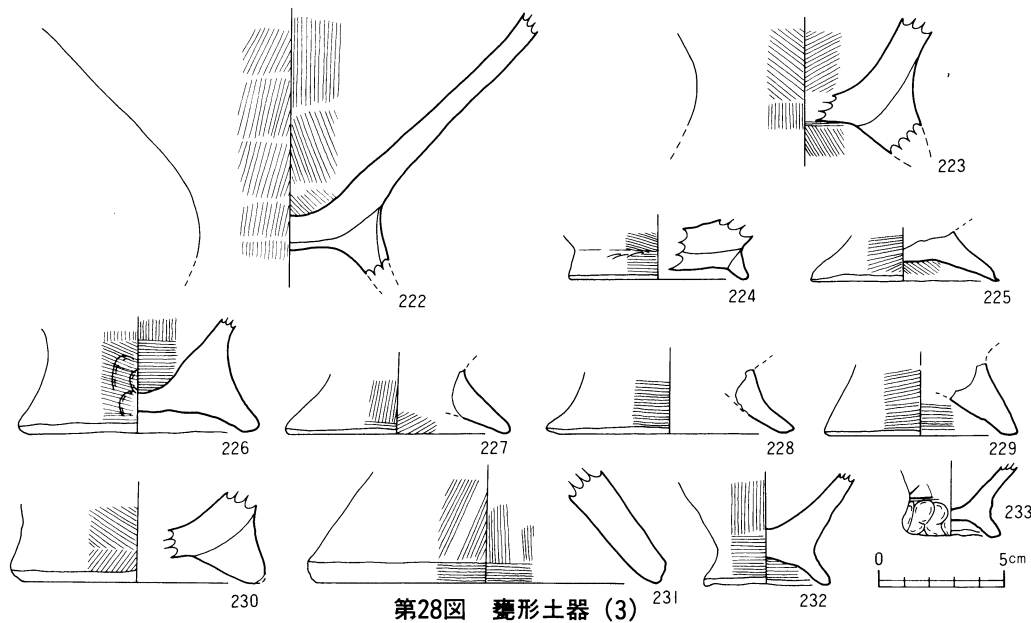
200と201は内彎する口縁部をもつ。刻み目が、前者は小さく狭く、後者は大きく広い間隔に施される。200は復原口径29.2cmで、突帯の周囲には横方向のナデ調整が見られる。

202～221は頸部または胴部上位に施された突帯を並べたものである。202～209は突帯に刻み目が施されている。突帯の形状も細く三角形状を呈するものから、厚く台形状あるいはカマボコ状をなすもの、刻みの大小や深さなど、種々のバリエーションが見られる。202～204・208・209は頸部に施されており、それ以外のものもほぼ同様な部位に位置すると思われる。

210～215は指頭圧痕の明瞭なもので、形状も三角形を呈する。216～221は三角形を基本として、やや台形状のものもある。何れを見ても、胴部がそれほど膨らまないことがわかる。

222～233は底部を集めたものである。222・223・231は脚台が高く、224～230は割合に低いものである。何れも体部とは別に脚部を貼り付けた様子がわかる。232は鉢、233は手捏ねの鉢と思われる。前者はナデ調整の痕跡が明瞭に残り、後者には指頭圧痕が顕著である。

甕形土器全般について、胎土は砂粒を多く含み、やや粗で、指宿地方特有の赤紫色に発色する粘土を用いるものが多い。調整もやや粗で、焼成もあまり良くないようである。

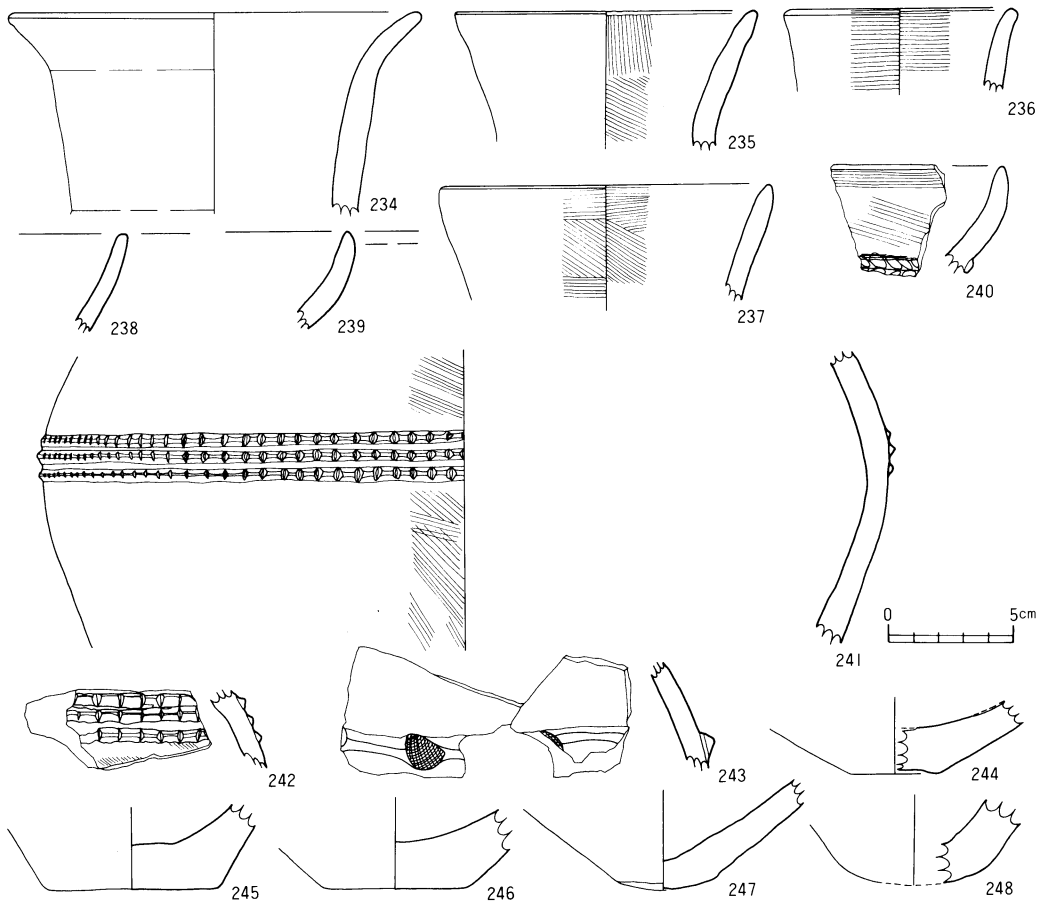


第28図 甕形土器 (3)

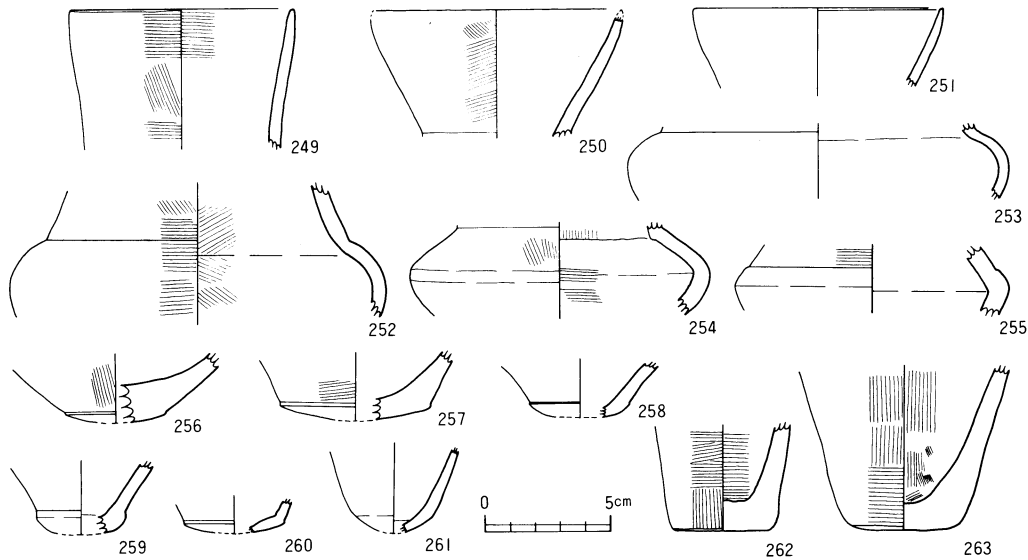
壺形土器 (234~248)

234は復原口径16.6cmで、口縁部がラッパ状に外反するものである。壺本体の肩部から小さく外反気味に立ち、丸まった口唇端部からやや下位のところで大きく外反している。外面にやや鈍い稜をもつものの、内面は緩やかなカーブを描く。235と236も外反する口縁をもつが、前者の口唇端部は丸まり気味の三角形で、内面上位が縦方向、下位が斜め方向のナデ調整であるのに対して、後者は丸味を帯びた四角形で、内外面共に横方向のナデ仕上げである。237は直口するもので、横及び斜め方向のナデ調整が見られる。238・239は内彎する。240も内彎するが、口唇下部に指頭圧痕の残る突帯を付す。241は胴部の張り出した部分に3条の突帯を付し、ヘラ状のもので同時に刻み目を施す。242も同様であるが、肩部に3条の刻み目突帯を付す。243の突帯には、幅の広い布目圧痕による刻み目が施される。244はやや上げ底、245・246は平底、249は尖底、248は丸底の何れも底部である。248は外面は凹凸が激しい。

胎土・焼成共に壺形土器よりも良好であり、色調は黄褐色を帯び、砂粒も細かい。



第29図 壺形土器



第30図 埴

埴 (249~263)

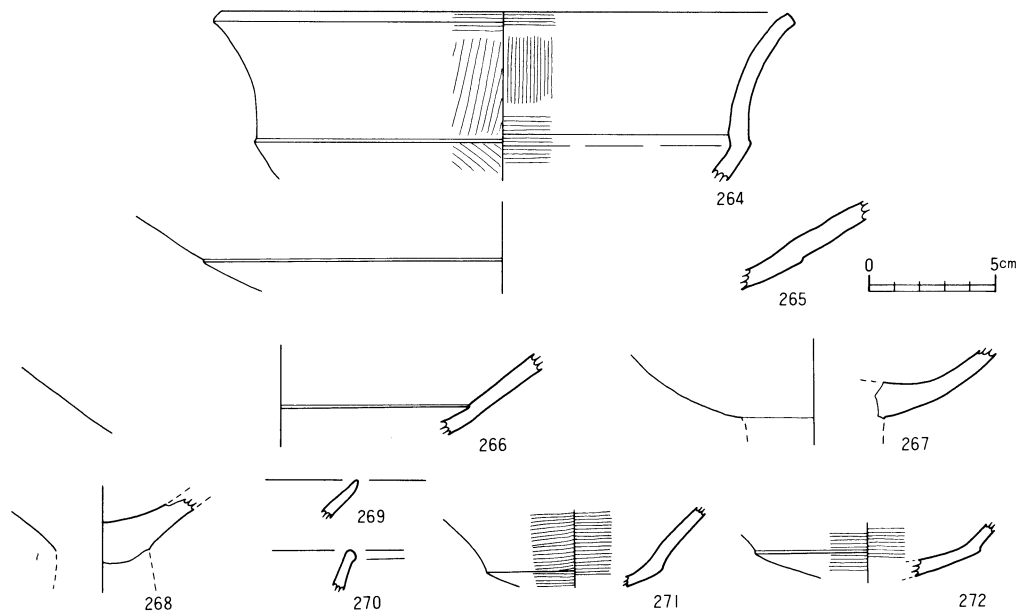
埴にはラッパ状に開く口縁に、丸い胴部で平底気味の丸底をもつものと、ほぼ直立する口縁から弱く膨らむ胴部をもち、丸底となるもの、コップ状に開く口縁に、底部に向けて直線的にすばまり安定した平底となるものの3タイプに大きく分けられる。

249~251は口縁部であるが、249はほぼ直立し、後2者はラッパ状に開くが、何れも口唇端部は鋭い三角形を呈する。調整は、横及び斜め方向のナデ仕上げである。

252~255は頸部から胴部にかけてである。252は内傾する口縁~頸部が長く立ち、外面に明瞭な段をもって大きく膨らむ胴部に至る。内面には鈍い稜をもち、底部は丸底と思われる。調整は横及び斜め方向のナデで仕上げる。253も252と同様なタイプと考えられる。254・255は何れも胴部がソロバン玉状を呈し、内外面には鈍い稜をもち、前者は頸部に明確な稜をもち、口縁部にかけて直立する傾向が窺える。後者は胴部上位に段を有する。

256~263は底部である。256~260は外面に段を有し、平底気味の丸底である。256・257・259は底部が肥厚するのに対して、258・260はそれほど厚くはない。261は丸底であるが、外面に鈍い稜をもち、262・263は何れもコップ状を呈する平底で、胴部の膨らみはなく、直線的である。調整は何れも横または縦方向のナデ仕上げである。

埴の胎土は、指宿地方特有の赤紫色に発色する粘土を用いるものが多く、砂粒を多く含み、ザラザラした感触をもち、色調も赤紫色を呈するものが多く、焼成は極めて良好である。



第31図 高坏

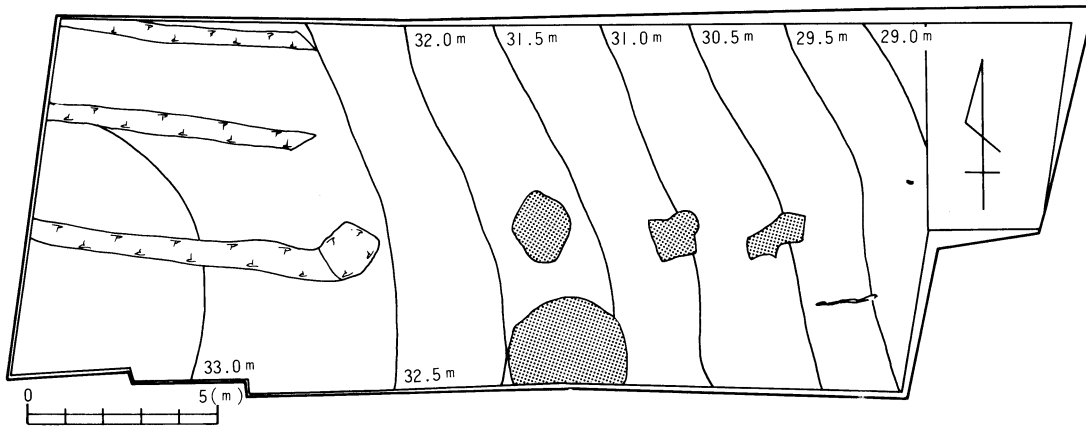
高坏 (264~272)

高坏には体部に稜をもち、深いものと、稜はあるが浅いもの、丸く深いものの3つのタイプに分けられる。また、在地性の粘土を用いたものと、極めて良質で、精製された黄色に発色する粘土を用いた典型的な土師質のものとの2種類がある。

264は、復原口径23.2cmで、体部下位に明確な稜を有する深い高坏である。口唇端部は四角形を呈し、高く外反する。調整は、外面口唇部が横位、口縁下が斜め気味の縦位、稜下部は斜め方向のナデ、内面は口縁上位及び稜下部は横位、口縁下は縦位のナデによって仕上げている。265と266は、共に浅い体部の高坏である。前者には外面に、後者には内面にそれぞれ明確な稜が見られる。265は残存する最大径が29.6cmを測り、割合に大型である。267は体部が深く丸まるもので、体部の最下位に穴を開けるようにして作り、脚部と接合する方法が採られている。それに対し、268は体部外面の最下位を凸状を作り、その周囲をナデ回して調整した後に、筒状の脚部と接合する方法によっている。体部の深さは不明である。

以上が在地性の粘土を用いて製作しているのに対して、269~272は典型的な土師質の粘土を使って作っている。269と270は口縁部であり、前者は口唇端部が鋭い三角形を呈し、やや上がり気味であるのに対して、後者はやや肥厚し、玉縁状となる。269は大きく傾き、270はやや立ち気味となる。271と272は何れも体部で、外面には明瞭な稜が見られる。器形的には264と同様と思われ、稜から口縁部にかけて内向気味に大きく外反し、稜から下位にかけてはほぼ直線的に浅くすぼまる。2点とも、内外面には丁寧な横方向のナデ調整が行われており、全体として非常にデリケートな仕上げが行われている。胎土には細かい砂粒を含むものの極めて良好で、焼成も良い。黄色~黄褐色を呈し、在地性の赤紫色を中心とした色調で、やや厚手に仕上げるものと好対照である。

第七章 古墳時代以降



第32図 古墳時代以降樹痕検出状況

第1節 概要

古墳時代以降の遺物はなかったが、当時の環境を知るものとして樹痕の検出を行った。7層の青ゴラ上面を検出した後、青ゴラを残しつつ埋土を取り除いた段階で凹凸が現われた。指宿市教育委員会の長期にわたる橋牟礼川遺跡の発掘調査により、この凹凸が木の根の状態を残すものとして認識されていたため、調査地全域にわたって樹痕の検出を行うことにした。また、段掘りの必要が出て来た段階で5層の紫ゴラ面でも同様な検出を行ったが、範囲が狭かったこともあって青ゴラ面ほどの成果は得られなかったものの、植物遺体を確認することができた。

第2節 樹痕

地形は西から東へ相当な傾斜で下っている。極めて小さい凹凸が調査地全体に見られた。木には、主根と側根があるものと、主根はなく側根だけのものがあるが、本遺跡で検出されたものが何れであるかの判断はできなかった。しかし、青ゴラ上面検出時に4か所の大きな凹みが見られた所（網目部分）については、各々が大木の根であろうと考えられた。全面を調査した段階で土中深く6層が入り込んでいるものが若干見られたが、ほとんどは直径5～15cm程度で斜め方向に埋土があったことから、側根をもつ木が大部分であったと推定される。木の根の痕が大量に広がることから、当時この地は中小の木々が密に生えた林であったと考えられる。その中であって、調査地点の南側ほぼ中央に検出された直径3mにも及ぶ樹痕は、検出面よりほぼ直に深さ1m以上にわたって埋土や炭化した木片が出土したことにより、相当大的な木であったろうと思われる。また、東端やや南側に検出された横に長い凹状のものは、直径約20cm、長さ約2mを測り、倒木の上に青ゴラが降下した後に内部の木質が腐食したために空洞化したと思われ、小さい枝等は痕跡が残らないことから割合に大きな木がコラにより倒されたものと推定される。また、中央やや北側を、幅約50cm、残存長約15mにわたって地形に沿って溝状に凹地が走ることから、小川のあとと思われる。このような凹地は、ほかにも随所に見られたが、何れも地形に沿っていることから雨水等の浸食による林の中を流れる小川だったと考えられる。



北側より



東側より



北側より



西側より

第33図 参考 樹痕検出状況

ま と め

新番所後Ⅱ遺跡は、指宿市十二町字尻垂ノ上に所在する。西方にある鰻池マールの外壁をなす標高約280mの山から緩やかに下りた山裾にあたり、標高は約32mである。本遺跡から海岸にかけて広がる台地には数多くの小河川があるが、流量は少ない。また、周辺には橋牟礼遺跡を始め、大山崎遺跡や新番所後遺跡、大渡遺跡などがあり、隣の揖宿郡山川町には成川遺跡があるなど、多くの遺跡が確認されている。

遺跡の土層は、橋牟礼川遺跡や成川遺跡などとほぼ同様な層の堆積が見られるが、2～4層、10層、15～16層などは欠失している。これは、旧地形の違いや地域差、土層の堆積以後の流失や耕作等による喪失などによるものであろう。ただ、開聞岳を噴出源とする紫ゴラや青ゴラを始め、暗紫ゴラ、黄ゴラ等は残っており、特に前2つのゴラは相当に厚く堆積している。また、今回13b層の灰色火山砂礫層が縄文時代晩期～弥生時代前期のある時期に発生したと推定され、有効な鍵層となる可能性が出て来たことの意義は大きいと言える。池田湖火山灰も部分的に確認したが、層厚が極めて厚く、全体を除去して下層を確認することはできなかった。

縄文時代晩期の遺物は14層から出土した。浅鉢形土器には、口縁部の形状が緩やかな山形をなすものと平坦に仕上げたものが見られ、何れも精製土器である。緩やかな弧状をなす山形口縁の直下に沈線を巡らし、内外面共に黒色に磨き上げたものには、外面の沈線部及び屈曲部に赤色の顔料が明瞭に残るものもあり、器面全体に顔料が塗彩されていたと推測できる。口唇部の4か所が山形に突起し、頂部に貼り付け装飾を施すものとしらないものがあり、それぞれ対をなすと思われる、頂部にはリボン状、頂部と頂部の中央部には鱗状の装飾が施されている。上部が内傾して径が細くなり、壺形土器の可能性が高いもので、鋭く細い沈線を縦と横に施し、更に十字状に削り出して文様を施し、全面に赤色顔料が塗られていた可能性が高いものもある。深鉢形土器は数時期に区分されると考えられ、上加世田式、入佐式、黒川式、刻目突帯文などの時期が考えられる。鉢形土器は器高の低い器形で、器面の調整方法の違いにより2種に区分が可能である。この種の底部には組識痕の圧痕が見られ、およそ黒川式期に帰属すると思われる。ほかに、土器片を転用した円盤状加工品も出土した。石器は、扁平打製石斧、磨製石斧、棒状石斧、石皿、叩石、軽石加工品などがある。主体をなす石斧は有肩石斧で、素材剥片を縦長・横長に取り出す傾向が見られ、欠損品が多く、また、主に刃部付近で長軸方向に残される磨耗痕が使用方法を推測する上で興味深い。加えて、欠損資料の多くが抉りの部分であることも注目される。石皿、叩石は共に花崗岩を用いており、軽石加工品は円盤状に加工した後中央部に円孔を穿ち、側縁部に細い沈線を1条巡らすというもので、注目に値する。

弥生時代中期の遺物は13層から出土した。甕形土器は、口縁部が逆L字状で、胴部はやや膨らみ、底部にかけてはほぼ直線状にすぼまり、底部は充実した脚台を持つ。口縁下部に3～4条の三角突帯を巡らすものが多いが、絡縄突帯を巡らすものや突帯のないものも見られ、若干の時期差のあることが考えられる。壺形土器は、胴部上位辺りに三角突帯や絡縄突帯を巡らす

ものとそうでないものがあり、底部は安定した平底である。口縁部は出土していない。

古墳時代の遺物は9層から出土した。甕形土器は口縁部が外反し、頸部に絡縄突帯を巡らすものと突帯を持たないものがある。胴部から底部にかけてやや膨らむものと平坦にすぼまるものがある。底部は中空となる高い脚台を有する。壺形土器は口縁部がラッパ状に開くもので、頸部から突帯を巡らした胴部にかけて大きく膨らみ、底部は丸底あるいは極めて不安定な平底である。甕は口縁部が外反して長く立ち、胴部が大きく膨らんで平底ぎみの丸底のもの、ほぼ直立する口縁から弱く膨らむ胴部を持ち、丸底となるもの、コップ状に開く口縁に、底部に向けて直線的にすぼまり、安定した平底となるものとの3タイプに分けられる。また、高坏は高い口縁部の下に稜を持ち、割合に平たく直線的に脚部に向かい、内面にも稜のみられるものが多い。脚部との接合には2つのタイプが見られる。これら古墳時代の土器に特徴的なことは、指宿地方特有の赤紫色を呈する粘土に多量の砂粒を混入し、ザラザラした感じを持つものが多いことである。これは、甕形土器や壺形土器などのような器壁の厚いものばかりでなく、甕や高坏などのように薄く作られるものにも見られる。

古墳時代以降の遺物は出土しなかったが、7層の青ゴラの検出により、樹痕を確認することができた。4か所ほどに大木の根と思われるところがあったが、ほとんどは直径5～15cm程度の斜め方向に延びる木の根と推定され、それらが調査区域全体に広がることから、当時この地は、中小の木々が密に生えた林であったと考えられる。木の根だけでなく、倒木と思われる痕跡も確認した。また、中央やや北側には、地形に沿って小川が流れていたと推定される箇所もあったほか、青ゴラが流水により削られた状況も数か所確認できた。これらは、青ゴラが堆積した後地形に沿って水が流れ、青ゴラが削られた結果小川と化したと推測される。また、平安時代の噴出物とされる紫ゴラの中に、化石化した木の葉やシダ類などの植物遺体が確認され、当時の植生や環境を探る上で貴重な発見であったといえる。

ところで、本遺跡から出土した遺物は、地形が22%にも及ぶ東方向への急傾斜の地で確認されたことから、人為的な造成の跡といえる遺構が全く見られなかったことを併せ考えるとき、西側からの転落以外には考えられない。それを証明するように、現地形で西側に比高差約20mの丘があり、その近辺に集落跡を考えることはそれほど無理なことではないように思われる。また、古墳時代以降平安時代の紫ゴラの堆積までの間も人が住んだ形跡は見られず、木やシダ類などの植物遺体を確認したことから鬱蒼とした森林であったと推定される。この東側への急傾斜から考えると、人が住むような場所とは考えられず、山林化は当然のことと言えるだろう。

以上述べて来た本遺跡の時代変遷をまとめると次のようになろう。池田湖火山灰が厚く堆積した約5500年前以後久しく人の住まない時代が続いたが、縄文時代晩期になると西側の丘陵に集落が形成され、そこから遺物が転落して来た。その後、開聞岳の噴火によるものか人の姿は消えた。弥生時代中期に再び集落が出来たが暗紫ゴラの降下によるものか人は去った。その後、古墳時代には人が移り住んで来たが青ゴラの降下によってか集落は途絶えて森林と化した。そして、平安時代の紫ゴラによりそれらの木々も厚くパツクされ、長い眠りについてしまった。

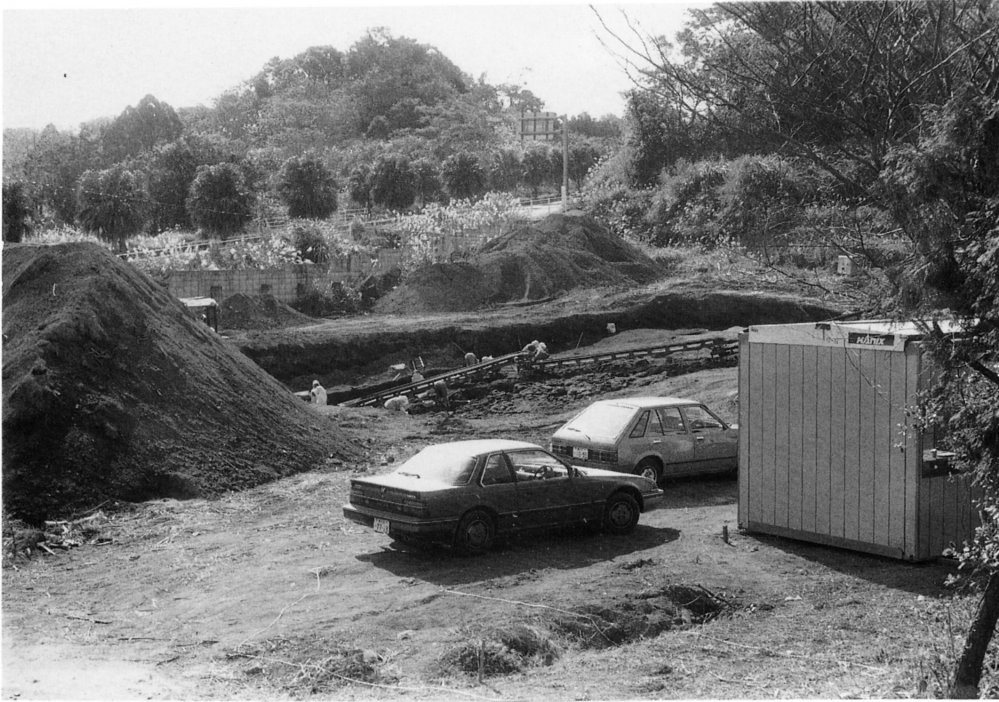
版 圖



遺跡遠景（魚見岳より）



遺跡近景（国立指宿病院より）



遺跡近景（遺跡東側より）



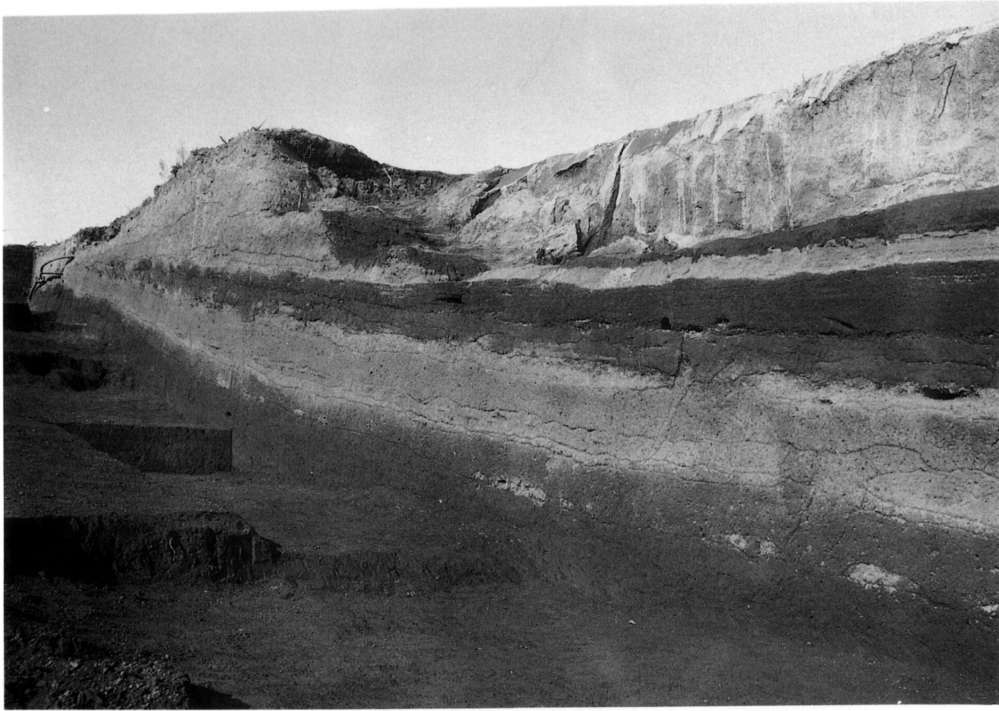
遺跡近景（西側より）



調査風景（東側より）



調査風景（西側より）



土 層 (全体)



土 層 (中央部)

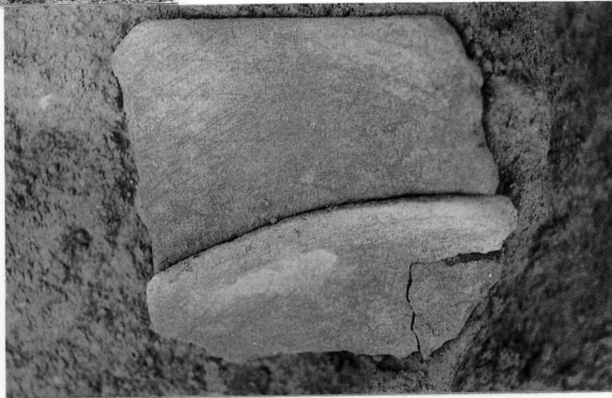
浅鉢



浅鉢



浅鉢



浅鉢

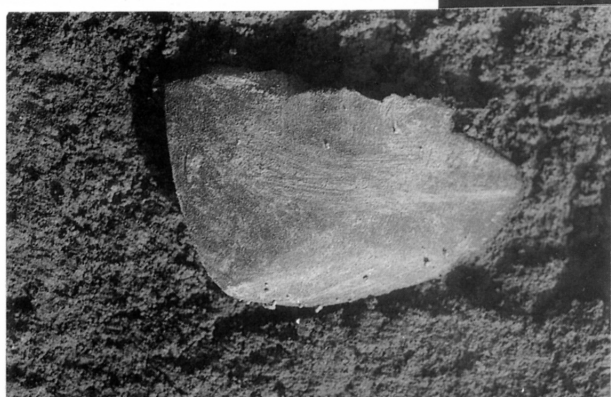


縄文時代晩期遺物出土状況 (1)

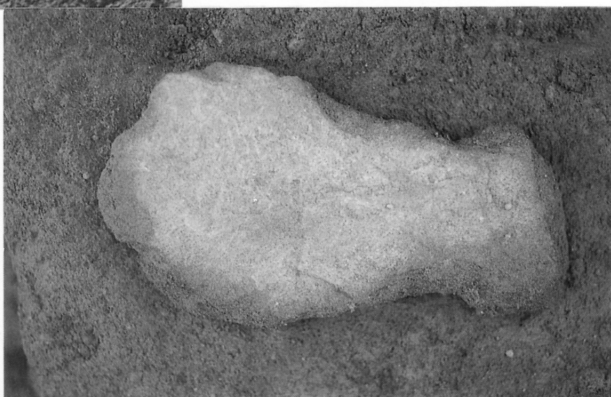
深鉢底部



磨製石斧



打製石斧



打製石斧



縄文時代晩期遺物出土状況 (2)

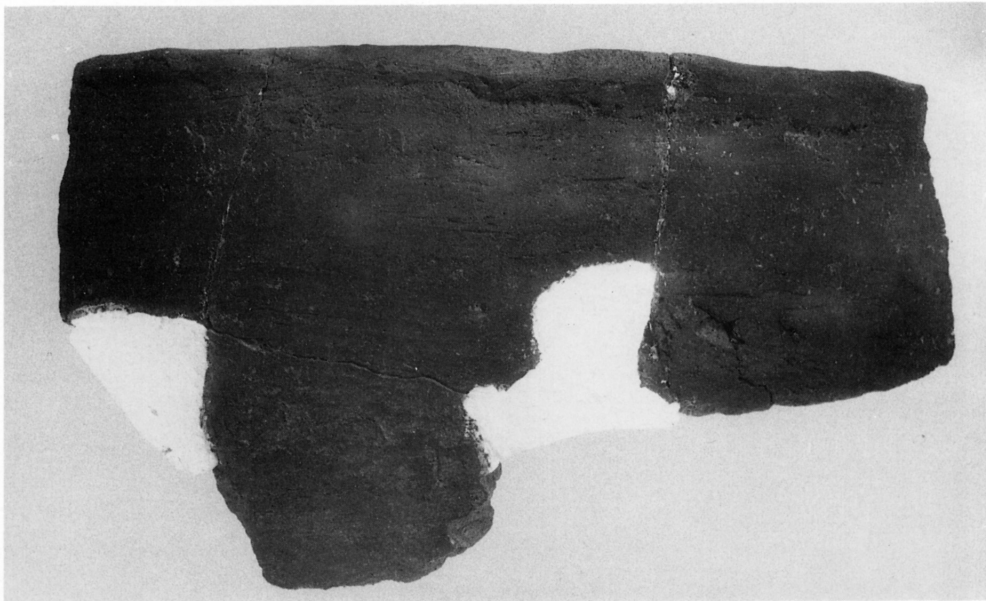
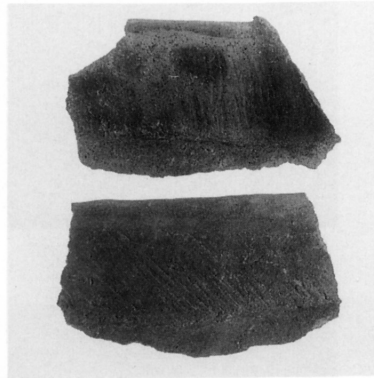
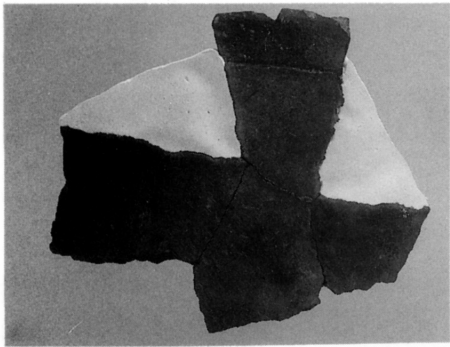


北側より

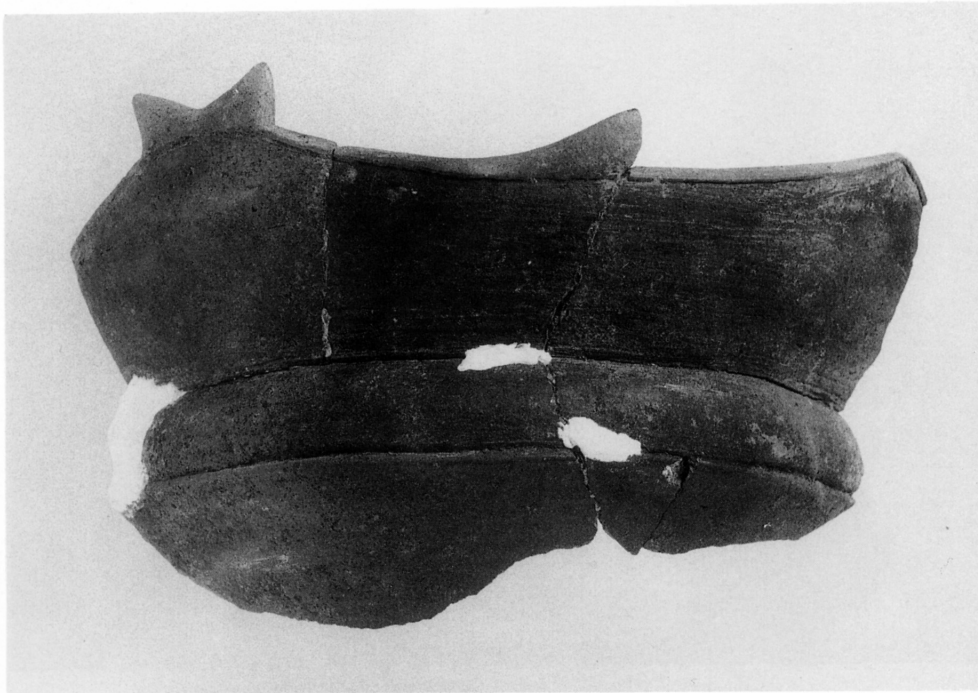
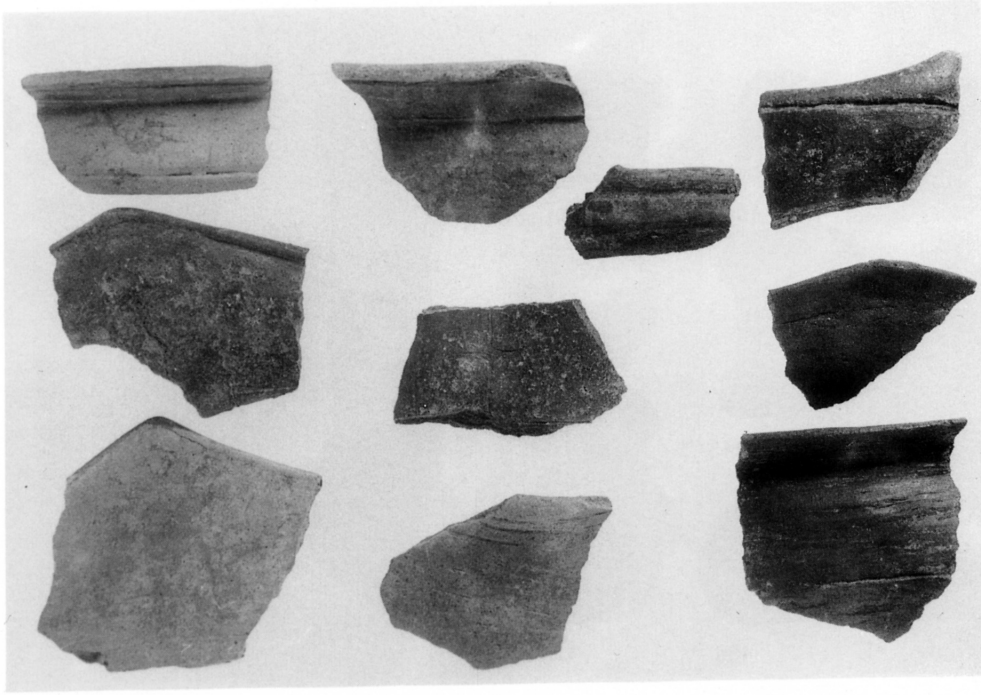


東側より

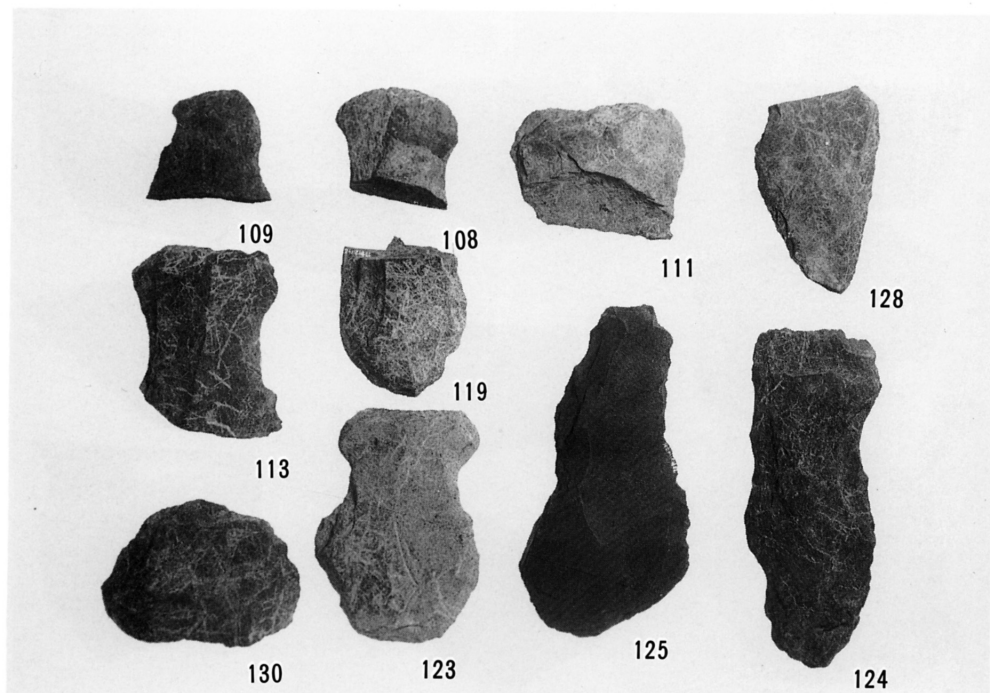
古墳時代以降 樹痕検出状況



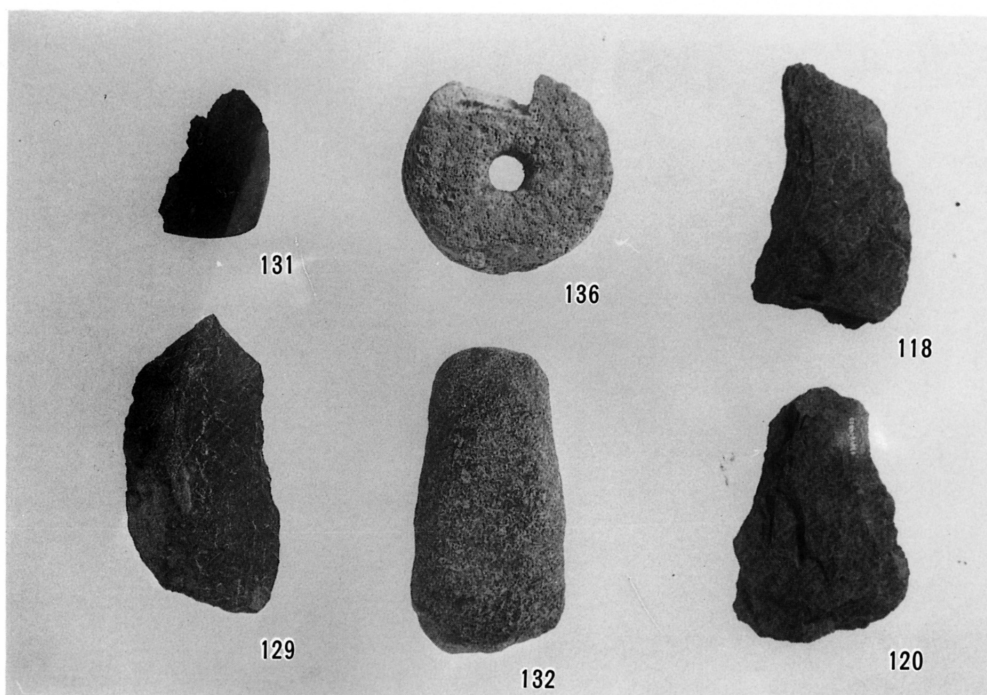
縄文時代晩期土器 (1)



縄文時代晚期土器 (2)

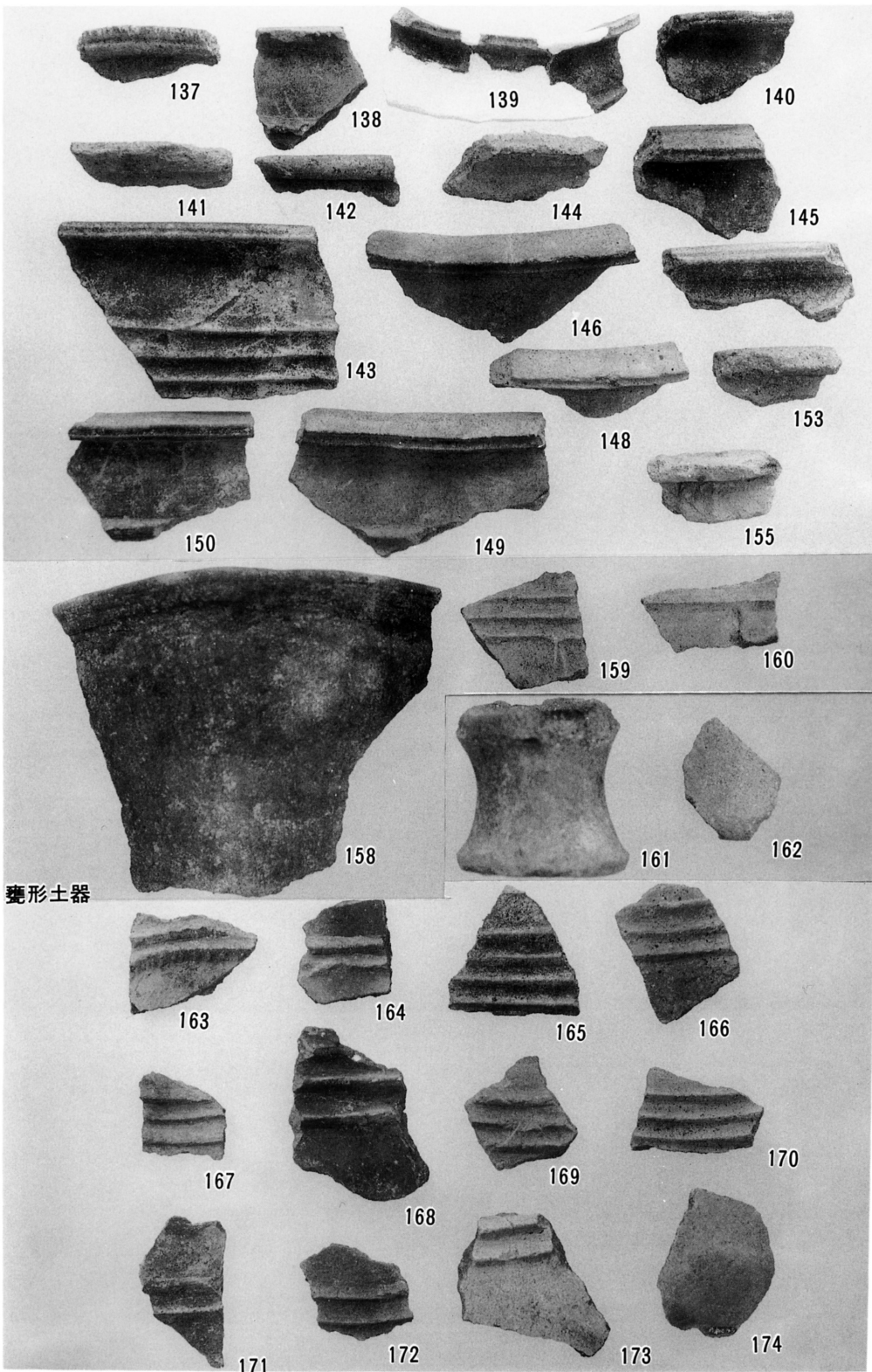


打製石斧



磨製石斧ほか

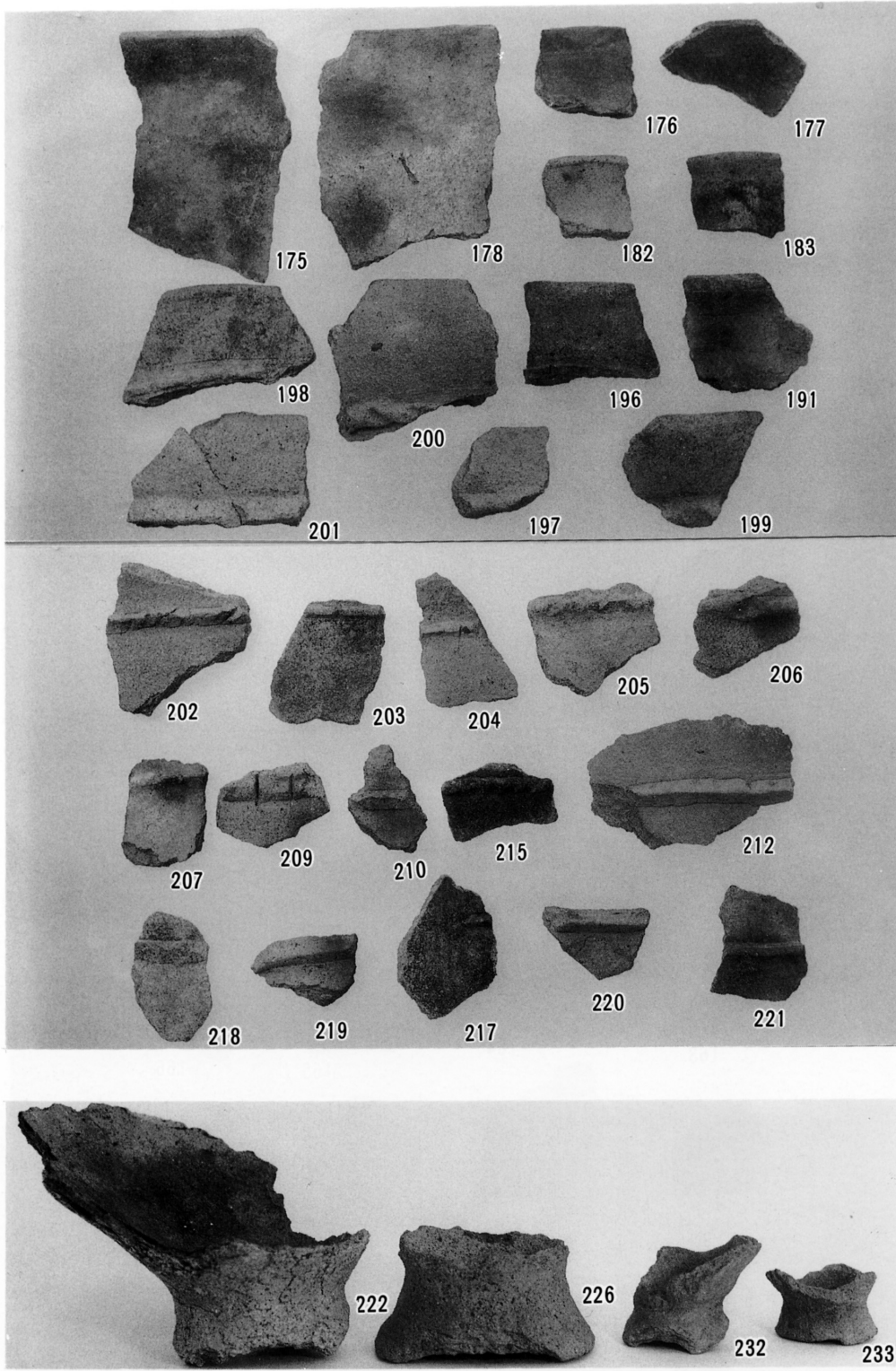
縄文時代晩期石器



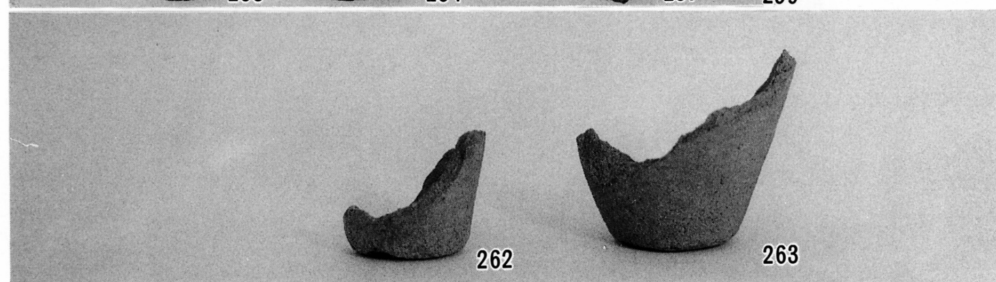
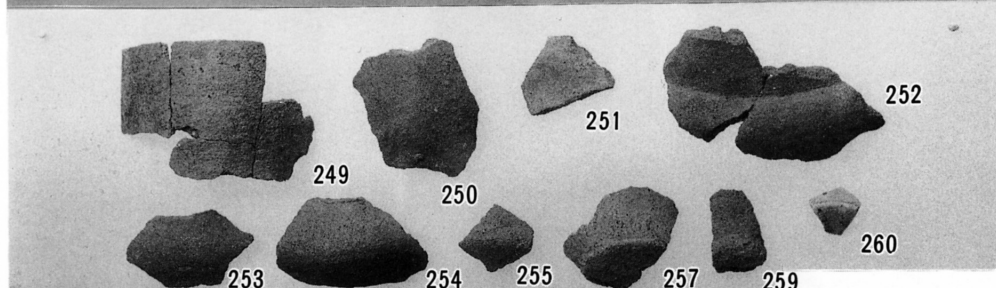
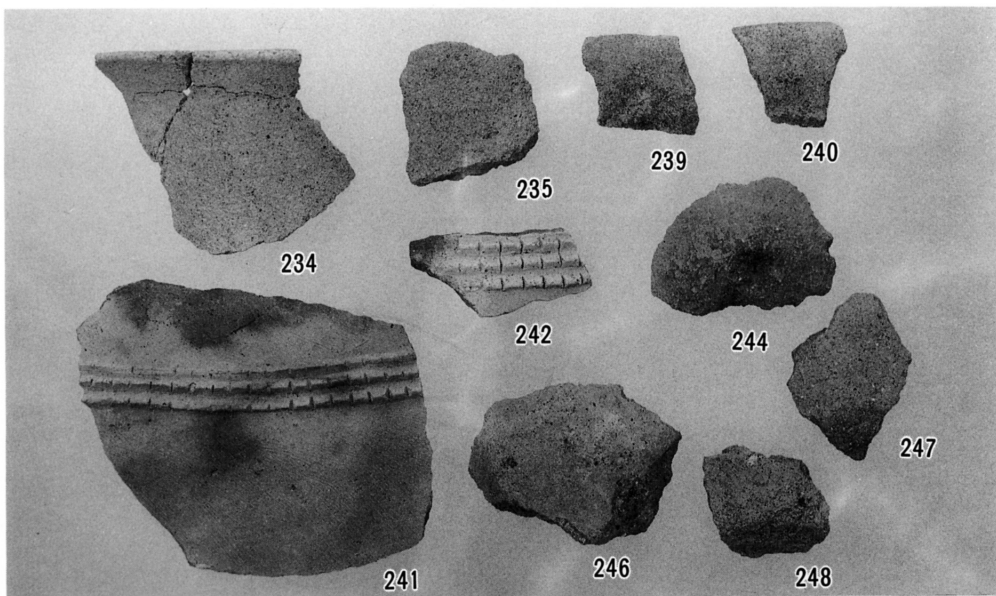
甕形土器

壺形土器

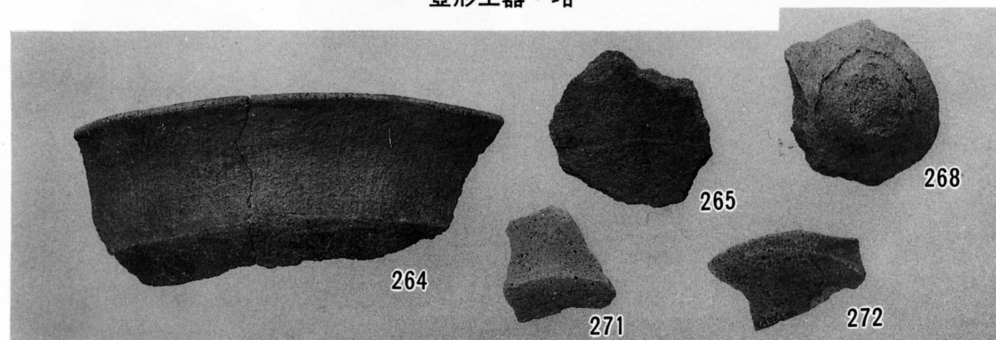
弥生時代中期土器



古墳時代土器 (1) 甕形土器

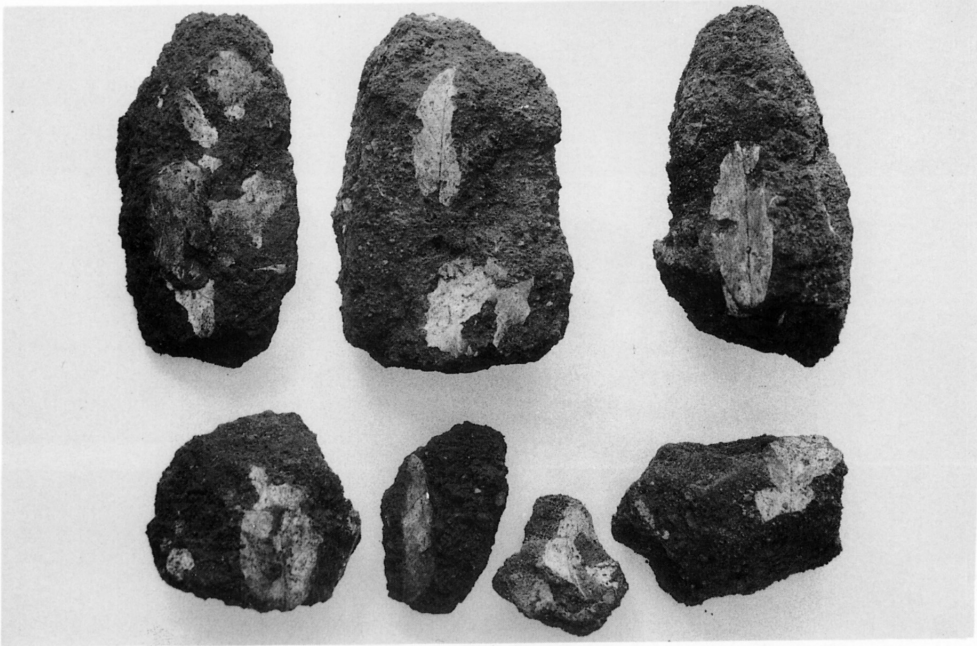
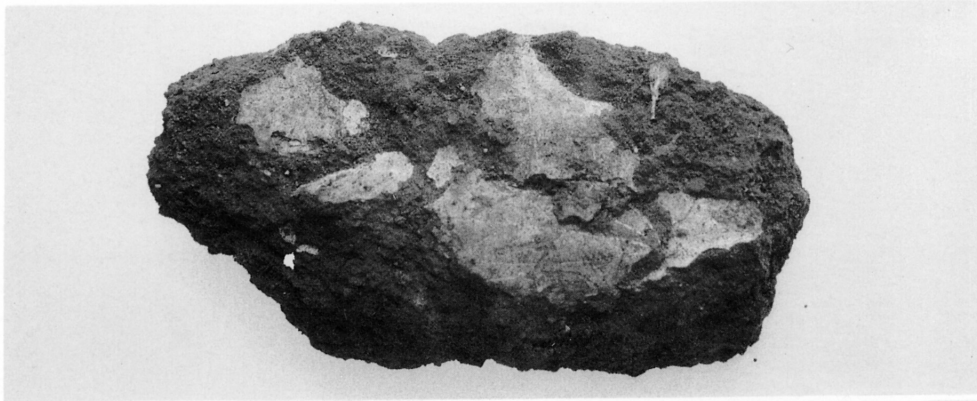


壺形土器・柑

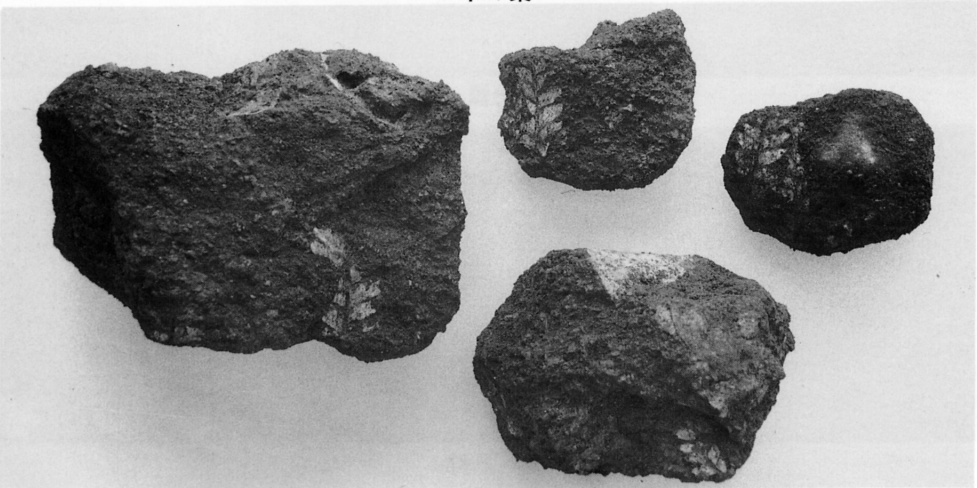


高 坏

古墳時代土器 (2)



木の葉



植物遺体

シダ類

あ と が き

10月下旬の指宿地方は、その年の冬が暖かいことを暗示するかのよう温暖な日が続いた。調査開始の日もそうだった。1か月の予定で入った調査で、西側から表土を剥いで行き、すぐに池田シラス層が出て来た時には「楽勝」と決め込んでいた。東側に向かうにつれ深くなって行く事実を目の当たりにしつつも——。それが、最深部で5.5mもの深さになること、排土量が膨大となること、そして期間を1か月間延長せざるを得なくなることなど、誰が予想しえただろう……………。

車の通りが多く、かまびすしい外界にあって、遺跡は静かに眠っていた。朝の作業開始と共にベルトコンベアーの発電機にスイッチが入り、パワーショベルが唸りを上げる。排土作業のマルチローダーまで動き出すと、遺跡の中は騒々しさに包まれる。時としてベルトコンベアーを移動する掛け声も響く。電話の呼び出しの音もかき消されてしまう。ただ、静寂を取り戻す一瞬があるとすれば、全体写真を撮影する時と休息・休憩時のみ。そして、一日の作業の終わりと共に人影が消え、もとの静けさに沈んでゆく……………。

調査は順調に進んだ。開聞岳から噴出した、亀の甲羅のように堅いことから名付けられたといわれる「コラ」が4枚も堆積しており、中でも開聞岳噴火の最後を飾る紫ゴラは、傾斜地にもかかわらず厚く厚く堆積していた。青ゴラも相当に堅かったが、幸いに当時の林の様子を樹痕という形でバックしてくれていた。古墳時代・弥生時代は、西側の丘から転落して来たと思われる土器が出土した。縄文時代晩期の遺物は、石器の破損したものも転がって来ていた。そしてパンケースで23箱にもなった。この陰には、発掘作業に携わって下さった作業員の方々の地道な努力がまず挙げられる。記して感謝の意を表したい。また、指宿市教委の下山・知花・渡部各氏や、近景写真撮影のために屋上に案内して下さった国立指宿病院の黒瀬事務長さんなど各方面の方々にお世話になった。併せて感謝する次第である。

発掘作業員 山野ツル・高峯キヨ・豊崎キクエ・水流ツヤ子・中谷良子・一氏佳子・
豊留キミエ・大吉サエ子・山王久江・伊脇聖子・宮田律子・上川路ミエ・
有里ユキエ・中川路あさ子・井上美鈴・山口忠子
整理作業員 相良政子・東志津子・野入満喜子・郷司山いつ子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (62)

新 番 所 後 II 遺 跡

平成 4 年 3 月

発行 鹿児島県教育委員会
〒892 鹿児島市山下町14-50

印刷 株式会社秀巧社印刷
〒890 鹿児島市新栄町25-7
☎ (0992)57-3300 (代)